

レクリエーション研究

第10号

〈原著論文〉

- ・河川空間におけるレクリエーションの研究
..... 鈴木 誠
- ・野外レクリエーション活動の入込が地域社会
に及ぼす影響に関する調査研究
— 特に地元中学生の意識を中心に —
..... 高野 透・池田 勝
- ・レクリエーション・エリア利用者の
レジャー行動に関する研究
..... 原田宗彦, ジョfrey・C・ゴッドベイ, デビッド・R・チエイス

〈第12回学会大会報告〉

- ・研究発表
- ・講演「高齢化社会における余暇」
..... ジョン・R・ケリー(西野 仁訳)
- ・専門分野別シンポジウム(政策研究分野)
「シニア・エイジのレクリエーション行政とその展開」
..... 浅田隆夫・秋吉嘉範・諫山秋利・吉田隆幸・金崎良三

〈昭和57年度研究会報告〉

- ・講演「レジャー・カウンセリングについて」
..... ピーター・A・ウィット(田中祥子・池田 勝訳)
- ・連続シンポジウム
「わが国におけるレクリエーション学の体系化に関する研究」
 - (1) レクリエーション学の体系化の方法と戦略
..... 鈴木忠義・進士五十八(報告 麻生 恵)
 - (2) レクリエーション学の対象と方法
..... 西野 仁・山崎 進・前野淳一郎・今井 毅(報告 石橋宏宣)
 - (3) レクリエーション原論を中心として
..... 川村英男・近藤英男・浅田隆夫・蕪木 隆(報告 蕪木 隆)
- ・研究発表「レジャー・レクリエーションに関する
短期大学・大学・大学院等の卒業論文発表会」

〈昭和57年度支部研究活動報告〉

- ・近畿支部
- ・九州支部

— *** —*** —*** —

〈学会通信〉

- 〈日本レクリエーション学会会則他諸規定〉
- 〈「レクリエーション研究」投稿規定〉
- 〈編集委員会〉

日本レクリエーション学会

昭和58年3月

河川空間におけるレクリエーション活動の研究

鈴木 誠*

A Study on Recreation Activities in Rivers and Riversides

MAKOTO SUZUKI*

The purpose of this study was to search out some basic knowledge and criteria for the recreation planning of water front spaces, especially rivers and riverside. The process of the study basically divided into two steps: 1. Defining the river and riverside as a recreation space with its specific characters by means of examining the existing literature and reports; 2. Research on images of rivers in the consciousness of 1287 residents living in Edogawa ward Tokyo. And examine the results with the former research efforts.

On the basic knowledge of river spaces for outside recreations through the study (Step 1), it was briefly concluded that:

1. People can enjoy the great variety of outside recreation activities in rivers and riversides.
2. River spaces are very important as our ordinary recreation area.

The results of the research (Step 2) were summarized as follows:

1. Three types of riverside recreation activities were found out such as the wide river type, the narrow river type and the common type. And seventeen recreation activities were classified into those three types. (See Table 3)
2. The characteristics of the riverside recreation activities were made clear by means of Theory of Quantification (III) analysis and cross analysis on each sex and ages of the desired riverside recreation activities. The results were made into a checklist for the river recreation planning. (See Table 6)

1. はじめに

近年河川のレクリエーション空間としての役割が再認識され、河川改修や治水施設の設置に伴って、河川敷公園や環境護岸などによるレクリエーション利用性の付与がおこなわれる例が増えつつある。この背後には、川のもつ都市域に唯一残されている広大な自然地としての重要性、オープンスペースとしての価値などの認識があり、都市住民にとって身近なレクリエーション空間として川が意識されているものといえよう。

このような状況のなかで、本研究は、レクリエーション空間資源としての河川像を探求し、都市住民にとって最も身近な水辺空間である河川のレクリエーション

空間計画策定に役立てようとするものである。

研究の展開は、レクリエーション空間資源としての河川の意味を多角的に考察すると共に、筆者らがおこなった河川レクリエーションに関する意識調査から得られた結果の分析と、既存の川に関する諸調査研究報告の主要なものとを比較検討し、それらを総合化することによっておこなった。

2. レクリエーション活動の対象としての河川

レクリエーション活動の対象となる川について三つの側面から考察することにする。

まず、河川空間で可能な野外レクリエーション活動について検討を行なう。「レジャー白書'80」¹⁾に示され

* 東京農業大学造園学科 (Tokyo Univ. of Agriculture)

ている野外型余暇活動の人口推計では、旅行・行楽部門で人口の多い順に「その他の日帰り行楽」、「ドライブ」、「海水浴」、「ピクニック・ハイキング」、「遊園地」、「釣り」となっている。「ピクニック・ハイキング」及び「釣り」については、河川空間は直接に活動の対象となる可能性があり、「その他の日帰り行楽」では花見等として間接的な活動対象空間となると考えられ、レクリエーション需要に対応した河川空間の特性がみてとれる。水泳のできる水質が確保されるなら、「海水浴」に準じた水辺レクリエーション活動空間としてとらえることもでき、そのレクリエーション空間としての多様性を認識し得る²⁾。また、同白書によると屋外スポーツ部門では「キャッチボール・野球」、「ジョギング・マラソン」、「ソフトボール」、「バレーボール」、「サイクリング」について上位5位の人口が推定されている。河原や土堤での草野球やジョギング、サイクリングの風景を目に浮かべると、スポーツ・運動のための空間としての河川の役割の重要性を認識することができる³⁾。

この調査資料には、最もポピュラーな野外レクリエーション活動の一つである「散歩」が含まれていないが、同様な調査による「レジャー白書'77」⁴⁾によると、旅行・日帰りレジャーにおいて泊りがけの旅行や屋内レジャーを除いたものの内、活動推定人口の多い上位三つは、「海水浴」、「ドライブ・ピクニック」、「散歩」となっている。この結果を引用せずとも、散歩が川辺における人気のあるレクリエーション活動の一つであることは周知の事実とされよう。

さて、同白書82年版⁵⁾ではファミリーレジャーを特集しているが、ファミリーレジャーを参加率と活動頻度から分類し、④日常型ファミリーレジャー、⑤非日常型ファミリーレジャー、⑥家旅活動が普及していないレジャー、⑦マニア型レジャーとし、⑧に散歩、⑨に釣り、お花見、水泳、ピクニック、⑩にサイクリングを含めている。これらが、河川空間で充足可能であることを考えると、レクリエーション空間資源としての河川は極めて多様性に富んだ空間といえることができる。

次に、いわゆる「水辺空間」のなかでの河川空間の位置付けについて考えてみる。環境庁が全国の環境モニターにアンケートした「身近な水辺」についての調査結果⁶⁾によると、日頃利用している水辺の有無を聞いた設問に対して、遠近を問わずよく出かけたり利用したりしている水辺があるという回答が67.6%あり、その水辺の内訳は①「大きな川」(30.9% SA)、②「小河

川」(19.8%)、③「海(砂浜)」(15.8%)、④「農業用水路」(11.4%)、⑤「海(岩礁、磯)」(6.0%)、その他となっている。農業用水路も一般には小河川として意識されるであろうことを考えると、「大きな川」、「小さな川」がそれぞれ3割づつを占め、日頃利用する水辺空間の6割が河川ということになり、水辺レクリエーション活動を担う空間としての川の重要性がわかる。因に、この調査では⑥「公園の池・噴水」(4.9%)となっている。

以上のべてきた考察の対象は成人であったが、つぎに三番目として、子供の遊びを中心とした川のレクリエーション利用について検討を加えてみよう。明治初年から昭和48年にかけての子供の遊びを、全国2万人にのぼる調査データを基に考察した半澤の研究⁷⁾によると、まだ川がきれいだった戦前までの子供の遊びで夏季に人気のある上位のものは、男児で①水泳、②魚採り、③昆虫採り、④水遊び、⑤川遊び、⑥野球、女児では①水泳、②水遊び、③魚採り、④昆虫採り、⑤ままごと、⑥川遊びであるという(表1)。川での遊びとして「川遊び」が上位にあるが、「ままごと」を除いた他の遊びについても川、又は河原や土堤を舞台としたものであったことがうかがわれ、⁸⁾当時の夏の子供の遊び場としていかに川が重要であったかがわかる。また、夏以外の春、秋にも川や河原で可能な遊びは人気があったようだ。(表1参照)

戦後についてもみてみよう。昭和20年～48年までの調査結果で夏の遊びは、男児①魚採り、②水泳、③野球、④昆虫採り、⑤ソフトボール、⑥水遊び、となり川遊びは⑦位になる。女児では①水泳、②水遊び、③昆虫採り、④魚採り、⑤花火、⑥ゴム飛び、となり川遊びは⑨位である。川遊びの順位の低下は戦後、特に昭和30年代後半より急激に進んだ川水と河川環境の汚濁が原因とも考えられるし、過保護などといった社会生活規範の変化によっても考えられる。しかしながら夏の子供の遊びにとって、水辺空間が求められていることにまちがいないだろうし、またその水辺が身近な自然水によって彩られていることが望ましいといえるだろう。

以上、既往文献、研究をもとに野外レクリエーション活動の現状からみた河川空間の意味、水辺利用からみた河川空間の位置付け、子供の遊びに対応した河川空間の意味などについて考察した結果、野外レクリエーション空間としての河川空間の多様性と、日常レクリエーション空間としての重要性が明らかとなった。

表1 川に関係した子供の遊び
Table 1. Children's plays related to rivers

季節	明治1年～昭和20年		昭和20年～昭和48年	
	男児	女児	男児	女児
春	① さかなとり ② えびかにとり ④1 かわあそび ④7 ふねあそび ④8 みずあそび	④14 さかなとり ③0 えびかにとり ③3 たにしとり ④1 みずあそび	① さかなとり ③6 ざりかにとり ⑤6 かいぼり	②7 さかなとり ③1 おたまじゃくしとり
夏	① すいえい ② さかなとり ④ みずあそび ⑤ かわあそび ⑬3 ふねあそび ④4 えびかにとり ②4 ほたるがり ④6 いかだながし ⑤1 かえるとり	① すいえい ② みずあそび ③ さかなとり ⑥ かわあそび ⑬3 ほたるがり ②4 えびかにとり ②6 ふねあそび ③1 ささふね ④8 かえるとり	① さかなとり ② すいえい ⑥ みずあそび ④4 ふねあそび ④7 かわあそび ④9 かえるつり ②1 ほたるとり ③8 かいぼり ④3 いかだあそび	① すいえい ② みずあそび ④ さかなとり ⑨ かわあそび ④7 ほたるとり ②9 ささふね ③4 しじみとり ③7 かいぼり ④4 かえるつり
秋	④11 さかなとり	③0 さかなとり ⑤8 ふねあそび	②2 さかなとり	
冬	④2 さかなとり		③8 どじょうほり	

注) 半澤敏郎「童遊文化史」(1980)のデータをもとに作成
表中の番号は子供の遊び上位60種の内の順位を表わす。

3. レクリエーション活動空間として望ましい河川像

レクリエーション活動空間として望ましい河川像を求めるため、質問紙法による意識調査⁹⁾をおこない、その結果と他の同様な調査結果を比較検討して考察する。

調査の実施に先だって調査対象地区の河川現況について、住民数人をまじえた検討をおこなった。その結果、河川という一般的イメージにも、その大きさにより異なることがわかった。そこで、調査対象者にとってイメージし易い、大河川及び小河川という二つのレベルを設定して調査をおこなうことにした。

(1) 調査の概要

調査は、1982年2月20日～3月8日まで、東京都江戸川区において区内の地域リーダー1,835名を対象に実施した。方法は、質問紙による。用紙配布は郵送と直接配布の二本だてでおこない、回収は郵送による。回収率は70.1%、1,287票。設問は35項目の多岐にわたるが、本研究に係わるものは主として「水辺レクリエーションに対する希望」の項目である。

(2) 調査地区と対象者の概要

調査対象地区である江戸川区には、大きな川として

江戸川(400～500m)、旧江戸川(100～250m)、荒川・中川(約550m・150m、接して流路をもつ)、新中川(約120m)、及び旧中川(60～100m)があり、代表的な小河川として新川(30～38m)、小松川・境川(7～25m)、古川(親水公園、6～12m)がある(括弧内の数字は川幅)。また、調査結果から得られた回答者のプロフィールとして約60%の人々が大きな川から500m圏域内に住み、約25%の人々が上記の代表的な小さな川の流れる町に住んでいる。大きな川への到達時間では、約50%の人々が歩いて5分以内の距離に住んでいる。そして、調査対象が地域リーダーである性格上、8割以上が親しめる川づくりに強い関心を示している。

(3) 調査結果と考察

(i) 川の大きさとレクリエーション

大河川、小河川それぞれで「してみたい水辺レクリエーション」について、18項目の選択肢を用意し三つまで選んでもらう複数回答式(3LA)により調査した(図1)。

「大河川でしてみたいレクリエーション」をみると、「川辺の花見」(34.4%)、「魚釣り」(32.6%)、「打ち上げ花火」(31.0%)、「散策」(30.4%)について3割を越す人々が希望していることから、これらが、大河川に求められる主要なレクリエーションであるとする

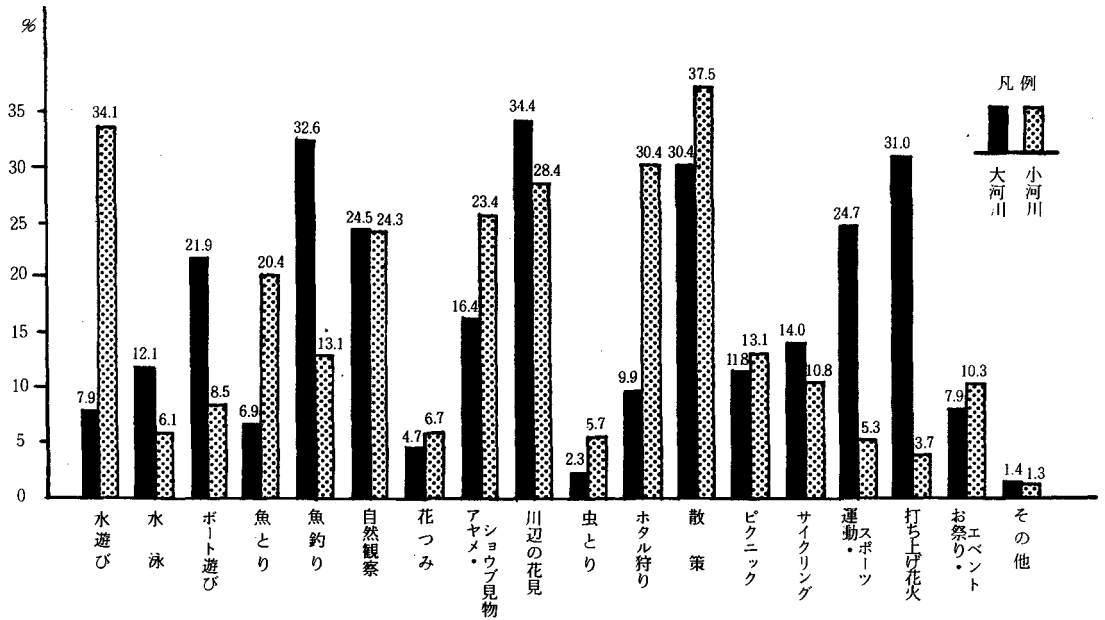


図1. 大河川と小河川に希望するレクリエーション

Fig. 1. Difference of desired recreations between wide rivers and narrow rivers.

ことができよう。

次に小河川の結果であるが、「散策」(37.5%)、「水遊び」(34.1%)、「ホタル狩り」(30.4%)の三つが3割を越え、次いで「川辺の花見」(28.4%)が多くあげられている。いずれも小河川におけるレクリエーション活動の代表と考えられるが、ここで他の同様な調査結果との比較により考察を深めることにする。

「河川環境に関する文献調査」¹⁰⁾に見られる意識調査をおこなった10点の報告書を検討し、そのうちで河川レクリエーションについての調査項目のあるもの6点の調査報告と、同書にはないが同様な調査を実施している5点の調査報告から、調査結果にみられる河川レクリエーションの傾向を分析した(表2)。

まず、江戸川区での調査内容と同様に、河川でのレクリエーション希望を調べた大阪市の調査をみても。「都市河川に対する住民の親水意識」²⁷⁾によると、近くに適当な場所があればしたいレクリエーション活動11項目中の上位5番は、「川沿いの花見や散策」(90.0% MA)、「ホタル狩り・トンボとり」(85.6%)、「アヤメ・ショウブの見物」(85.4%)、「魚釣り」(77.0%)、「魚とり」(75.0%)等となっている(表2)。

この調査には、「打ち上げ花火」という項目がないので比較できないが、「川辺の花見」、「魚釣り」、「散策」

の三つについては、江戸川区での調査と同様な結果となっている。しかし、「ホタル狩り」、「アヤメ・ショウブの見物」への反応では異なる結果を示している。これは大阪市での調査が川の大きさによる河川像の違いを設定せず、一般的川に対するレクリエーションの希望を聞いているのに対し、江戸川区における調査では河川のスケールレベルを二段階に分けていることに帰因すると思われる。それは、大阪市の調査の第2位にあげられる「ホタル狩り」が、江戸川区の小河川の第3位であり、大河川においては第12位になっていることからうかがえる。

この他に横浜市鶴見川と東京都多摩川でレクリエーションの希望を調査しているが、それぞれ子供を対象としていて同レベルでの比較考察には無理がある。そこでむしろ子供の望む河川レクリエーション活動として捉え参考とする。鶴見川²⁸⁾では上位5位が、「魚とり」(64.6% MA)、「ボート遊び」(57.9%)、「水遊び」(52.5%)、「水泳」(50.8%)、「花火」(41.0%)、多摩川²⁹⁾では「水泳」(23.5% FA・MA)、「つり」(19.8%)、「水遊び」(10.7%)、「ボール遊び」(8.5%)、「跳び回れる遊び」(6.6%)となっている。因に江戸川区の10代(ジュニア・リーダー)に望まれている河川レクリエーション活動をみると、大河川で「ボート遊び」(59.2%)、

表2 各種調査にみられる河川レクリエーションの順位 (11)～(26)
 Table 2. Rankings of recreations in rivers through sixteen researches

調査対象(川幅約m)	調査内容・年代	順位					備考
		1位 (%)	2位 (%)	3位 (%)	4位 (%)	5位 (%)	
① 江戸川区・大河川 (60～400)	希望 (3LA)・1982	川辺の花見 (34.4)	魚釣り (32.6)	打ち上げ花火 (31.0)	散策 (30.4)	運動・スポーツ (24.7)	
② 江戸川区・小河川 (6～38)	希望 (3LA)・1982	散策 (37.5)	水遊び (34.1)	ホタル狩り (30.4)	川辺の花見 (28.4)	自然観察 (24.3)	
③ 大阪市・市内河川 (淀川他)	希望 (MA)・1980	川沿いの花見 や散策 (90)	ホタル狩り トンボとり (86)	アヤメ・ショウ ブの見物 (85)	魚釣り (77)	魚とり (75)	「花火」なし
④ 鶴見川流域・鶴見川 (100～160)	希望・子供 (MA)・1980	さかなとり (64.6)	ボート遊び (67.9)	水遊び (62.5)	水泳 (50.8)	花火 (41.0)	「散歩」、「釣り」なし
⑤ 多摩川沿川・多摩川 (400)	希望・子供 (FA・MA)・1972	水泳 (23.5)	つり (19.8)	水遊び (10.7)	ボール遊び (8.5)	跳び回れる遊び (6.6)	都内の4～6年生
⑥ 多摩川沿川・多摩川 (400)	実態 (SA)・1981	散策 (17.8)	ピクニック (17.8)	野球 (12.3)	釣り (12.3)	休憩 (12.0)	「花見」、「花火」なし
⑦ 木曾川下流域・木曾川 (700～930)	経験 (5LA)・1982	観光・祭・ 花火見物 (61.0)	行楽・ サイクリング (57.8)	スポーツ (45.0)	魚つり (40.1)	水泳 (33.5)	「散歩」、「花見」なし
⑧ 木曾川下流域・木曾川 (700～930)	経験・子供 (5LA)・1982	遠足・ サイクリング (55.4)	観光・祭・ 花火見物 (36.4)	魚つり (36.2)	スポーツ (38.8)	水泳 (21.4)	「散歩」、「花見」なし
⑨ 鶴見川流域・鶴見川 (100～160)	幼年期経験 (MA)・1980	サイクリング (52.8)	石や砂遊び (43.3)	さかなとり (40.6)	ザリガニとり (36.1)	水遊び (32.2)	「散歩」、「釣り」なし
⑩ 大岡川流域・大岡川 (20～30)	幼年期経験 (MA)・1979	さかなとり (78.6)	水泳 (62.7)	石や砂遊び (41.5)	つみ草 (33.1)	ホタル狩り (28.5)	「散歩」、「釣り」なし
⑪ 江戸川流域・江戸川 (400～480)	経験 (MA)・1978	散歩 (58.9)	休憩・気晴し (36.7)	釣り (25.8)	自転車のり (23.0)	野球 (19.3)	「花見」(16.7)「花火」 なし
⑫ 利根川下流域・利根川 (285～548)	経験 (MA)・1978	散歩 (50)	釣り (31)	ピクニック (18)	自転車のり (17)	休けい (14)	「花見」、「花火」なし
⑬ 桜川流域・桜川 (120～160)	経験 (SA)・1978	散歩 (40.6)	釣り (22.4)	昆虫・植物採集 (7.5)	ボート (7.3)	自転車のり (6.6)	「花見」、「花火」なし
⑭ 多摩川沿川・多摩川 (400)	経験 (MA)・1976	散歩 (61)	釣り (17)	自転車のり (16)	ピクニック (14)	休憩 (9)	「花見」、「花火」なし
⑮ 淀川流域・淀川他 (淀川 110～790)	経験 (SA)・1974	散歩 (27)	魚釣り (6)	水遊び・ピクニック (4)	運動 (3)		「花見」、「花火」なし
⑯ 多摩川沿川・多摩川 (400)	経験 (FA・MA)・1972	あそび (52.7)	散歩 (46.1)	つり (10.9)	仕事 (5.8)	サイクリングや ハイキングなど (5.5)	「花見」、「花火」なし

注) ①～⑥はそれぞれ文献11)～26)に対応。

「運動・スポーツ」(51.8%),「打ち上げ花火」(37.0%)、「サイクリング」,「お祭り・イベント」(33.3%)となっている。また小河川では「魚とり」(40.7%),「ホタル狩り」(33.3%),「お祭り・イベント」(29.6%),「自然観察」・「サイクリング」(22.2%)であった。(表9, 10 参照) この結果は少量のサンプルを基にした集計結果であり, 参考にとどめることとして, ここでは子供の河川レクリエーション志向の考察はさしひかえることにする。³⁰⁾

ここまでの比較考察は希望するレクリエーション活動を調査したものとおこなったが, これを河川レクリエーションの経験を調査した結果とも比較してみよう。河川でのレクリエーション経験を調べた調査は数多く, 今回の文献調査においても10の事例が得られた。この内, 幼年期の川でのレクリエーション経験(表2, ⑧⑨)と, 子供に対してそれを聞いたもの(同⑩)は除外して考えると, それ以外の成人を対象とした調査結果はほぼ同様な結果を示している。そこで, この中から代表的事例である東京都内の一級河川, 多摩川の調査結果と詳しく比較してみることにする。

「多摩川環境調査報告書」³¹⁾によれば, 多摩川沿川の住民に対しておこなった意識調査の結果, 「散歩」(61% MA), 「釣り」(17%), 「自転車のり」(15%), 「ピクニック」(14%), 「休憩」(9%)が今までに多摩川で経験したレクリエーション活動の上位5番だという。「川辺の花見」, 「打ち上げ花火」の選択項目がなく比較できないが, 「ピクニック」と, 「花見」とは同様なレクリエーション形態と考えられるし, 多摩川沿いにいくつかの桜の名所(稲田堤など)があることから, 江戸川区での希望とほぼ同様な結果となっているとみてさしつかえないだろう。江戸川区の調査では「自転車のり」にあたる「サイクリング」が, 大河川(14.0%), 小河川(10.8%)となり共に第9位であった。

今回得られた調査報告の中で, 川に来ている人々を対象に利用実態を調べた唯一の調査結果との比較もしておく。「多摩川利用者アンケート調査報告書」³²⁾によれば, 調査当日において多摩川でおこなわれていたレクリエーション活動で多かったものは, 「散策」(17.8% SA), 「ピクニック」(17.8%), 「野球」(12.4%), 「釣り」(12.3%), 「休憩」(12.0%)等だという。この多摩川における利用実態調査結果も, 江戸川での大河川に対する希望結果と同様な傾向を示しており, 河川レクリエーション全般からみた大河川像が浮き彫りにされたと考える。

さて, 以上のような比較考察結果を基礎とし, 江戸川区の調査データから, 河川レクリエーションの形態を, 大河川と小河川に分類してまとめてみた。表3がその結果である。分類は χ^2 検定($P < .001$)により両者の回答数に差の認められることを条件とした。但し, 「散策」については小河川に多い割合で希望されている

表3 河川に希望されるレクリエーション
Table 3. Desired recreations in rivers

河川レベル	希望されるレクリエーション	
大河川	打ち上げ花火 運動・スポーツ 魚釣り ボート遊び 水泳	散策 川辺の花見 自然観察
小河川	水遊び ホタル狩り 魚とり アヤメ・ショウブ見物 虫とり	ピクニック サイクリング 花つき お祭り・イベント

χ^2 検定($P < 0.001$)による差をもって分類を試みた。但し, 散策については小河川に多かったが, 他の調査と照らし共通項へ入れた。

が, 先に比較考察した結果と, 「散策」への希望は川幅が影響しないという調査分析データ³³⁾を考慮して共通レクリエーションの項へ位置付けた。

ところで, 大河川, 小河川という川の分類は極めてあいまいであるが, 経験的にイメージできるものと考ええる。また, この問題については筆者がおこなった実験研究により, 水面を主体とした川幅40m位までが小河川のイメージ, 60m以上で大きな川のイメージになり, 135m以上では完全に大河川というイメージになるという結果を得ている。³⁴⁾

(ii) 河川レクリエーション活動の多変量解析による分析

前項では河川レクリエーションを, 大河川と小河川及び共通タイプの三つに分類した。この他にも, これらを専門的立場から種々に分類することは可能であろう。しかし, 一般の人々がいざしている河川レクリエーションの考えやイメージを探って分析することが, 利用者ニーズに合ったレクリエーション空間計画を策定する上で重要であると考えられる。そこで, 河川レクリエーションへの希望18項目への回答パターンを, 多変量解析手法の一つである数量化理論Ⅲ類³⁵⁾を用いて分析した。解析は計量造園学研究会所有のプログラムを使用し, 東京農業大学電算機室にておこなった。

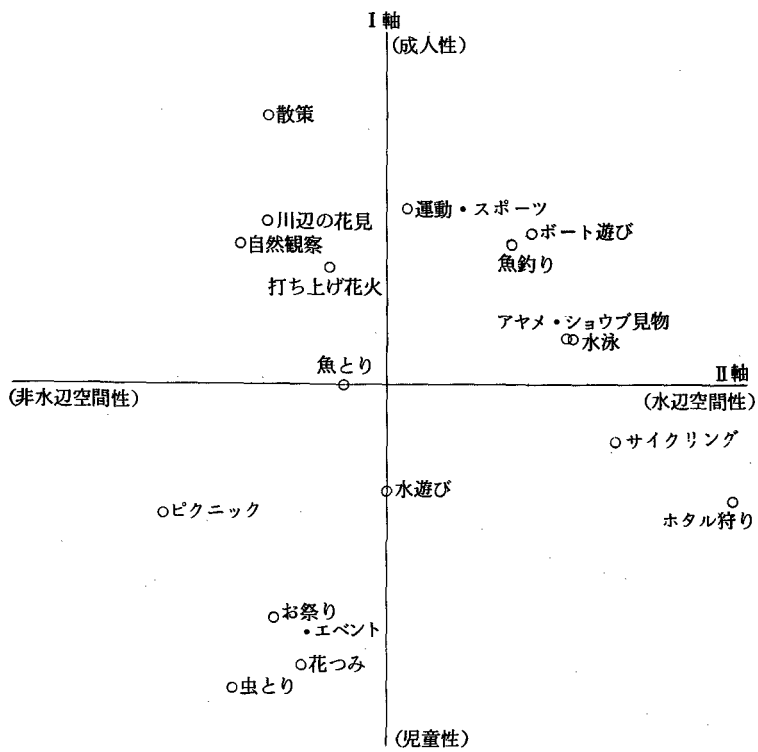


図 2. I 軸 ($\rho = 0.541$) II 軸 ($\rho = 0.529$)
Fig. 2. I axis & II axis

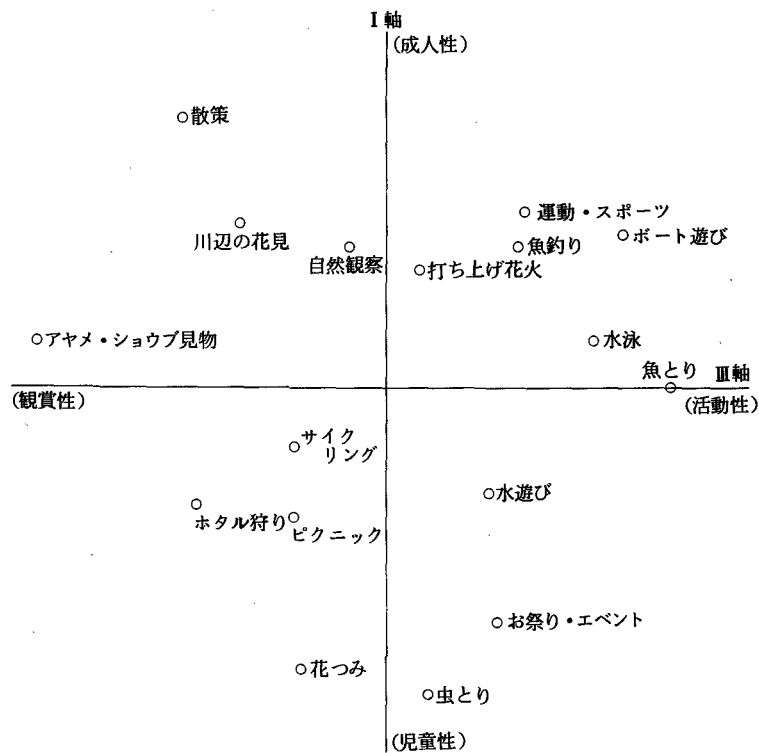


図 3. I 軸, III 軸 ($\rho = 0.520$)
Fig. 3. I axis & III axis

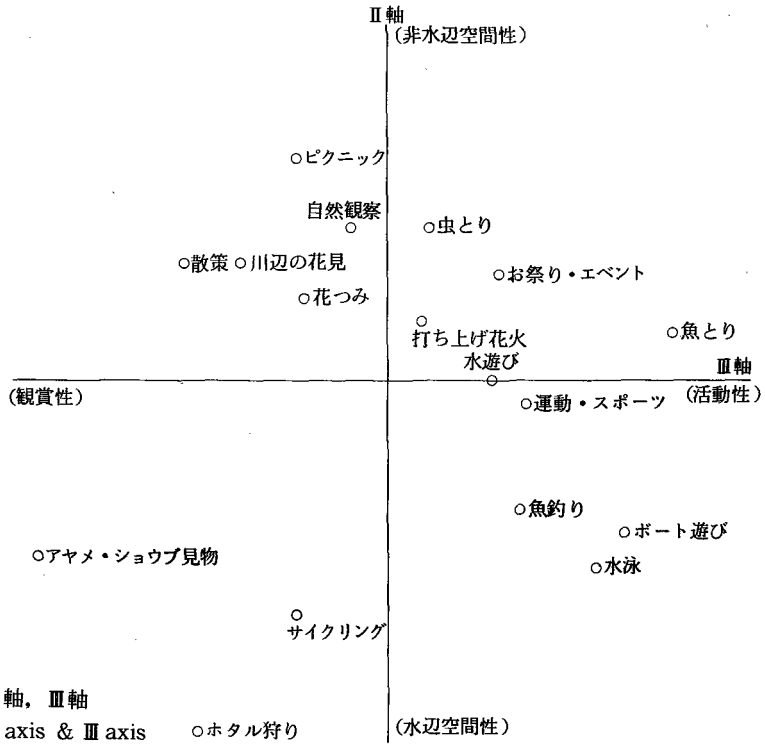


図4. II軸, III軸
Fig. 4. II axis & III axis

図2~4. 数量化理論第Ⅲ類による希望河川レクの解析結果(大河川)

Fig. 2~4. Desired riverside plotted on each of two characteristic axes based on three of them through Quantification Theory Third Family analysis (Wide rivers)

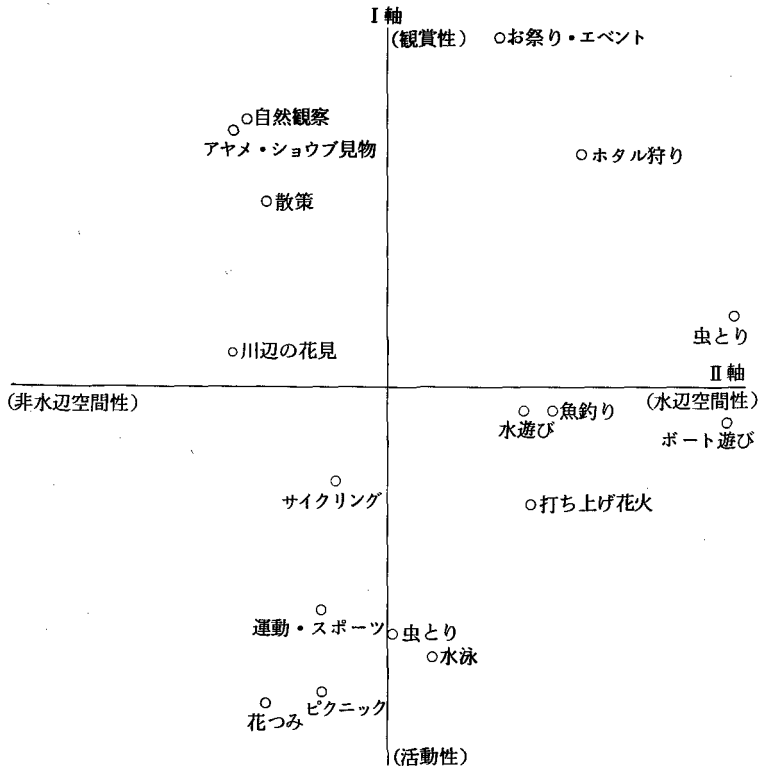


図5. I軸($\rho=0.555$) II軸($\rho=0.524$)
Fig. 5. I axis & II axis

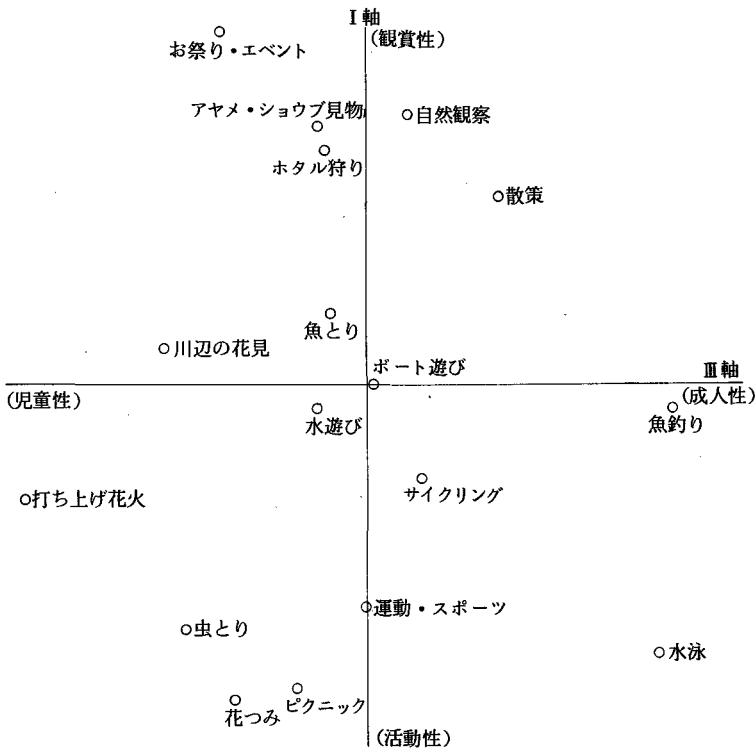


図 6. I 軸, III 軸 ($\rho = 0.516$)
 Fig. 6. I axis & III axis

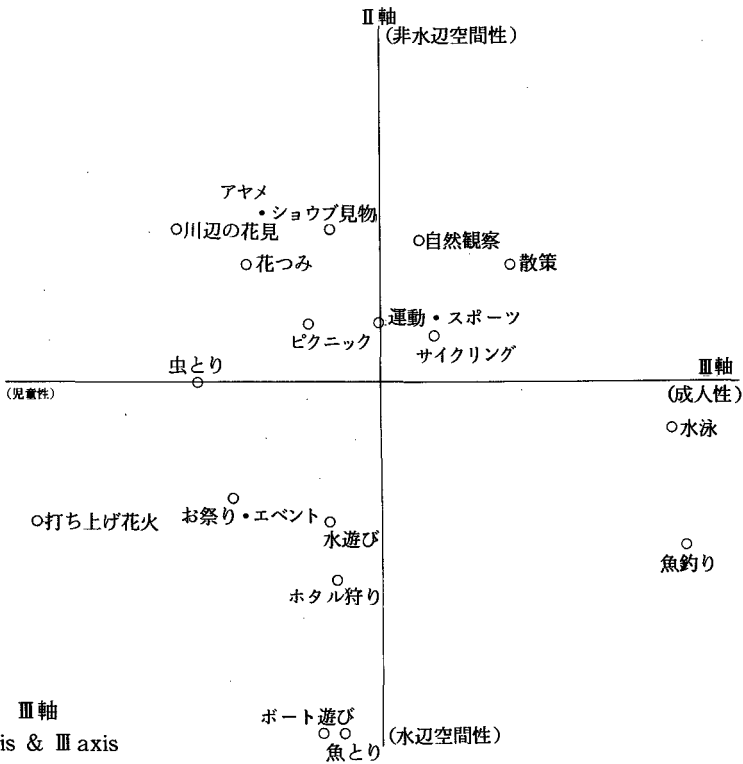


図 7. II 軸, III 軸
 Fig. 7. II axis & III axis

図 5～7. 数量化理論第Ⅲ類による希望河川レクの解析結果(小河川)
 Fig. 5～7. Desired riverside recreations plotted on each two characteristic axes based on three of them through Quantification Theory Third Family analysis (Narrow rivers)

解析結果からⅠ、Ⅱ、Ⅲ番までの特性軸を採り、それぞれの軸の組み合わせでできる2次元空間上に各レクリエーション活動項目をプロットすると図2～図7のようになる。まず、大河川の場合について分析を試みる。図2と図3のⅠ軸、Ⅱ軸、Ⅲ軸の解釈を試みると次のようになる。第Ⅰ軸に負荷量の高い項目はプラスに「散策」、「運動・スポーツ」、「川辺の花見」などで、マイナスでは「虫とり」、「花つみ」、「お祭り・イベント」などとなっている。これから第Ⅰ軸は「成人性(単独的) — 児童性(家族的)」を示す軸と考えられる。第Ⅱ軸ではプラスに「ホタル狩り」、「サイクリング」、「水泳」、「アヤメ・ショウブ見物」、「ボート遊び」、「魚釣り」などで、マイナスで「ピクニック」、「自然観察」、「虫とり」、「散策」、「川辺の花見」などに高い負荷が示された。それ故に第Ⅱ軸は「水辺空間性 — 非水辺空間性」と思われる。そして第Ⅲ軸ではプラスに「魚と

り」、「ボート遊び」、「水泳」、「運動・スポーツ」など、マイナスに「アヤメ・ショウブ見物」、「散策」、「ホタル狩り」、「川辺の花見」などが高い負荷を示し、おそらく第Ⅲ軸は「活動性(動的) — 観賞性(静的)」を示しているものと解釈できる。この結果から各軸の特性に基づいて、利用者のイメージする大河川でのレクリエーション活動を各軸ごとにまとめ、さらに前項で分類した大河川、小河川それぞれに特有なレクリエーション形態(表3)を考慮して作成したのが表4である。

次に、小河川の場合についても同様に分析してみると、図5～図7より第Ⅰ軸は「活動性(動的) — 観賞性(静的)」を、第Ⅱ軸は「水辺空間性 — 非水辺空間性」をそして第Ⅲ軸は「成人性(単独的) — 児童性(家族的)」特性を表わしていると考えられる。この解釈を基に、表2での分類を考慮して作成したのが表5である。

表4 数量化理論Ⅲ類による河川レクリエーションの性格分類(大河川)

Table 4. Classification table for riverside recreations based on Quantification Theory Third Family analysis (Wide rivers)

		Ⅱ 軸		Ⅲ 軸	
		水 辺 空 間 性	非 水 辺 空 間 性	活 動 性 (動的)	観 賞 性 (静的)
Ⅰ 軸	成人性(単独的)	水 泳 ボート遊び 運動・スポーツ 魚 釣 り アヤメ・ショウブ見物 *魚とり	○ 自然観察 ○ 川辺の花見 ○ 散 策 打ち上げ花火	水 泳 ボート遊び 魚 釣 り 運動・スポーツ 打ち上げ花火 *魚とり	○ 自然観察 アヤメ・ショウブ見物 ○ 川辺の花見 ○ 散 策
	児童性(家族的)	ホタル狩り ○ サイクリング	水遊び ○ 花 つ み 虫 とり ○ ピクニック ○ お祭り・イベント	水 遊 び 虫 とり ○ お祭り・イベント	○ 花 つ み ホタル狩り ○ ピクニック ○ サイクリング
Ⅲ 軸	活動性(動的)	水 泳 ボート遊び 魚 釣 り 運動・スポーツ	魚 とり 虫 とり 打ち上げ花火 ○ お祭り・イベント	数量化理論Ⅲ類による解析を通じ、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ軸を用いて分類。*印は負荷量が小さく分類が不安定なもの。 印で囲んであるレク項目は小河川に顕著に求められるもの。○印を印したものは大河川、小河川共通に求められるレクを表わす。無印は小河川型レク。	
	観賞性(静的)	アヤメ・ショウブ見物 ホタル狩り ○ サイクリング	○ 自然観察 ○ 花 つ み ○ 川辺の花見 ○ 散 策 ○ ピクニック		

さて、表4及び表5の分析結果に基づき次のようなことがいえる。まず、大河川についてであるが、大河川に分類されるレクリエーション活動全てが成人向きと意識され、活動性のあるものとして位置付けられていることがわかる。また、負荷量が小さく分類の不安定な「打ち上げ花火」を除くと全てが水辺空間性をもったものとして意識されているのが注目される。「運動・スポーツ」も、非水辺空間性よりの水辺空間性域内に位置して、河川空間特有の運動・スポーツもしくは、同じスポーツでも街中の公園やグラウンドでおこなうのとは、違うイメージが意識されているように思える。また、共通型で注目されるのは「サイクリング」である。通常一般のイメージからは、活動性をもった一般的な野外レクリエーション活動と考えがちであるが、ここでは観賞性をもち水辺空間でおこなわれるものとして位置付けられ、大河川における「サイクリング」が

河川空間の特性から河川特有なレクリエーション形態(川の風景を楽しみながら川辺を走る)をもっていて、それが分析に表われたと考えられる。

いちおうここで大河川におけるレクリエーション活動タイプ(以下レクリエーション活動タイプをレクと略記する)を分類整理すると、大河川に特有なものは2分類され、

- ①成人向きで活動的な水辺空間レク
水泳・ボート遊び、魚釣り、運動・スポーツ
 - ②成人向きで活動的な非水辺空間レク
打ち上げ花火
- また小河川に共通型のもは4分類され、
- ①児童・家族向きで観賞的な水辺空間レク
サイクリング
 - ②成人向きで観賞的な非水辺空間レク
散策、川辺の花見、自然観察

表5 数量化理論Ⅲ類による河川レクリエーションの分類表(小河川)

Table 5. Classification table for riverside recreation based on Quantification Theory Third Family analysis (Narrow rivers)

		Ⅱ 軸		Ⅰ 軸	
		水 辺 空 間 性	非 水 辺 空 間 性	活 動 性 (動的)	観 賞 性 (静的)
Ⅲ 軸	成人性 (単独的)	魚 っ り 水 泳	○ 自然観察 ○ 散 策 ○ サイクリング	水 泳 * ボート遊び 魚 っ り ○ サイクリング	○ 自然観察 ○ 散 策
	児童性 (家族的)	運動・スポーツ 水 遊 び ボ ー ト 遊 び 魚 と り ホ タ ル 狩 り 打 ち 上 げ 花 火 ○ お祭り・イベント	○ 花 つ み アヤメ・ショウブ見物 虫とり ○ 川辺の花見 ○ ピクニック	運動・スポーツ * 水 遊 び ○ 花 つ み 虫 と り ○ ピクニック 打ち上げ花火	* 魚 と り アヤメ・ショウブ見物 ○ 川辺の花見 ホ タ ル 狩 り ○ お祭り・イベント
Ⅰ 軸	活動性 (動的)	水 遊 び 水 泳 ボ ー ト 遊 び 魚 釣 り 打 ち 上 げ 花 火	○ 花 つ み ○ ピクニック 虫とり ○ サイクリング 運動・スポーツ	数量化理論Ⅲ類による解析を通じ、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ軸を用いて分類。 *印は負荷量が小さく分類が不安定なもの。 印で囲んであるレク項目は小河川に顕著に求められるもの。 ○印を付したものは大河川、小河川共通に求められるレクを表わす。無印は大河川型のレク。	
	観賞性 (静的)	魚 と り ホ タ ル 狩 り ○ お祭り・イベント	○ 自然観察 アヤメ・ショウブ見物 ○ 川辺の花見 ○ 散 策		

③ 児童・家族向きで活動的な非水辺空間レク
お祭り・イベント

④ 児童・家族向きで観賞的な非水辺空間レク
ピクニック、花つみ
というようにまとめられる。

次に小河川についてみる。小河川では大河川と正反対に、全ての小河川型レクリエーション活動が児童性(家族的)の中に位置付けられ、レクリエーションの場として成人のための大河川、子供のための小河川という意識が明確になった。また、「アヤメ・ショウブ見物」を除くと他は水辺空間性の中に位置付けられている。小河川ではアヤメ・ショウブの見物が庭園の観賞というレベルで捉えられているのかもしれないし、現実に江戸川の河川敷に設けられている区営の大規模な菖蒲園が意識にあつての結果かもしれない。「活動性(動的) - 観賞性(静的)」では半々に別れレクリエーション空間としての多様性をみせるが、負荷量が小さく不安定ながらも「魚とり」が観賞性のあるものとして位置付けられている。負荷量が小さいことから、サンプルの構造上の問題とも考えられるが、大人の意識からみたながめる対象としての「子供の魚とり」と考えられなくもないだろう。共通型では、「お祭り・イベント」が唯一水辺空間性の中に位置付けられている。江戸川区の古川親水公園で毎年盛大に開催される「古川まつり」のようなものが意識されていると考えられる。

ここで、大河川と小河川とに共通のものでありながらその位置付けに差のた、「サイクリング」と「お祭り・イベント」について考えてみる。先に「サイクリング」は大河川に特有なレクリエーション形態をもつのではないかと指摘をしたが、一方小河川では非水辺空間性をもつものとなっている。これは小河川が街中に流れている様子を考えれば、サイクリングの1ルートとして意識されているのではないかと推察される。「お祭り・イベント」については、水との触れあいをもつ親水性のある祭りやイベントが河川レクリエーションとして望まれ、その場所として小河川が意識されていると考えられる。

さて、大河川同様に小河川でのレクリエーション活動をタイプとして分類整理すると、小河川に特有なものは4分類され、

① 児童・家族向きで活動的な水辺空間レク
水遊び、(虫とり)

② 児童・家族向きで観賞的な水辺空間レク
魚とり、ホテル狩り

③ 児童・家族向きで活動的な非水辺空間レク
(虫とり)

④ 児童・家族向きで観賞的な非水辺空間レク
アヤメ・ショウブ見物
となり、共通型のレクリエーション活動は5タイプに分類される。

① 児童・家族向きで観賞的な水辺空間レク
お祭り・イベント

② 児童・家族向きで活動的な非水辺空間レク
ピクニック、花つみ

③ 児童・家族向きで観賞的な非水辺空間レク
川辺の花見

④ 成人向きで活動的な非水辺空間レク
サイクリング

⑤ 成人向きで観賞的な非水辺空間レク
散策、自然観察

以上、大河川と小河川とでそれぞれに分類したレクリエーション活動のタイプは、河川におけるレクリエーション空間計画に際して、ゾーニング、デザイン等に十分活かされるべきと考える。その為作成したのが表6である。計画策定の作業にあつての活用が望まれる。

(iii) 性別・年齢別にみた河川レクリエーション活動
性別で回答を集計した結果をみると(表7~表10)、大河川で男性が第1位に「魚釣り」をあげ、女性の希望との顕著な差を示し、女性では第4位に希望される「アヤメ・ショウブ見物」(24.5%)に男性との差がみられた。小河川では男性で「魚とり」(23.1%)が第5位に希望され、性差を表わしている。ここで、希望順位に関係なく全ての項目の男女別回答数について、 χ^2 検定($P < .05$)により性差を求めた結果を希望順位の高い順に並べると次のようになる。

(大河川)

男性: 魚釣り, 自然観察, 水泳

女性: アヤメ・ショウブ見物, サイクリング, 花
つみ

(小河川)

男性: 魚とり, 魚つり, ボート遊び

女性: ピクニック, サイクリング, 花つみ

「魚釣り」は男性に好まれ、「花つみ」は女性特有のものであることはすぐみとれる事実だが、ここで特徴がみられるのは「サイクリング」である。河川レベルに関係なく女性に多く希望されている。これは女性が自転車を日常の足としてよく利用すること、女性には

身近な川が日常生活に密着した地域レクリエーションの対象と考えられることから、川への自転車での到達、移動及びレクリエーションが意識されているからではないかと推察される。今後、河川を居住地域内のレクリエーション空間として位置付けた計画には、考慮されるべきものとする。

次に、年齢による河川でのレクリエーション志向の差を考察する。表9は大河川の、表10は小河川において選択率の高い上位5番目までのレクリエーション活動を整理したものである。この結果を先に数量化理論第Ⅲ類で求めた特性軸、「活動性(動的)ー観賞性(静的)」によるレクリエーション活動の分類を考慮して検討してみると、10~30代で上位3位までを「ボート遊び」、「運動・スポーツ」、「打ち上げ花火」等の動的なものが占めるのに対し、40代以上では「散策」、「川辺の花見」、「自然観察」等の観賞性をもったものが上位を占めるようになる。このことから、青少年層から中年層に活動

的なレクリエーション活動が多く志向され、それに対し、中年層から老年層にかけては観賞的なものを志向しているのがわかる。そしてその代表的なレクリエーション活動がそれぞれ上述の三種といえよう。ここで他とは異なる変化をみせるのが「魚釣り」である。10代、20代ではそれぞれ7位(3.7%)と6位(7.3%)であるのが、30代では第1位になり、40代、50代、60代以上と徐々に順位が低下し、中年層に最も好まれるレクリエーション活動であることがわかった。

以上の結果から、大河川のレクリエーション空間計画にとっては、年齢層に合わせた活動性の高い空間と観賞性の高い空間との、適正な組み合わせが重要な課題であるとする。

小河川についても検討してみる。希望順位の高い上位5位のなかで活動性のある動的レクリエーションは、10代の「サイクリング」4位(22.2%)と、20代の「魚釣り」4位(27.1%)、そして20~60代にまんべんなく上

表6 河川レクリエーションの特性チェックリスト

Table 6. Check-list of riverside recreations based on recreational characteristics

河川レクリエーション特性 河川レクリエーション		レクへの要求度	大河川				小河川												
			成人向レク(単独的)	児童向レク(家族的)	水辺空間レク	非水辺空間レク	活動的レク(動的)	観賞的レク(静的)	男性的レク	女性的レク	成人向レク(単独的)	児童向レク(家族的)	水辺空間レク	非水辺空間レク	活動的レク(動的)	観賞的レク(静的)	男性的レク	女性的レク	
大河川型レク	打ち上げ花火	大 ↑ ↓ 小	○																
	運動・スポーツ		○	○															
	魚釣り		○		○						○	○							
	ボート遊び		○		○						○	○							
水泳		○		○					○	○									
小河川型レク	水遊び	大 ↑ ↓ 小		○						○	○								
	ホタル狩り			○						○	○								
	魚とり			○						○	○								
	アヤマ・ショウブ見物		○		○					○	○								
虫とり		○		○					○	○									
共通型レク	散策	大 ↑ ↓ 小	○							○	○								
	川辺の花見		○		○					○	○								
	自然観察		○		○					○	○								
	ピクニック			○						○	○								
	サイクリング			○		○				○	○								
	花つみ			○		○				○	○								
お祭り・イベント		○		○				○	○										

表7 希望河川レクリエーションの性別・年齢別クロス集計表(大河川)

Table 7. Cross table between desired riverside recreations and each sex and ages (Wide rivers)

大河川で してみたい レクリエーション	年・性 齢 別	全 体	男	女	10 代	20 代	30 代	40 代	50 代	60 代 以 上	無 回 答	合 計
水遊び		102 2.7	66 2.9	33 2.2	1 1.2	8 4.5	22 4.7	34 2.7	22 2.4	15 1.7	0 0.0	102 2.7
水 泳		156 4.1	106 4.7	49 3.2	3 3.7	12 6.8	10 2.1	74 5.8	35 3.8	21 2.3	1 3.7	156 4.1
ボート遊び		282 7.3	156 6.9	122 8.0	16 19.7	24 13.6	51 10.9	115 9.1	40 4.4	33 3.6	3 11.1	282 7.3
魚とり		89 2.3	60 2.6	28 1.8	1 1.2	4 2.3	22 4.7	23 1.8	17 1.9	21 2.3	1 3.7	89 2.3
魚釣り		420 10.9	320 14.1	94 6.2	3 3.7	13 7.3	59 12.6	142 11.2	94 10.3	105 11.6	4 14.8	420 10.9
自然観察		315 8.2	203 8.9	108 7.1	2 2.4	6 3.4	24 5.1	78 6.2	80 8.7	122 13.5	3 11.1	315 8.2
花つみ		61 1.6	15 0.7	46 3.0	0 0.0	4 2.3	9 1.9	23 1.8	15 1.6	9 1.0	1 3.7	61 1.6
アヤマ・ショウブ見物		211 5.5	84 3.7	125 8.2	0 0.0	2 1.1	14 3.0	69 5.4	66 7.2	59 6.5	1 3.7	211 5.5
川辺の花見		443 11.5	254 11.2	184 12.1	4 4.9	13 7.3	47 10.0	148 11.7	125 13.6	105 11.6	1 3.7	443 11.5
虫とり		29 0.8	17 0.7	12 0.8	0 0.0	2 1.1	8 1.7	12 0.9	3 0.3	4 0.4	0 0.0	29 0.8
ホタル狩り		127 3.3	67 2.9	57 3.7	2 2.5	1 0.6	16 3.4	39 3.1	35 3.8	33 3.6	1 3.7	127 3.3
散 策		391 10.2	239 10.5	152 10.0	3 3.7	16 9.0	31 6.6	89 7.0	114 12.4	138 15.2	0 0.0	391 10.2
ピクニック		152 4.0	83 3.6	69 4.5	3 3.7	10 5.6	29 6.2	48 3.8	36 3.9	26 2.9	0 0.0	152 4.0
サイクリング		180 4.7	79 3.5	99 6.5	9 11.1	11 6.2	30 6.4	82 6.5	28 3.1	18 2.0	2 7.4	180 4.7
運動・スポーツ		318 8.3	200 8.8	115 7.5	14 17.4	17 9.6	50 10.7	135 10.6	58 6.3	43 4.7	1 3.7	318 8.3
打上げ花火		399 10.4	219 9.6	176 11.5	10 12.5	18 10.2	33 7.1	121 9.5	109 11.9	106 11.7	2 7.4	399 10.4
お祭り・イベント		102 2.7	57 2.5	44 2.9	9 11.1	15 8.5	8 1.7	29 2.3	25 2.7	15 1.7	1 3.7	102 2.7
その他		18 0.5	13 0.6	2 0.1	1 1.2	1 0.6	2 0.4	6 0.5	2 0.2	4 0.4	2 7.4	18 0.5
無回答		49 1.3	37 1.6	9 0.6	0 0.0	0 0.0	3 0.6	1 0.1	12 1.3	30 3.3	3 11.1	49 1.3
合 計		3844 100.0	2275 100.0	1524 100.0	81 100.0	177 100.0	468 100.0	1268 100.0	916 100.0	907 100.0	27 100.0	3844 100.0

表8 希望河川レクリエーションの性別・年齢別クロス集計表(小河川)

Table 8. Cross table between desired riverside recreations and each sex and ages (Narrow rivers)

小河川で してみたい レクリエーション	年・性 齢 別	全 体	男	女	10 代	20 代	30 代	40 代	50 代	60 代 以上	無 回 答	合 計
水遊び		439 11.5	261 11.6	173 11.4	5 6.8	20 11.3	86 18.4	143 11.3	94 10.4	80 8.9	4 16.0	439 11.4
水 泳		79 2.1	51 2.3	27 1.8	0 0.0	5 2.8	12 2.6	26 2.1	14 1.6	22 2.4	0 0.0	79 2.1
ボート遊び		110 2.9	74 3.3	32 2.1	4 5.4	7 4.0	9 1.9	47 3.7	19 2.1	21 2.3	3 12.0	110 2.9
魚とり		262 6.9	176 7.8	83 5.5	11 14.8	15 8.5	33 7.1	98 7.8	54 6.0	49 5.5	2 8.0	262 6.9
魚釣り		168 4.4	119 5.3	47 3.1	4 5.4	16 9.0	13 2.8	52 4.1	47 5.2	33 3.7	3 12.0	168 4.4
自然観察		313 8.2	171 7.6	140 9.2	6 8.1	16 9.0	35 7.5	102 8.1	75 8.3	77 8.6	2 8.0	313 8.2
花つみ		86 2.3	25 1.1	61 4.0	3 4.1	4 2.3	7 1.5	30 2.4	20 2.2	22 2.4	0 0.0	86 2.3
アヤマ・ショウブ見物		301 7.9	161 7.2	138 9.1	4 5.3	11 6.2	26 5.6	104 8.2	91 10.1	64 7.1	1 4.0	301 7.9
川辺の花見		365 9.6	207 9.2	154 10.1	2 2.7	15 8.5	57 12.2	112 8.9	88 9.8	89 9.9	2 8.0	365 9.6
虫とり		73 1.9	45 2.0	28 1.8	1 1.4	4 2.3	12 2.6	31 2.5	14 1.6	11 1.2	0 0.0	73 1.9
ホタル狩り		391 10.3	217 9.6	170 11.2	9 12.1	17 9.6	49 10.5	148 11.7	91 10.1	77 8.6	0 0.0	391 10.3
散 策		482 12.6	291 12.9	187 12.3	5 6.8	24 13.6	51 10.9	151 12.0	126 14.0	123 13.7	2 8.0	482 12.7
ピクニック		168 4.4	86 3.8	82 5.4	3 4.1	5 2.8	26 5.6	58 4.6	38 4.2	38 4.2	0 0.0	168 4.4
サイクリング		139 3.6	64 2.8	75 4.9	6 8.1	7 4.0	23 4.9	54 4.3	30 3.3	19 2.1	0 0.0	139 3.7
運動・スポーツ		68 1.8	37 1.6	30 2.0	2 2.7	3 1.7	7 1.5	30 2.4	9 1.0	16 1.8	1 4.0	68 1.8
打上げ花火		47 1.2	23 1.0	20 1.3	1 1.4	2 1.1	2 0.4	12 1.0	12 1.3	17 1.9	1 4.0	47 1.2
お祭・イベント		132 3.5	87 3.9	44 2.9	8 10.8	3 1.7	9 1.9	34 2.7	33 3.7	45 5.0	0 0.0	132 3.5
その他		17 0.4	12 0.5	4 0.3	0 0.0	0 0.0	2 0.4	4 0.3	3 0.3	7 0.8	1 4.0	17 0.4
無回答		173 4.5	142 6.3	25 1.6	0 0.0	3 1.7	9 1.9	27 2.1	42 4.7	89 9.9	3 12.0	173 4.5
合 計		3813 100.0	2249 100.0	1520 100.0	74 100.0	177 100.0	468 100.0	1263 100.0	900 100.0	899 100.0	25 100.0	3813 100.0

表9 性別・年齢別にみた河川レクリエーションの希望順位(大河川)
Table 9. Rankings of desired recreations of each sex and ages (Wide rivers)

性別・年齢	順位		順位		順位		順位		順位	
	1位 (%)	2位 (%)	3位 (%)	4位 (%)	5位 (%)	6位 (%)	7位 (%)	8位 (%)	9位 (%)	10位 (%)
全体	川辺の花見 (34.4)	魚釣り (32.6)	打ち上げ花火 (31.0)	散策 (30.4)	運動・スポーツ (24.7)					
男性	魚釣り (42.0)	川辺の花見 (33.3)	散策 (31.4)	打ち上げ花火 (28.7)	自然観察 (26.6)					
女性	川辺の花見 (36.1)	打ち上げ花火 (34.5)	散策 (29.8)	アヤメ・ショウブ見物 (24.5)	ボート遊び (23.9)					
10代	○ボート遊び (59.3)	○運動・スポーツ (51.9)	○打ち上げ花火 (37.0)	○お祭り・イベント・サイクリング (33.3)						
20代	○ボート遊び (40.7)	○打ち上げ花火 (30.5)	○運動・スポーツ (28.8)	散策 (27.1)	○お祭り・イベント (25.4)					
30代	○魚釣り (37.8)	○ボート遊び (32.7)	○運動・スポーツ (32.1)	川辺の花見 (30.1)	○打ち上げ花火 (21.2)					
40代	川辺の花見 (34.9)	○魚釣り (33.5)	○運動・スポーツ (31.8)	○打ち上げ花火 (28.5)	○ボート遊び (27.1)					
50代	川辺の花見 (40.9)	散策 (37.3)	○打ち上げ花火 (35.6)	○魚釣り (30.7)	自然観察 (26.1)					
60代以上	散策 (45.1)	自然観察 (39.9)	○打ち上げ花火 (34.6)	○魚釣り・川辺の花見 (34.3)						

○印は活動性のあるレクリエーション

表10 性別・年齢別にみた河川レクリエーションの希望順位(小河川)
Table 10. Rankings of desired recreations of each sex and ages (Narrow rivers)

性別・年齢	順位		順位		順位		順位		順位	
	1位 (%)	2位 (%)	3位 (%)	4位 (%)	5位 (%)	6位 (%)	7位 (%)	8位 (%)	9位 (%)	10位 (%)
全体	散策 (37.5)	水遊び (34.1)	ホテル狩り (30.4)	川辺の花見 (28.4)	自然観察 (24.3)					
男性	散策 (38.2)	水遊び (34.3)	ホテル狩り (28.5)	川辺の花見 (27.2)	魚とり (23.1)					
女性	散策 (36.7)	水遊び (33.9)	ホテル狩り (33.3)	川辺の花見 (30.2)	自然観察 (27.5)					
10代	魚とり (40.7)	ホテル狩り (33.3)	お祭り・イベント (29.6)	○サイクリング・自然観察 (22.2)						
20代	散策 (40.7)	○水遊び (33.9)	ホテル狩り (28.8)	○魚つり・自然観察 (27.1)						
30代	○水遊び (55.1)	川辺の花見 (36.5)	散策 (32.7)	ホテル狩り (31.4)	自然観察 (22.4)					
40代	散策 (35.6)	ホテル狩り (34.9)	○水遊び (33.7)	川辺の花見 (26.4)	アヤメ・ショウブ見物 (24.5)					
50代	散策 (41.2)	○水遊び (30.7)	アヤメ・ショウブ見物 (29.7)	ホテル狩り (29.7)	川辺の花見 (28.8)					
60代以上	散策 (40.2)	川辺の花見 (29.1)	○水遊び (26.1)	自然観察・ホテル狩り (25.2)						

○印は活動性のあるレクリエーション

位に希望されている「水遊び」だけである。しかも、年齢による希望に大差はみられず、「散策」、「水遊び」、「ホテル狩り」、「川辺の花見」、「自然観察」がどの年齢でも多く希望されている。これより、レクリエーション空間としての小河川の計画では、観賞性の高い空間のなかに、水との触れあいのある場を設定することが重要なテーマであると考えられる。

4. まとめ

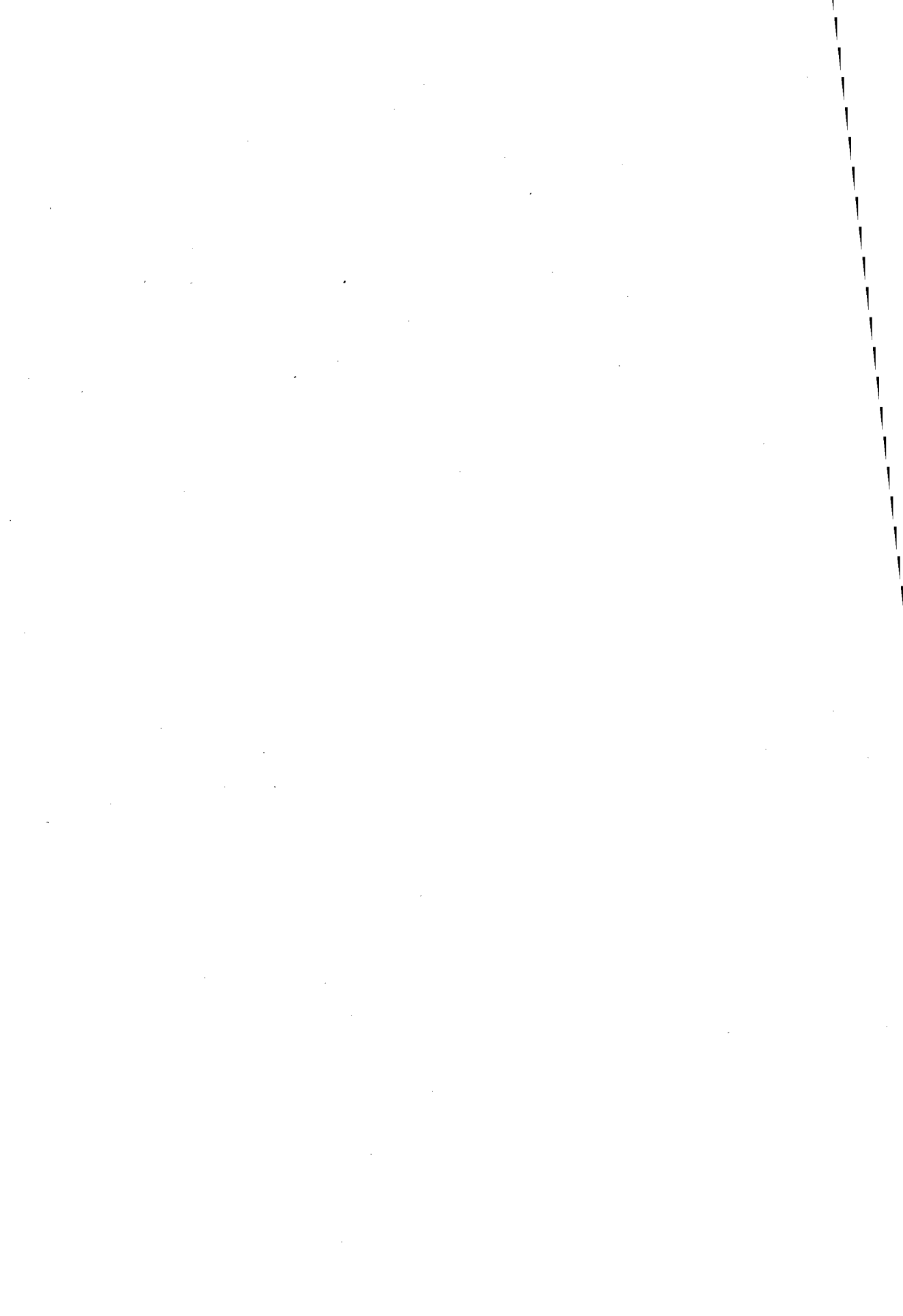
本研究は河川空間における野外レクリエーション活動について、基本的に二つの視点により考察した。本論の前半では原論的視点により、河川空間がレクリエーション活動において如何なる意味をもつかについて述べた。その結論は、河川空間は野外レクリエーション空間としての多様性を持ち、日常レクリエーション空間としても重要な位置を占めるということである。

後半部においては、計画論的視点に立って河川レクリエーション活動の分析を進めた。その結論として、大河川と小河川という二つのスケール・レベルにおいて、レクリエーション活動のタイプが見出された(表3)。また、多変量解析、クロス分析を通じ、河川レクリエーション活動のそれぞれがもつ特性が明らかになった(表6)。そして、これらの結論をもとに、レクリエーション空間として望ましい大河川像、小河川像を明らかにした。本研究によって得られた結果は、今後の河川におけるレクリエーション空間計画に活かされるべきものと考えられる。

おわりに、本研究をとりまとめるにあたり貴重なアドバイスを賜った研究室の進士五十八先生、東京農大電算機室の熊谷惟明先生、また意識調査の実施にあたり御助力いただいた泉和明、長谷川和夫の各氏をはじめ江戸川区環境促進事業団の各位に感謝の意を表する次第である。

文献及び注

- 1) 財団法人余暇開発センター：レジャー白書 '80, 7-8 及び13, 1980, 4.
- 2) 建設省中部地方建設局, 財団法人河川環境管理財団：木曾川の治水, 利水ならびに余暇関連施設に関する住民意識調査報告書, 83, 1982, 1. によれば木曾川下流域住民の水に関するレジャー経験を調査したところ, ①「海水浴」(84.8% MA), ②「潮干狩り」(83.3%), ③「川での水泳」(52.1%), ④「川釣り」(49.0%), ⑤「船(沖)釣り」(28.4%) 等という結果を得て「川での水泳」が5割を越えている。また同書では「川での水泳」経験に地域差があったことを指摘している。
- 3) 旭川開発建設部：「河川の高水敷利用についての意識調査」の報告書, 15-16, 1974, 1. によれば川のレク利用の調査結果が①「スケート」(34% SA), ②「ソフトボール」(25%), ③「野球」(24%)等となっており, 北国の川では冬期野外レクのスケートの場として重要な役割を荷い, 夏冬とも多様なレク空間となっていることがうかがわれる。
- 4) 財団法人余暇開発センター：レジャー白書 '77, 30, 1977, 4.
- 5) 財団法人余暇開発センター：レジャー白書 '82, 12-14, 1982, 4.
- 6) 環境庁長官官房総務課環境調査官：「身近な水辺」についての調査結果(概要), 2及び9, 1982, 8.
- 7) 半沢敏郎：童遊文化史, 第一巻, 東京書籍, 43-273, 1980.
- 8) 文献7, 第二巻, 272, に川の遊びの解説があるが「川を遊びの場として行う, 広義の遊びに対しての総称的名称である」として詳しい解説を水泳, 水遊び, 魚取り, 珍石さがし, 水切りなどの川にまつわる遊びの各項目へ委ねている。
- 9) 江戸川区環境促進事業団：利水事業調査報告, 親しめる川づくりのためのアンケート調査, 1982, 3.
- 10) 財団法人河川環境管理財団：河川環境に関する文献調査, 1982, 3.
- 11) 文献9, 25.
- 12) 文献9, 29.
- 13) 佐藤道彦：都市河川に対する住民の親水意識, 大阪市土木局業務論文報告集, Vol. 3, 727-729, 1980.
- 14) 横浜市内の河川環境を考える会, 横浜公害対策局：横浜市内の河川環境, 33, 1981, 3.
- 15) 東京都都民室：多摩川の自然保護, 流域住民の世論調査, 74, 1972, 3.
- 16) 建設省京浜工事事務所：多摩川利用者アンケート調査報告書, 8, 1981, 3.
- 17) 文献2, 38.
- 18) 文献2, 94.
- 19) 文献14, 38.
- 20) 横浜市内の河川環境を考える会, 横浜市公害対策局：都市河川についての意識調査, 42, 1979, 8.
- 21) 財団法人河川環境管理財団：江戸川河川敷整備基本計画調査報告書, 20, 1978, 3.
- 22) 建設省関東地方建設局利根川下流工事事務所：アンケート調査報告書, 38, 1978, 3.
- 23) 三井共同建設コンサルタント：河川総合公園計画調査報告書, 75-76, 1978, 3.
- 24) 建設省京浜工事事務所：多摩川環境調査報告書, 144, 1976, 1.
- 25) 建設省近畿地方建設局：都市化流域における河川システムに関する研究, 付-22, 1979, 3.
- 26) 文献15, 11.
- 27) 文献13.
- 28) 文献14.
- 29) 文献15.
- 30) 文献2, 104-105で河川敷公園への希望施設を同じ選択肢を用いた設問で成人と児童との比較考察をしているが, 成人の自然的教養的施設への強い希望の一方, 児童, 特に女兒の人工的娯楽的施設への希望が極めて高く, 反対意見となっている。子供に対するレクリエーション志向の調査から何がしかの判断資料を得るには, 調査内容及び調査地区の環境を十分考慮した調査の実施と考察が必要に思われる。
- 31) 文献23.
- 32) 文献15.
- 33) 文献24, 付68-69, 「散歩の場」としての川の満足度を外的基準とした数量化理論第Ⅱ類の解析結果より, 「川の広さ」はレンジ0.086でほとんど寄与していない。
- 34) 鈴木誠：河川空間に求められるイメージとスケール感の研究, 昭和58年度日本造園学会論文報告集(投稿中)
- 35) 林知己夫監修, 駒沢勉著：数量化理論とデータ処理, 朝倉書店, 1982.



野外レクリエーション活動者の入込が地域 社会に及ぼす影響に関する調査研究

— 特に地元中学生の意識を中心に —

池田 勝* 高野 透**

The Study of the Impact of Outdoor Recreation Activities on Its Activity Areas

MASARU IKEDA and TORU TAKANO

The purpose of this study is to analyze the influence of the visitor's behavior on the living conditions of the residence in outdoor recreation areas, particularly on the life-style of their young people. 220 junior highschool students in the vicinity of the Joshinetsu Heights National Park were selected as the subjects for this study and the questionnaire was administered to them. Thirty-one percent of their parents engage in the tourist business such as hotels, restaurants, and souvenir shops.

The results obtained from the data collected were as follows;

1. The students expressed strongly negative response to the impact of outdoor recreation activities on their living conditions.
2. They identified the undesirable change for the natural environment in their communities, such as the garbage leavings and vandalism by the visitors.
3. The students who their parents are working in the tourist business had the problems on the lack of communication with their family members during busy season.
4. About half of the students expressed their strong dissatisfaction with bad manners among adolescent visitors, although they do not reject these visitors to come their vicinities.

I. 研究の目的

近年、余暇時間の増加に伴ない、余暇に営まれる活動の多様化には目覚しいものがある。特に、自然の中で行われる、いわゆる野外レクリエーション活動は、人々の自然回帰の欲求の高揚などの意識の変化、ならびに交通手段や活動用具の進歩など物理的諸条件の整備によって、より大衆化・大型化の傾向をたどっている。確かに、多くの時代的要請に応じて、野外レクリエーションは活動者に対して多くの価値をもたらし、また、その経済的効果を主とする地域開発的役割を担っているが、このような大衆化・大型化の進行に従い、

「レジャー公害」と言われるような問題を引き起こしていることも数多く報告されている¹⁾。

「レジャー公害」とは、観光開発や野外レクリエーション活動者の流入に起因する、自然環境破壊・交通渋滞・青少年への悪影響・地場産業の圧迫等、その地域における物心両面にわたる弊害の総称である。野外レクリエーション活動がかなり普及した現在、その質的發展における今日的課題のひとつとして、これら「レジャー公害」の未然防止・解決が緊急に求められているのである²⁾。

そこで本研究では青少年を対象とし、彼らの意識をもとに、野外レクリエーション活動がその活動地域に

* 筑波大学体育科学系

** 筑波大学大学院体育研究科

対してどのような影響を及ぼしているのか明らかにすることを目的としている。

II. 研究の方法

調査の対象として、上信越高原国立公園に近接する妙高中学校(新潟県中頸城郡妙高高原町)、信濃中学校

(長野県上水内郡信濃町)の生徒計220名を選定した(表1)。青少年のうち特に中学生を対象としたのは、通学圏も含めた生活圏がほぼ対象地域内に限られ、その社会的行動範囲も高校生などに比較して狭く、野外レクリエーション活動による影響を最も敏感に反映しているであろうという理由からである。

表1. 対象者の内訳
Table 1. The Contents of the Interviewee of this Study.

		1 年 生	2 年 生	3 年 生	計	
妙 高 中 学 校	男子	22	17	18	57	110
	女子	18	18	17	53	
信 濃 中 学 校	男子	17	19	17	53	110
	女子	20	21	16	57	
計		77	75	68	220	

研究の枠組として、野外レクリエーションに関する対象者の特性、中学生が意識する生活上のインパクト、およびその主因となる野外レクリエーション活動者などに対する意識の3点を設定し、これに沿って1981年11月12日から11月18日にかけて質問紙法による調査を実施した。具体的には、両中学校の校長を通じて各学年1クラスずつ抽出し、家庭に持ち帰って調査票に記入、回答後担任教師によってその回収を依頼する形式をとった。

また、両町の野外レクリエーション地域としての特性を把握するため、両町役場観光課でのヒアリング調査も同時期に実施し、本研究の基礎資料とした。

野外レクリエーション地域としての両地域の特性の違いは、妙高高原町は、温泉やホテル等の集中する妙高山麓のスキーを中心とした冬期の活動が主体となっているのに対し、信濃町では、別荘や宿泊施設の集中する野尻湖を中心とした、ボード・ヨットなど主に夏型の活動が盛んである点にある。このような季節性の違いは、両地域の観光客入込数の違いとして明らかに裏づけられる。また、産業別人口構成比を見ると、信濃町では第1次・第2次・第3次ともほぼ均等な割合となっているが、妙高高原町では第3次の人口が6割以上を占めている。さらに、妙高高原町ではサービス業関係の多さを証明するように、信濃町に比較して、進行程度の違いが理解できる。

以上、両地域とも、野外レクリエーション地域の一般的特性である、基準人口の時季的増大³⁾、および消費傾向社会⁴⁾という2つの側面が確認された。

III. 結果と考察

1. 対象者の特性

調査対象となった両中学生の保護者の職業は、会社員(29.0%)、公務員(10.5%)、自営業(18.6%)、運輸関係(9.0%)、土木建築関係(13.2%)、農林業(4.5%)が主なものである。また、このような職業枠とは別に、旅館・民宿・飲食店・みやげ物店などの観光関係業⁵⁾に、季節的あるいは年間を通じて従事している家庭は、信濃中学校で約19%、妙高中学生では約31%に達している。すなわち、全体で68名、約31%の者の家庭が観光関係者に従事しているわけであるが、彼らのうちこういった家業を全く手伝わない者は5.9%に過ぎず、ほとんどの者がなんらかの形で家業に関係していることになる。

武居⁶⁾は、収益のために、労働可能な家族構成員がすべて観光業に没入し、一家団らんの機会が減少、子供の世話ができなくなり、その結果、キャンプ場の風紀の乱れや観光客のマナーが及ぼす悪い感化が、保護者の目を離れた子供たちに直接的に影響するとして、観光関係業従事家庭の青少年に対する悪影響を論じているが、本研究の対象者の一部も、このような状況の可

能性が大いに予測されるところである。

次に外部の人々の野外レクリエーション活動を受容する地域の住民である彼ら中学生自身の、野外レクリエーション種目の経験について、東京の中学生⁷⁾との比較を表2に示した。全体的には海水浴・登山の経験率が高く、これは中学校での行事と関係があると思われる。

野外レクリエーション地域の中学生は、男女ともスキー・そりあそびをほぼ全員が経験しており、幼い頃

から雪に親しんでいるという多雪地の地域特性を反映している。その反面、スケートではむしろ東京の方が経験率は高く、これは、妙高高原町・信濃町とも多雪地であるためスケートにあまり適さず、そうした施設もなく、逆に東京の方が室内スケート・リンクに恵まれているためによるものと考えられる。全般に陸上型(キャンプ・登山・ハイキング・サイクリング)の種目の経験率は地域による違いがほとんどみられず、それに反し、雪氷型・水辺型の種目に相違があり、社会

表2. 経験したことのある野外レクリエーション種目
Table 2. The Rate of Experience of Outdoor Recreation Activities.

上段=N
下段=%

中学校 種目	妙高中学校		信濃中学校		第四中学校		計 N=348
	男子 N=57	女子 N=53	男子 N=53	女子 N=57	男子 N=78	女子 N=50	
スキー	57 (100.0)	52 (98.0)	53 (100.0)	57 (100.0)	41 (52.5)	17 (34.0)	277 (79.5)
スケート	18 (31.5)	20 (37.7)	19 (35.8)	15 (26.3)	57 (73.0)	42 (84.0)	171 (49.1)
そりあそび	52 (91.2)	53 (100.0)	53 (100.0)	57 (100.0)	42 (53.8)	13 (26.0)	270 (77.5)
キャンプ	56 (98.2)	51 (96.2)	49 (92.4)	53 (92.9)	37 (47.4)	24 (48.0)	270 (77.5)
登山	55 (96.5)	51 (96.2)	53 (100.0)	57 (100.0)	65 (83.3)	38 (76.0)	319 (91.6)
ハイキング	38 (66.6)	29 (54.7)	37 (69.8)	35 (61.4)	48 (61.5)	40 (80.0)	227 (65.2)
サイクリング	37 (64.9)	10 (18.8)	41 (77.3)	39 (68.4)	60 (76.9)	33 (66.0)	220 (63.2)
海水浴	57 (100.0)	50 (94.3)	53 (100.0)	56 (98.2)	76 (97.4)	49 (98.0)	341 (97.9)
ヨット	2 (3.5)	2 (3.7)	10 (18.8)	4 (7.0)	9 (11.5)	7 (14.0)	34 (9.7)
ボート	47 (82.4)	39 (73.5)	48 (90.5)	35 (61.4)	54 (69.2)	33 (66.0)	256 (73.5)
その他	14 (24.5)	15 (28.3)	4 (7.5)	3 (5.2)	9 (11.5)	3 (6.0)	48 (10.0)

的行動範囲が比較的狭い中学生の段階では、地域特性が個人の野外レクリエーション活動の経験に大きな影響を与えているものと考えられる。

野外レクリエーション活動が地域に及ぼすインパクトについて中学生が意識する際、その地域自体に対する本人の意識・感情も大きなファクターとなるであろう。そこで、居住地域に対する好きな点・嫌いな点をそれぞれ自由回答で求めた。その結果、好きな点を回答したのは延べ249名、嫌いな点では延べ176名で、特に、好きな点については1人につき少なくとも1点以上は回答している割合になり、地元中学生の居住地域に対する愛着感がうかがえる。

好きな点のうち全体で最も多いのは、「自然に恵まれていること」であり、約60%を占める。嫌いな点では、「雪害や冬の厳しさ」が25%、「交通が不便」が24%などであった。このような嫌いな点は、「自然の豊かさ」ゆえにもたらされるものでもあり、自然が本来的に持つ好きと嫌いの二面性を、彼らの意識の中に見出すことができる。いずれにしても、地元中学生が自分

たちの居住地域を意識する際に、自然環境的な要因が大きなウエイトを占めていることが判明した。

2. 社会生活上のインパクト

石井⁹⁾によると、地域の自然を生かした観光開発に対する住民意識において、その肯定的意見として、「観光開発が地域性に合致する」、「生活環境の利便性が向上する」、「住民の収入が増加する」といったことを指摘している。続いて、観光開発が進められた場合の弊害については、「ゴミの増加で周囲が汚くなる」、「自動車交通量の増加による事故の増加」、「自然破壊からくる災害」、「自然破壊による住みにくさ」、「風土の悪化」、「地元の平和が乱される」、「地元の人情味がうすれる」といった住民側の懸念を報告している。こうした、観光・レクリエーション開発に関する地元住民の意識は、他の調査・報告例でもほぼ類似しており、多少の地域差のあるもののその普遍性がうかがえる。

そこで、以上のような住民意識をもとに、地元中学生が感じる、野外レクリエーション活動による社会生活上のマイナスのインパクト10項目(表3:1~10)、

表3. 図1・図2における質問項目
Table 3. Items of the Questionnaire for Socially and Family Impact

(社 会 生 活)		(家 庭 生 活)
1 通学が不便になった	11 町がきれいになった	16 勉強がはかどらない
2 町がうるさくなくなった	12 交通が便利になった	17 クラブ活動に身がはいらない
3 犯罪がふえた	13 遊び場がふえた	18 生活のリズムが乱れる
4 風紀が悪くなった	14 物が豊かになった	19 気持ちが悪く落ちつかない
5 遊び場がへった	15 生活が便利になった	20 睡眠時間が短くなる
6 伝統がうすれた		21 話し合いの機会が減る
7 ゴミがふえた		22 家の人から小言を言われる
8 都会的になった		23 家族の結びつきがうすれる
9 事故がふえた		
10 自然が破壊された		

プラスのインパクト5項目(表3:11~15)を設定し、各々「非常に感じる」「少し感じる」「どちらでもない」「ほとんど感じない」「全く感じない」の5段階尺度で評定を求めた。図1・図2は、この設問で「非常に」および「少し」感じると回答した者の割合を示したものである。

まず、地域別に見ると、両地域とも、(7)ゴミがふえた(妙高73.6%、信濃82.1%)が最も回答率が高く、

次いで(10)自然が破壊された(同、50.9%、75.0%)があげられる。また、(2)町がうるさくなくなった(同、34.6%、44.4%)、(8)都会的になった(同、32.8%、40.6%)も比較的高い回答率を示している。したがって、地元中学生にとって自然環境に恵まれた静かな居住地域が、野外レクリエーション活動者の流入により、ゴミが増え、騒々しくなっているという、主に環境の変化に起因する局面において強いマイナスのインパクトを

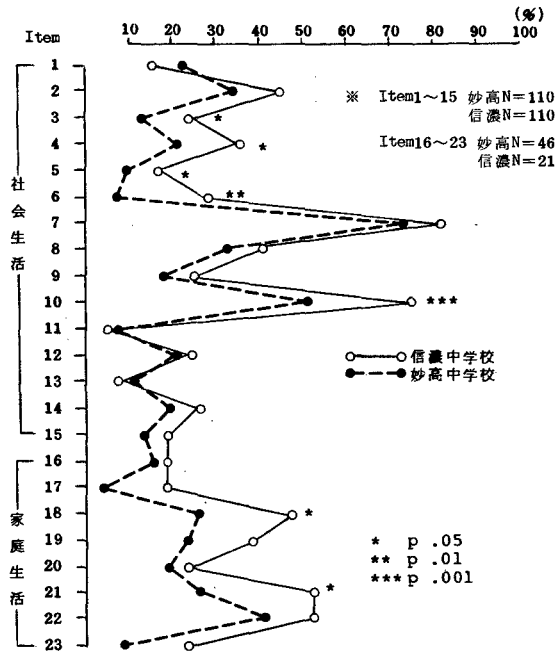


図1. 野外レクリエーション活動によるインパクト(地域別)
Fig. 1. The Impact of the Outdoor Recreation Activities on the Community and Family Life — (1)

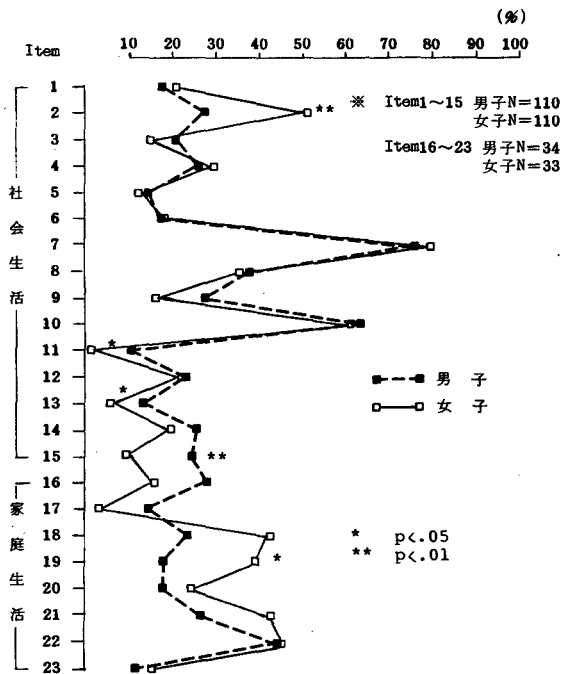


図2. 野外レクリエーション活動によるインパクト(男女別)
Fig. 2. The Impact of the Outdoor Recreation Activities on the Community and Family Life — (2)

感じていることが推察される。このように、環境の変化に敏感である事実は、対象者の特性でも述べたように、自分たちの居住地域に対する意識の中で、自然環境的要因の占めるウエイトが非常に大きかったことと関係があると思われる。

また、特に、「ゴミがふえた」と感じる者が全体の約8割に達しているのは注目に値する。レジャー公害の中でも、ゴミについては最も一般的かつ重要な問題であるが、これらの地域においても、ゴミに関しての野外レクリエーション活動者のマナーの欠如と、ゴミ処理における行政上の立ち遅れといった現状を露呈しているように思われる。

項目(11)から(15)までのプラス面のインパクトについては、(12)「交通が便利になった」が妙高で24.7%、信濃で20.9%、(15)「物が豊かになった」がそれぞれ19.1%、26.5%であり、全体的にその回答率はマイナスのインパクトに比較して低い数値を示している。したがって、項目数が少なく断定は困難であるが、一般に観光開発の効果として考えられている経済的利益や施設の充実等について、中学生のレベルではそれほど意識されていないことが示唆される。

地域の比較では、マイナスのインパクトにおいて、(1)「通学が不便になった」を除く残り9項目すべてで、信濃地域の回答率が妙高地域を上回っている点が興味深い。なかでも(3)「犯罪がふえた」、(4)「風紀が悪くなった」、(5)「遊び場が減った」、(6)「伝統がうすれた」、(10)「自然が破壊された」という項目では、両地域間に有意な差がみられる。これらの現象は、社会制度上の変化や行政的対応という局面としてとらえることができ、この局面において信濃中学生の方が弊害感が強いことは、両地域の特性、特に野外レクリエーション地域としての開発進行程度の違い、すなわち、妙高高原町に比べて信濃町では観光・レクリエーション産業が発展途上であり、それだけ社会的対応が不十分であることを反映した結果であると考えられる。以上のことから、いわゆるレジャー公害の対策のひとつとして、地元地域の行政・社会的努力の必要性が示唆される。

社会生活上のインパクトを男女別にみると、(2)「町がうるさくなった」において、男子の26.3%に比べ、女子は50.8%の高い回答率を示して大きな差がみられるが、その他マイナスのインパクトについては、ほとんど同様の回答パターンを示している。これに反し、プラスのインパクトでは、男子の回答率が5項目とも

女子を上回っており、興味深い結果となっている。

3. 家庭生活上のインパクト

表3の項目(16)から(23)は、家庭生活上のインパクトに関する項目である。野外レクリエーション活動の弊害の一面として、観光関係業に従事する家庭内の青少年の様々な問題が指摘されているが、ここでは、こうした現状を考慮して、旅館・民宿・飲食店といった観光関係業に従事する家庭の生徒68名(妙高47名、信濃21名)を対象に、野外レクリエーション活動者が大量に流入してくる時期、すなわち、家業が忙しくなる時期の家庭生活への影響について回答を求めた。社会生活上のインパクトと同様、5段階で評定を求め、各項目について「感じる」者の割合を示したのが、図1・図2の項目(16)から(23)である。

地域別にみると、社会生活上のインパクトと同様、8項目ともすべて信濃中学生の回答率が上回り、家庭生活上の弊害感が強い傾向がうかがえる。特に、(18)「生活のリズムが乱れる」、(21)「話し合いの機会が減る」、(22)「家の人から小言をいわれる」といった親子関係の悪化を示唆する項目で、半数近く、あるいはそれ以上の生徒が回答しており、信濃地域において、活動者の流入による観光関係業の多忙化が、家庭内で親子関係の変容を余儀なくしている状況を現実的に感じることができる。したがって、親子関係の改善のために、観光関係業に従事する家庭における子供たちへの教育的配慮が、特に求められる。

また、信濃町の方に家庭生活上の弊害感が強い傾向がみられる背景には、先ほども指摘したような、観光関係業の整備状況における両地域の違いが関与していると考えられる。

男女別にみると(図2)、(16)「勉強がはかどらない」、(17)「クラブ活動に身がはいらない」という、学校生活にも関連のある項目以外ではすべて女子の方が回答率が高い傾向がみられる。これは、先ほどの社会生活上のプラスのインパクトの5項目すべてで男子の方が回答率が上回っていたのと対照的である。そこで、男女の一般的な心理特性を考慮すれば、家庭を中心としてその内側の世界に対し女子の方がより敏感で、逆に、男子では、家庭の外側の世界、すなわち社会的な局面により敏感であると解釈できるのではないかとと思われる。

4. 活動者に対する意識

今までの考察の中で、野外レクリエーション活動による社会生活・家庭生活への影響について、地元中学

生はそれぞれ特徴的な意識を抱いていることが判明したが、それでは、このようなインパクトを及ぼす主因となる活動者自身に対する意識には、どのような特徴があるのだろうか。

まず、野外レクリエーション活動者が、自分たちの

地域に大量に流入すると感じられる時期を、「ゴールデン・ウィーク」、「夏休み」、「秋」、「クリスマス」、「スキー・シーズン」、「感じない」という、感覚的に時期を表わす項目の複数回答で求めた(表4)。

その結果、活動者の大量流入を「感じない」とする

表4. 野外レクリエーション活動者の大量流入の時期
Table 4. The Periods of the Entrance of the Outdoor Recreation Practitioners into its Activity Areas.

	GOLDENWEEK	SUMMER	AUTUMN	X'MAS	SKI SEASON	NOT FEEL
妙高中学校 N=109 (%)	25 (22.9)	57 (52.3)	28 (25.7)	63 (57.8)	98 (89.9)	2 (1.8)
信濃中学校 N=108 (%)	23 (21.3)	97 (89.8)	15 (13.9)	22 (20.4)	85 (78.7)	3 (2.8)
全 体 N=217 (%)	48 (21.6)	154 (71.0)	43 (19.8)	85 (39.2)	183 (84.3)	5 (2.3)

(P < .001)

者はわずかに5名(2.3%)で、ほとんどの者が、もちろん実数に基づくものではなく感覚的にであろうが、1年のうちいずれかの時期で大量流入を感じていることになる。しかも、妙高では「スキー・シーズン」に、信濃では「夏休み」に大量流入を感じる者がそれぞれ約9割おり、地域によるこの回答パターンの相違は、観光客入込数における両地域の季節的特徴と一致している。したがって、地元中学生は、居住地域内の野外レクリエーション活動者の季節的動向をかなり正確に把握していると言えよう。

次に、野外レクリエーション活動者の、服装・マナー・言葉づかい・態度のそれぞれについて、「好ましい」「普通」「好ましくない」「わからない」の4段階で評価を求め、「好ましくない」と回答した者の割合を地域別に示した(図3)。

これによると、最も回答率が高いのは「マナー」であり、妙高で32.7%、信濃では49.1%であった。この場合、活動者側の服装・マナーなどの側面は厳密に区別しうるものではないので、その比較は避けるが、いずれにしても、活動者のマナー・態度といったモラル

的な面で半数近くの者が「好ましくない」としている事実は注目に値する。なぜならば、前述の社会生活上のインパクトで最も回答の多かったのは「ゴミがふえた」ことであり、こういったゴミの投棄をはじめとして様々な環境汚染・破壊の原因の大半が、活動者のオーバー・ユースやモラルの欠如にあるとする指摘¹⁰⁾同様の意識を、この結果にみることができからである。

図4では、前記質問において、「好ましくない」と回答した者に対し、その「好ましくない」と感じられる活動者の年齢を自由に書かせ、その結果を大きく3つの年齢層に分けて示した。いずれの側面でも、7割から8割の者が15歳から25歳までの若者層を「好ましくない」活動者として指摘している。野外レクリエーション活動は、大型化・大衆化に伴って、今や幅広い年代が享受する時代となってきている¹¹⁾が、全国各地の様々な野外レクリエーション地域を訪れる者の大半は若者層であり、そのような意味からも、特に子供の頃からモラルの徹底を図ることがレクリエーション教育・余暇教育の中で重要な課題であろう。

表5は、活動者が自分たちの居住地域にやって来る

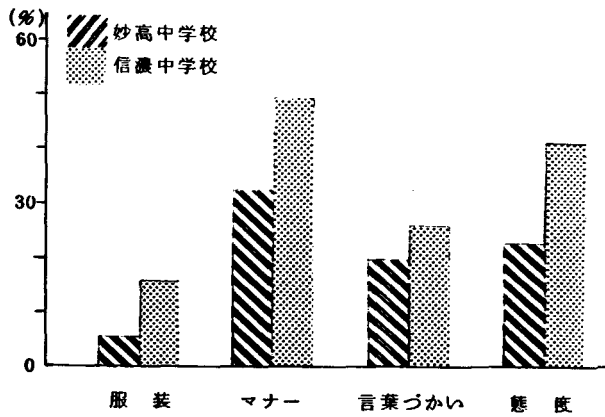


図3. 野外レクリエーション活動者の評価
Fig. 3. The Evaluation of the Outdoor Recreation Practitioner.

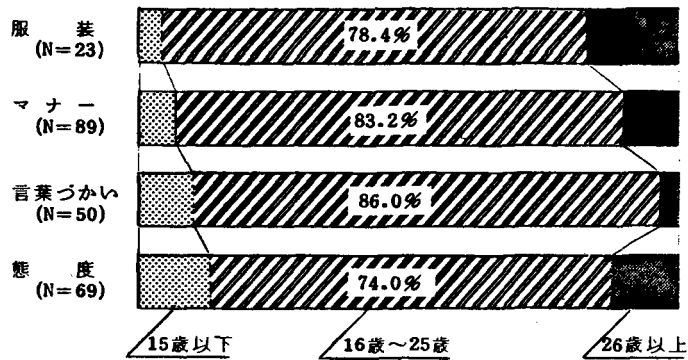


図4. 好ましくない年齢層
Fig. 4. The Age Groups "Unlikable" Practitioner.

表5. 野外レクリエーション活動者流入の是非
Table 5. The Judgement on the Entrance of the Outdoor Recreation Entrance Practitioners into its Activity Areas.

	良い	悪い	わからない
妙高中学校 (N = 109)	39.4	3.7	56.9
信濃中学校 (N = 107)	26.0	11.5	62.5 (%)

P < . 05

ことに対する是非を求めた結果である。今まで、野外レクリエーション活動者の主にマイナス面に焦点を当ててきたので、ここでは、否定的な意識が強いことを予測していたが、否定的意識より肯定的意識の方が上回る結果を得た。

このことは、地元中学生が野外レクリエーション活動に関して様々な弊害を感じながらも、それがそのまま活動者を排斥するような意識にまではあまり発展していないものと推察される。しかしながら、「悪い」とする者が、妙高の3.7%に対し、信濃の11.5%というこの結果は、信濃地域において、社会生活・家庭生活上の弊害感が相対的に強いことが影響しているものと考えられる。また、「わからない」として、是非の判断を避けている者が両地域とも約6割に及んでいることは、この種の判断が、中学生のレベルではかなり困難な問題であることを示唆するものである。

Ⅳ. 結 語

野外レクリエーション活動者の流入がその活動地域に及ぼす影響について、本研究により明らかになったことは以下のように整理される。

1. 地元中学生は、野外レクリエーション活動に起因するインパクトについて、プラス面よりもマイナス面の方を強く感じている。

2. 地域社会へ及ぼすインパクトとして、「ゴミの増加」「自然破壊」など、自然環境の悪化を示唆する局面を特に強く意識している。

3. 観光関係業に従事する家庭の子弟は、活動者の大量流入による家業の多忙化により、親子関係の変容に直面している可能性が大きい。

4. 地元中学生の約半数は、活動者に対して、特に若者層のモラルの欠如について強い不満を抱いているが、活動者の地元への流入に対しては、あまり否定的な態度を示してはいない。

以上のような野外レクリエーション活動による問題

点は広範な角度から学際的な対処を必要とするものであるが、本研究により示唆される問題解決の方向として、

(1) 各野外レクリエーション地域の開発程度・地域事情に即した行政的対応

(2) 特に観光関係業従事家庭における、青少年への教育的配慮

(3) 野外レクリエーション活動者自身による地元へのインパクトの認識とモラルの高揚(レクリエーション教育の必要性)

の3点があげられる。

参考文献

- 1) 佐原洋, 「レジャーとレジャー公害」レジャー産業, 62: 69-73, 1973.
- 2) 日本レクリエーション協会編, '79レクリエーション白書・野外レクリエーションの現状と課題, 1979. pp. 104-148.
- 3) 日本地域開発センター, 大規模観光レクリエーション総合調査報告書-VI, 1975, pp. 219.
- 4) 日本地域開発センター, 前掲書, pp. 219.
- 5) 岡庭博(観光論概要, 法律文化社, 1969, pp. 44-65.) は, 観光関係業として, 観光地におけるタクシー・バス等の運転手, その他も含めているが, ここでは除いた。
- 6) 武居良明, 「地域住民と観光開発」地域開発, 170: 42-56, 1978.
- 7) 野外レクリエーション地域を訪れる側として, 東京都中央区立第四中学校の生徒128名を対象に, 1981年12月に質問紙法により回答を求めた。
- 8) 石井孫千代, 「住民参加による地域開発の推進」レジャー産業, 71: 72-77, 1973.
- 9) 服部千之ほか, 「民宿の形成と問題」地域開発, 160: 49-68, 1978.
- 10) 渡辺弘之, 登山者のための生態学, 山と溪谷社, 1979, pp. 155-221.
- 11) 浦井孝夫, 「統計にみる最近の野外活動傾向」新体育, 48: 22-27, 1978.

The Study of Leisure Behavior of the Users of Federal Recreation Areas Administered by Three Federal Agencies

Munehiko Harada*
 Geoffrey C. Godbey**
 David R. Chase***

国立公園サービス(National Park Service), 国有林サービス(National Forest Service), そして陸軍工兵団(Army Corps of Engineers)の3つの異なる機能を持つ連邦政府附属機関によって管理・運営される, 野外レク・エリア利用者のサイト内(on-Site)でのレジャー行動に違いがあることは, 先行研究(HCRS, 1979)によって明らかにされている。例えば国立公園サービスによって管理されるエリアの利用者は, 文化的・教育的活動に頻繁に参加し, 陸軍工兵団によって管理されるエリアの利用者は水辺活動に多く参加する傾向がある。しかしながら, この結論を年間を通してのサイト外(off-Site)での活動参加パターンとしてとらえるにはデータが不足している。本研究の目的は, 3つの野外レク・エリア利用者の, サイト内とサイト外でのレジャー行動を比較することにある。分析には1979年度の全米野外レクリエーション計画(The Third

Recreation Plan)のデータが使用された。3つの異なるサイト利用者の社会経済プロフィール, 年間を通しての野外レク活動への参加率, そして因子分析によって得られたサイト外での野外レク活動の構造が測定された。その結果, 国立公園サービスによって管理されるエリア利用者は, 他のエリア利用者 비해, 収入, 教育程度, そして職業的威信度が高く, 文化的, 教育的活動に一年を通じて参加していることが明らかになった。この事実は, 各エリア利用者のもつ社会経済的背景の相違と, 活動に対する異なった好み(taste)の存在を示している。これに対し, 因子分析によって明らかになった, サイト外で参加された野外レク活動の構造には高度な類似性が見られた。この活動構造の同質性と, 参加活動の選択の異質性の関係についての考察が, 各エリア利用者の人口統計学的プロフィールに照らして行われた。

Studies of federal recreation areas indicated that different types of recreational resources and opportunities induce different on-site leisure behavior among the users of these areas (HCRS, 1979). For example, the users of the National Park Service site have participated in cultural and educational activities, while the majority of the Corps of Engineers respondents have engaged in a variety of waterfront activities. However, there is no empirical evidence that these results can be extended to leisure behavior exhibited by the same users while participating in off-site outdoor recreation activities throughout the year. A knowledge of the similarities or differences in off-site users' leisure behavior could be quite useful in managing and marketing efforts. The off-site recreation activity patterns of the users of the National Park Service, the Forest Service, and the Corps of Engineers were compared by using the data collected by the Heritage Conservation and Recreation Service for the 1979 Nationwide Outdoor Recreation Plan. For the purpose of this study, three measurements were adopted. The results of the first two measurements revealed the different socioeconomic profiles and different popular activities across agencies. For example, National Park Service visitors tend to have high income, education, and occupational prestige, and were likely to participate in cultural and educational activities throughout the year. These results indicate the heterogeneity of activity perception among federal users. The third measurement indicated that the structure of off-site activities obtained from factor analysis are quite similar across different agency users. The

* Graduate Research Assistant Department of Recreation and Parks The Pennsylvania State University

** Department of Recreation and Parks The Pennsylvania State University

*** Department of Recreation and Parks The Pennsylvania State University

relationship between the homogeneity of the activity structure and the heterogeneity of activity taste among federal users are discussed in light of demographic profiles.

Key Words: Leisure behavior, federal recreation areas, factor analysis

Introduction

Many types of federal recreation areas in the United States have been adapted to different kinds and combinations of recreational use. These areas are under the jurisdiction of several federal land management agencies and are widely distributed throughout the country. (Federal land management agencies include: National Park Service, National Forest Service, Bureau of Land Management, Bureau of Reclamation, and Tennessee Valley Authority.)

The National Park Service was established for the purpose of protecting and regulating the use of the federal estate by establishing national parks, monuments, and reservations. These areas have been preserved for natural as well as scientific, historical, recreational, and cultural purposes. The Forest Service, a bureau in the U.S. Department of Agriculture, administers over 187 million acres of land. The Forest Service became more directly involved in the provision of recreation opportunities after the passage of the Multiple Use Act of 1960. With over 200 million visitor-days spent in recreation use of the national forests annually, recreation is the fastest growing activity on these lands. In contrast, the Army Corps of Engineers maintains and improves rivers and other waterways to enhance navigation and control floods. The Civil Works Program of the Corps contributes to outdoor recreation through nationwide construction, operation and maintenance of reservoirs and stabilizing pools, harbors, and waterways in addition to protecting and improving coastal beaches. Hence, federal recreation areas managed by these various agencies have offered different recreational opportunities to users in terms of history, facilities, management policies, and natural settings.

It is not difficult to imagine that the different recreational opportunities and different characteristics of the three federal recreation agencies would attract different types of users. In particular, studies of individual federal recreation areas show that the demographic profiles of the users of the three federal agencies differ (HCRS, 1979)

Due to the differing opportunities and users at each of these areas, we would expect there would be differences in the on-site participation patterns at each type of federal recreation area. According to the 1977 Federal Estate Survey, 100 percent of the respondents who visited the National Park Service site have participated in sightseeing at historical sites or natural scenic areas compared to one-half of respondents at the Corps of Engineers areas. Conversely, 93 percent of the Corps of Engineers respondents have participated in swimming and Sunbathing compared to 49 percent of the respondents of the National Park Service areas. It is apparent, then, that various kinds of recreational opportunities yield different individual outdoor recreation behavior at each of the federal recreation areas.

Despite the findings reported by the 1977 on-site survey concerning outdoor recreation behavior among public park users, there is no empirical evidence that this research can be extended to outdoor recreation behavior exhibited by these users while participating in off-site outdoor recreation activities throughout the year. Are there any relationships between federal users' on-site outdoor recreation behavior and off-site outdoor recreation behavior? Have the users of different kinds of federal outdoor recreation areas demonstrated different off-site outdoor recreation behavior? The literature that was searched contained no studies that compared off-site outdoor recreation behavior of the users of different federal estates. Thus, at this point we know that recreation areas managed by three different federal agencies attract users with different demographic profiles and, due to the type of opportunities available at each of these types of recreation areas, the on-site participation patterns of these users vary according to the type of area. We do not know, however, if the off-site participation patterns of these user groups are different. That is, are the general off-site recreation patterns of the users of a Corps of

Engineers site different from those of a National Park site? The differences in demographic profiles might lead us to think that off-site patterns would differ. But, little relationship was found between demographic factors and recreation activity participation in the work of Kelly (1978). Thus, the demographic differences among users of the various federal estates is not clear evidence that they would have differing off-site recreation activity patterns.

A knowledge of the similarities or differences in off-site users' pattern could be quite useful in the managing and marketing of the various federal agencies. For example, if National Park visitors typically have off-site recreation patterns focusing on history and education, then the agency could target its marketing and managing efforts. The purpose of this study was to compare the off-site recreation activity patterns of the users of the National Park Service, the Forest Service, and the Corps of Engineers. Two types of comparisons were made: (1) the percentage participation in off-site activities and (2) the structure of off-site activities.

Methodology

The data used in this study were selected from a survey undertaken for the 1979 Nationwide Outdoor Recreation Plan (Heritage Conservation and Recreation Service, U.S. Department of Interior, 1978). The data were collected by face-to-face interviews conducted on site at a total of 153 federally managed outdoor recreation areas. From these areas, forty areas were selected from the three largest land-managing agencies—the National Park Service, U.S. Forest Service, and Army Corps of Engineers. The overall nonresponse rate was 4.8 percent of all people approached during the data collection period, and a total of 10,333 interviews were used for data analysis. Information was sought on demographic items and frequencies of participation during the past year in 30 outdoor recreation activities.

First, user's socioeconomic statuses were investigated by using variable analysis. Consistent with the operationalization of these variables in previous research, the income, educational and occupational levels of the respondents was ascertained. Income was divided into six categories, ranging from under \$6,000 to over \$50,000. Education was defined as the highest level of formal schooling completed by the respondents at least 18 years of age and ranged from elementary school to graduate degrees. Occupation was coded into seven prestige classes, ranging from laborer to professional.

Second, off-site activity participation rates of the users of the federal estate were examined. This analysis simply shows the deviations from the average participation rate for each activity. Annual percent of participation for each activity was employed to compare the population.

Finally, factor analysis of outdoor recreation activities was employed to investigate the individual's off-site leisure behavior pattern. Factor analysis is a method for determining the number and nature of the underlying variables among larger number of measures (Kerlinger, 1964). This technique is used to derived groups of inter-related activities which share the same common factor variance. Many studies have been conducted in which stable dimensions and factor structures of leisure activities have been identified (Proctor, 1962; Bishop, 1970; Witt, 1971; McKechnie, 1974; Duncan, 1978; Yu, 1980). In the present study, this procedure was used to extract common factors from individual activity sets. Subsequently, factors, the group of activities isolated in each of three federal recreation areas, was objectively compared.

The respondents were asked to state the frequency of activity involvement in outdoor recreation which occurred anywhere, not just on federal land, during the past 12 months. There were thirty activities that were common to the users of the three federal recreation areas. Participation in the thirty activities was recorded into three categories: (1) no participation in the past year, (2) participated one to four times, (3) participated more than four times. Thus, the frequencies of participation were measured by a three-degree ordinal scale in the analysis. The activity sets were then factor-analyzed for each federal agency separately. Finally, the invariance of the extracted factors across the samples was examined by using the coefficient of congruence.

Analysis of Data

(1) Socioeconomic Characteristics of Federal Estate Users.

Presented in Table 1 is the annual family income of federal estate users. One-fourth of the users in the National Park system have an annual family income of more than \$25,000, compared with 13 percent in the Corps of Engineers. In contrast, one-fourth of Corps of Engineers users have earned less than \$10,000 a year. The median income of the users of National Park Service, Forest Service, and Corps of Engineers is \$18,153, \$17,353 and \$14,999, respectively. Table 2 indicates that the National Park Service hosts the highest percentage of highly educated users and the Corps of Engineers, the lowest. Also, 17 percent of the users in the National Park Service have pursued college graduate level study compared with 10 percent in the Forest Service, and only 4 percent in the Corps of Engineers.

A similar pattern holds for occupation. For example, 31 percent of the Corps of Engineers visitors are classified as blue collar employees including craftsman, operations, service, farmer, and labor categories. Similarly, 22 percent of the Forest Service visitors and 18 percent of the National Park Service users are blue collar workers. Persons in white collar occupations including professional, manager, clerical, and sales were most often found in the federal recreation areas administered by the National Park Service.

Table 1. Annual family income of federal estate users (Percentage)

Income	National Park Service (N=3965)	National Forest Service (N=2864)	Corps of Engineers (N=3504)
Under \$1,000	6	8	9
6,000-9,999	10	12	16
10,000-14,999	21	22	25
15,000-24,999	37	34	32
25,000-49,999	20	17	11
50,000+	4	3	2
No Date	2	4	5

Table 2. Annual family income of federal estate users (Percentage)

Education	National Park Service (N=3965)	National Forest Service (N=2864)	Corps of Engineers (N=3504)
Elementary	1	2	4
Junior/Middle	5	6	8
High	38	45	60
College	39	37	24
Graduate	17	10	4

The data showed that three socioeconomic characteristics vary among agency visitors. Specifically, visitors in the National Park Service, compared to the Forest Service and Corps of Engineers, tend to have higher education, income, and occupational prestige. The presence of a social class bias in the National Park Service visitors is suggested by this analysis.

(2) Activity Participation Rates of Federal Estate Users.

Table 4 indicates the deviation from average participation rates for each outdoor recreation activity.

Table 3. Occupation of federal estate users (Percentage)

Occupation	National Park Service (N=3965)	National Forest Service (N=2864)	Corps of Engineers (N=3504)
Professional	28	21	13
Manager	8	7	7
Clerical	5	6	5
Sales	3	4	4
Craftsman	8	10	12
Operations	2	4	5
Service	5	5	6
Farmer	1	1	2
Housewife	13	16	17
Laborer	2	2	6
Student	17	15	13
Retired, Widow	7	8	8
Unemployed	2	2	2

For example, the average participation rate for fishing for the entire population is 59 percent while the same rates for National Park Service, Forest Service, and Corps of Engineers are 44 percent, 61 percent, and 71 percent, respectively. According to Table 4, the National Park visitors are the most interested in cultural and sports events, sightseeing, and driving for pleasure, as well as sporting activities associated with high income such as golf, tennis, and downhill skiing. Water sports are most popular with the Corps of Engineers visitors. Camping is popular among those who visit National Forests. Outdoor pool swimming is popular with the National Park Service, but not the Corps of Engineers visitors. Specifically, visitors to the Corps of Engineers sites represent below average participation rates for all land-based outdoor activities except camping. It should be remembered that participation in outdoor recreation as measured here does not refer to only on-site behavior, but rather activity undertaken at any location during the last 12 months. In summary, the results showed significant differences in off-site outdoor recreation involvement among the users of three federal land-managing agencies.

Table 4. Activity participation rates of federal estate users
(Annual percent participation)

Outdoor Activity	Federal Agencies			
	Federal Estate	NPS	NFS	COE
Camp in developed area	58	-10	9	2
Camp in primitive area	26	- 1	8	- 8
Canoe, kayak or river run	16	2	2	- 5
Sail	10	5	0	- 4
Water ski	22	- 5	- 5	10
Fish	59	-15	2	12
Other boat	32	- 4	- 4	9
Pool swim or sun bathe	34	15	- 1	-13
Other swim and sun bathe	50	- 3	- 3	6
Walk to observe nature, bird watch, or wildlife photography	44	7	8	-15
Hike or backpack	35	5	13	-17
Other walk or jog	37	10	0	-11
Bicycle	36	7	0	- 8
Horseback ride	12	1	2	- 2
Drive vehicles or motorcycles off-road	18	- 2	4	- 2
Hunt	18	- 5	0	6
Picnic	61	0	2	- 3
Golf	12	4	- 1	- 3
Tennis	23	7	- 1	- 6
Cross-country ski	6	1	2	- 4
Downhill ski	11	3	3	- 7
Ice skate	9	4	0	- 4
Sled	11	2	1	- 3
Snowmobile	5	0	2	- 1
Other sports or games	28	4	0	- 4
Sightsee at historical sites or natural wonders	48	16	0	-16
Drive for pleasure	55	8	1	- 8
Visit zoos, aquariums, fairs, carnivals, amusement parks	39	12	- 1	-10
Attend sports events	36	7	- 1	- 6
Attend dances, concerts, plays	23	8	1	- 8

Note: Participation rates based on activity involvement anywhere; not just federal lands. Percentage expressed as difference from total federal population.

(3) Activity Structures.

Three factors, obtained by a factor analysis model using varimax rotation of the factor matrix, were extracted for each of the three agencies' visitors. The choice of three factors was based on a plot of the eigenvalues. Table 5, 6 and 7 are the summary tables for the activity structures. Thirty outdoor recreation activities were thus grouped into smaller sets of underlying activity structures. The activities listed in these tables are activities loading greater than .4 on each factor identified by the varimax rotated factor matrix. Since there is no fixed rule for deciding what is a high loading, the study followed the criterion used by Yoesting (1973) and Chase (1975) who required an activity to have a .4 or higher

Table 5. Outdoor recreation activities loading greater than A .4 on the first factor of three federal agencies

Federal Agencies	Factor 1	Factor Loadings
National Park Service	Pool swim or sunbathe47
	Bicycle48
	Tennis51
	Other sports or games50
	Attend sports events.45
National Forest Service	Pool swim or sunbathe51
	Other walk or jog41
	Bicycle48
	Tennis57
	Other sports or games48
	Visit zoos, aquariums, fairs, carnivals, amusement parks43
Army Corps of Engineers	Attend sports events55
	Attend dances, concerts, plays41
	Pool swim or sunbathe51
	Other swim or sunbathe45
	Bicycle44
	Tennis51
	Attend sports events43

Table 6. Outdoor recreation activities loading greater than .4 on the second factor of three federal agencies

Federal Agencies	Factor 2	Factor Loadings
National Park Service	Walk to observe nature, bird watch, or wildlife photography42
	Picnic.43
	Sightsee at historical sites or natural wonders58
	Drive for pleasure.50
	Visit zoos, aquariums, fairs, carnivals, amusement parks47
National Forest Service	Walk to observe nature, bird watch, or wildlife photography52
	Picnic.45
	Sightsee at historical sites or natural wonders63
	Drive for pleasure.55
Army Corps of Engineers	Walk to observe nature, bird watch, or wildlife photography44
	Sightsee at historical sites or natural wonders61
	Drive for pleasure.52
	Visit zoos, aquariums, fairs, carnivals, amusement parks44

Table 7. Outdoor recreation activities loading greater than A .4 on the third factor of three federal agencies

Federal Agencies	Factor 3	Factor Loadings
National Park Service	Camp in developed area48
	Hike or backpack59
National Forest Service	Camp in primitive area48
	Hike or backpack46
	Cross country ski42
Army Corps of Engineers	Cross-country ski50
	Downhill ski59

loading on a specific factor for it to be considered a member of the activity set defined by that factor. In the present study, activity structures (extracted factors) are not labeled because our purpose is comparison of factors rather than interpretation of factors.

(4) A Comparison of the Varimax Factor Patterns.

To determine the similarity of activity clusters among the federal agencies, the coefficient of congruence was calculated. The factors are viewed as variables and an unadjusted correlation was calculated between the three sets of factor loadings for the three federal agencies. Thus, the three factors extracted from the National Park Service were correlated with the three factors extracted from both the Forest Service and Corps of Engineers. The relations among the rotated factor patterns of the three federal agencies are presented in three 3x3 correlation matrices (Tables 8, 9 and 10). For instance, Table 8 indicated a strong positive correlation between three pairs of factor loading variables. This implies that for each agency's users there are three relatively similar activity clusters. Since each factor is determined by a specific cluster of activities, the users of these two federal agencies can be said to have similar groups of intercorrelated activities.

Table 8. Correlation between the national park service and national forest service

		National Park Service		
		F1	F2	F3
National Forest Service	F1	.98	.60	.47
	F2	.49	.96	.63
	F3	.54	.37	.78

Table 9. Correlation between the national park service and army corps of engineers

		National Park Service		
		F1	F2	F3
Corps of Engineers	F1	.97	.56	.42
	F2	.49	.98	.54
	F3	.55	.17	.75

Table 10. Correlation between the national forest service and army corps of engineers

	Corps of Engineers			
	F1	F2	F3	
National Forest Service	F1	.96	.63	.45
	F2	.51	.97	.25
	F3	.50	.44	.75

Discussion

The major interest of this study was to compare federal users' off-site activity participation patterns and demographic profiles. Three measurements were adopted for the purpose of this study. The results of the first measurement, demographic analysis, indicated that education and income vary dramatically across agencies. The users of the National Park Service tend to have higher education, income, and occupational prestige, compared to the users of the other two agencies. Similar differences were found in the second analysis, percentage of participation in off-site activities. For example, Corps of Engineers users frequently visited a reservoir to participate in a variety of waterfront activities, while the users of the National Park Service were likely to participate in cultural and educational activities throughout the year. Obviously, there are no rigorous empirical data which indicate a causal link between socioeconomic variables and the type or the frequency of activity participation, yet one could hypothesize that National Park Service visitors are interested in activities associated with high income and educational level.

As a final procedure, factor analysis was used to derive the structure of off-site activities. Three off-site activity structures which are quite similar across different agency users were found. A comparison between socioeconomic characteristics and the structure of off-site activities indicated a limitation of socioeconomic information. That is, socioeconomic variables were not related to user's activity structures which are common to all federal users.

It is important to consider in more depth the potentially contradictory findings concerning off-site percentage participation rates and the structure of off-site activities. That is, the interpretation of the percentage participation rates is that the users of the different federal estates have different recreational tastes. Thus, the respondents interviewed at the National Park sites have a different set of popular activities (most commonly participated in activities) from visitors interviewed at Corps of Engineer sites. We may conclude that, with regard to popular recreation activities (mainly off-site), the users of the three federal recreation estates do not form a homogeneous group. In contrast, the interpretation of the factor analysis findings is that, with regard to the structure—the similarity in the dimensions—of recreation participation, the users of the three federal estates form a homogeneous group. They seem to have a similar perception of what activities cluster together, that is, go together in the sense that when they participated in some particular activity, they are likely to have participated in some other given activity. Thus, the users of the three federal estates have similar perceptions of what activities cluster together but differ on their sets of popular activities.

The similarity in perception of activities that cluster together may possibly be explained by the growing egalitarian nature of leisure behavior. In fact, most activity clusters for the users of the three agencies are the non-resource-based activities such as pool-swimming and sunbathing, bicycling, tennis, and attending sports events. These activities are usually available and accessible in nearly all communities. The democratization of non-resource-oriented activities which might support the thesis about cultural homogenization in modern society was depicted by Zuzanek (1978). He stated that the growing affluence of the middle class, a proliferation of mass

media which become powerful advertisers of new life-styles, together with the relative availability of leisure time and of leisure and recreation services, eroded many of the class barriers surrounding various leisure activities.

The differences in popular activities found among user groups may possibly be explained by the fact that democratization is affecting the clustering of activities without, at the same time, strongly affecting the popularity of individual activities. Popularity may still be influenced by status differences among user groups as indicated by demographic differences.

For the present, we should be suspicious of the usefulness of the structure of off-site activities for the purpose of managing or marketing the federal estate. For example, the set of intercorrelated activities often includes both popular activities and non-popular activities. It seems that knowledge of demographic profiles and the annual activity participation rates are most helpful in determining managing and marketing strategies. In any case, based on the current findings, future research might pursue the relationship between popularity as evidenced by participation rates and the dimensions of leisure participation as shown by factor structure.

REFERENCES

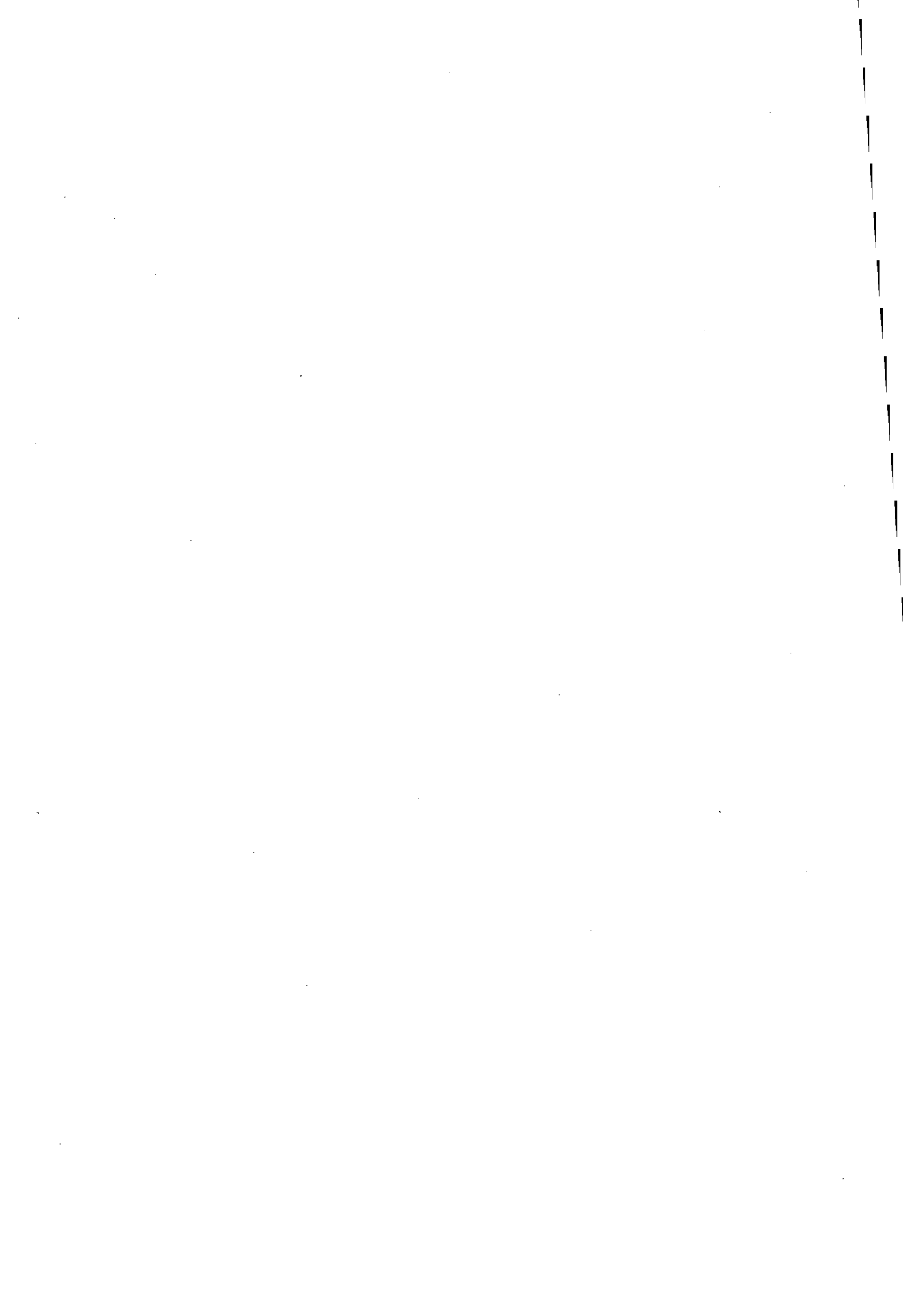
- Bishop, Doyle W. "Stability of the Factor Structure of Leisure Behavior: Analysis of Four Communities." *Journal of Leisure Research*. 2(3):160-170, 1970.
- Chase, David R. "Recreation Activity Structures and the Substitution Concept." Unpublished Ph.D. Dissertation, Department of Recreation and Parks, Texas A&M University, College Station, Texas, 1975.
- Heritage Conservation and Recreation Service. "The Third Nationwide Outdoor Recreation Plan." Washington, D.C., U.S. Government Printing Office, 1979.
- Kelly, John R. "Outdoor Recreation Participation: A Comparative Analysis." *Leisure Sciences*. 3(2):129-154, 1980.
- Kerlinger, Fred N. *Foundations of Behavioral Research* (2nd Ed.). Holt, Rinehart and Winston, Inc., 1973.
- McKechnie, George E. "The Psychological Structure of Leisure: Past Behavior." *Journal of Leisure Research*. 6(4):27-45, 1974.
- Proctor, Charles. "Dependence of Recreation Participation on Background Characteristics of Sample Persons in the September 1960 National Recreation Survey." Appendix A to *Outdoor Recreation Resource Review Commission Study Report 19*. Washington, D.C., Government Printing Office, 1962.
- Witt, Peter A. "Factor Structure of Leisure Behavior for High School Age Youth in Three Communities." *Journal of Leisure Research*. 3(3):213-219, 1971.
- Yoesting, Dean R. "Impact of New Water-based Recreation Facilities: Behavior and Management Implications." Paper presented at Water and the Community Conference, University of Washington, Seattle, Washington, May, 1973.
- Yu Jih-Min. "The Empirical Development of Typology for Describing Leisure Behavior on the Basis of Participation Patterns." *Journal of Leisure Research*. 12(4):309-320, 1980.
- Zuzanek, Jiri. "Social Differences in Leisure Behavior: Measurement and Interpretation." *Leisure Sciences*. 1(3):271-293, 1978.

《第12回学会大会報告》

研 究 発 表

(昭和57年10月31日・別府市・日名子ホテル)

1. 「レクリエーション活動の誘因構造について」…………… 早崎 正城 (宮崎法律経済研究所)
2. 「機能概念としての「体育」と「レクリエーション」に関する一考察」…… 山下 和彦 (福岡大学)
3. 「子どもの水泳教室参加に対する親の役割」…………… 梶沢 聖子 (日本大学)
4. 「子どもの水泳教室参加に対する親の意志決定過程」…………… 山岸 明郎 (日本大学)
5. 「レクリエーションに関する若干の考察
— 観光レクリエーションを中心として —」…………… 松原 洋三 (立教大学)
6. 「家庭婦人のスポーツクラブ参加と家族関係」…………… 今野 守 (日本大学)
7. 「ランニング愛好者にみる価値志向の変容」…………… 宮川 雅 (日本大学)
8. 「スキー・セミナー参加学生の意識調査」…………… 阿部 信博 (日本大学)
9. 「くクリケット」に関する研究」…………… 山田 誠 (神戸市外国語大学)
10. 「鹿教湯温泉ヘルスケアトレーナーの運動プログラム — 第1報 —
…………… 丸山久美子 (鹿教湯温泉健康保養協会)
11. 「リハビリテーション病院におけるレクリエーション (第1報)
— 鹿教湯病院におけるレクリエーション活動10年のあゆみ — …… 藤田 勉 (鹿教湯病院)
12. 「わが国野外レクリエーションの利用に関する研究Ⅱ
— 特に日光地域の基地条件について — …… 永嶋 正信 (東京農業大学)
13. 「児童の野外空間活動における基本問題等との考察
— 特に児童の野外キャンプにおける自然との接触について — …… 五十嵐葉子 (杉並区役所)
14. 「女子学生のキャンプにおけるプログラムと不安の変化について」…………… 星野 敏男 (明治大学)
15. 「野外活動指導者に関する管理的研究
— Leader Service をめぐる基本的課題 — …… 石橋 保 (福岡教育大学)
16. 「野外レクリエーション活動が活動地域に及ぼすインパクトについて
— 特に、地元中学生の意識を中心に —」…………… 高野 透 (筑波大学大学院)
17. 「中高年高血圧者のキャンプ生活による効果について」…………… 川村 協平 (山梨大学)
18. 「視覚障害者の夏山登山の現状について
— 大阪市盲人福祉協会の場合 — …… 堀 良子 (帝塚山学院大学)
19. 「精神病院におけるゲートボール活動
— レクリエーション療法種目の一つとして — …… 鈴木 定 (順天堂越谷病院)
20. 「精神科病院における集中的レクリエーション指導の試み
— 3泊4日の野外活動を通じての報告と考察 — …… 末吉 光彦 (八幡厚生病院)
21. 「高齢者の健康体力意識調査からの一報告」…………… 渡辺 岑生 (専修大学)
22. 「高齢者の体育・スポーツ指導に関する研究 (第2報)
— 運動経験による体力の変化について —」…………… 大森 雅子 (東京女子体育大学)



高齢化社会における余暇

ジョン・R・ケリー*

(西野 仁訳)

Leisure in Later Life

JOHN R. Kelly PH. D.

Aging に関するさまざまな社会学的研究がなされてはいるものの、レジャーについてのそれはまだまだ少ない。しかし、多くの新しい視点からの研究がはじまりつつあることも事実である。その一つに、Aging を単なる deterioration とみるのではなく、development として、また「人生の余った時間」とみるのではなく「人生の Culmination」として、あるいは、仕事からの retire というよりは、さまざまなことからできる opportunity としてとらえようとする視点からの研究がある。

これから行おうとする分析は、上述の研究をすすめるための、基本的な一つの考え方の概略にすぎない。

それは、レジャーについて、「その社会的役割やその存在価値は、人生のある時期においてのみクローズアップされるのではなく、人生のどの時期においても重要である」という仮定から出発し、「レジャーを、余ったものとしてではなく、人生における中心的ことがらとしてとらえよう」とする考え方に立脚する。

そのために、まずはじめに、レジャーをどう定義するかに触れ、ついで、高齢化社会におけるレジャーの役割を研究するためのモデルとして、The Role Identity Model を紹介し、それが、どのように、老後のレジャーの重要性を理解するための基本となるかについて考え、さらに、人生を集大成していく時期としての Culmination におけるテーマについて若干の考察を試みたい。

I Leisure and the Life Course

老後のレジャーは、「余ったもの」か「重要なもの」か

という論争は、レジャーを、どう定義するかということと関係する。

多くの人々が、さまざまな、レジャーの定義をしているが、ここでは、いくつかの重要と思われることがらについて考えてみたい。

まず、Freedom ということについてである。これはアリストテレスの時代から、ずっと継続している定義領域であり、もし選択の自由がなくなった時、レジャーは、レジャーでなくなってしまう。

つぎは、Social ということについてである。

レジャーは、個々人の内面的領域と関係あることがらであると同時に、社会的なことがらでもある。レジャーは、それ自体で社会的機能をもつのみではなく、その目的によって次々と形づくられていく存在でもある。そうした点から、レジャーは、文化や、社会システムの存在の意味から多面的であるが、全体としては、その社会システムのいずれの機関からも決定はされない。行為者によって、それは選択されるのである。

しかし、選択は、個々のさまざまなことがらとの関係の中で行われるのであろうから、新たに、レジャーは、どのように選択されるのかということが問題となってくる。

それを説明する有力な手がかりとして、次の三つの要因があげられよう。第一は、レジャーはそれ自身のために意味があるのであって、他の満足のための手段ではないとする、Intrinsic-Satisfaction である。また第二には、レジャーのもつ自由さは、自我の試みと達成にとって重要な機会となるとする Self-Development で

* 本稿は第12回学会大会での講演をまとめたものである。

* Dept. of Leisure Studies University of Illinois at Urbana-Champaign

ある。第三は、レジャーは、より親密な人間関係が認識される基本的集団を発足させたり発展させたりするとする Social-Bonding である。

こうしたアプローチからでてくる定義は、決して複雑ではない。

レジャーは、純粋に心的状態であるというよりはむしろ doing Something をさすと考えられよう。また、その定義は、経験的な要因と社会的要因とを結合しており、さらに、選択の Freedom ばかりでなく、Intrinsic-Satisfaction や、Self-Development や Social-Bonding について、それを含んでいるか、あるいは了解していると考えられる。

C. Gordon は、「レジャーは、手段的なテーマを越えてその中に意味をこめた自由に選択できる個人的活動として行為の面から概念化できる」¹としているし、K. Roberts は、「レジャーは、比較的自己決定される non-work な活動」²と定義し、私自身は、「レジャーは、主として、それ自身のために選ばれる活動」³と定義している。

これらの定義のいずれもが、レジャーは二次的であり、より重要な人生の他の要因によって決定づけられるという考え方に対し、否定した見解をとっている。レジャーは満たされるための空白な時間ではなく、まさに、さまざまな社会的な力、機会、制限などのまっただ中において選択される活動であろう。

レジャーが、このように定義された時、レジャーとして非常に緊張した活動とともに、誰からも指図を受けない、リラクゼーションの活動の両方が存在することになる。つまり、自分自らや、様々な用具や材料を使っての、非常に高い investment のためと、時間をうめることの二つの面が存在するのである。

ところで、人生におけるレジャーの重要性について考える時、人生のそれぞれの時期においてレジャーがめざす方向性と、レジャーの中身とが変化したり、あるいは継続したりするという事実を理解することが必要となってくる。

レジャーの変化は、年齢の変化と関連して起る Resources, Opportunities, Role-Expectation や Self-Definition の変化などの一連のことがらと大いに関係がある。さらに、レジャーは新しい Identities を確認したり Self-Definition を適応させることを求めたりするための重要な場を用意することになるかもしれない。

我々が、レジャーを理解するためや、老後の adaptations に関して、The Role-Identity Model の可能性

を試そうとするのは、こうしたみかたに基づくものである。

II The Role Identity Model

たぶん、社会現象を説明しようとするためのどんなアプローチでも、全てがあやまりであるようなものはない。それぞれのモデルが長所を持つと同時に短所を持っていることは言うまでもない。

従来、しばしば使われてきた The Activity Model などを検討したが、老後におけるレジャーを理解するためには、そのいずれもが不十分であった。

そこで、行為者のもつ目的や、社会化の要因、環境との関係や、Identities を獲得していく仕方など、レジャーと、それに関わるさまざまなことからの両方の複雑さを包含するような過度に単純化したモデルをつくる必要があると考え、これから述べるような、The Role Identity Model を考えた。

われわれの社会は、その社会制度そのものに、調和のとれた役割や期待がある。また、そこに生活する人自身も、自分自身の役割を定義づけたり、再定義している。つまり、社会に生きている人々は、社会制度の中に、自分の Social Identities を持つような地位を有していたり、あるいは、自分からも、自分の役割をどう演ずるかを決めるような Personal Identities を有している。自分の役割を演ずるということは、一般的に思い浮かぶ、その役割に対する期待を演ずることとともに、一歩すすめた、その役割をどのように演ずるかという演出をも含むことになる。

McCall と、Simmons によれば、Role Identities とはまさにこのことであり、役割の中に、自分自身を、どのように定義するかということである。

人は、一生を通じて役割が変化するばかりでなく、我々の役割における Identities もまた変化する。学生時代の役割、結婚しての役割、親としての役割などの変化とともに、友だちとして、仕事仲間として、あるいは、スポーツ参加者などとして、一人の人間が、さまざまな場面で役割を期待され、その役割が再定義されていく。人生にとって基本的なことがらは、様々な変化に応じて、いかに、Role-Identities を獲得するかにあると言えよう。

高令者が直面するであろう停年は、仕事の役割の変化を生むだろうし、親としての役割は、子供が育ちあがった時に大きな変化が生ずるのである。

こうした変化に、レジャーはどう関係するのである

うか。その変化と同一ではないだろうが、また、離れもしない。レジャーは、生活という織りものの中でくりひろげられる、役割と、Identitiesの「織り方」に関係してくることがらと考えられる。

The Role Identity Model は、人生を通して、継続と変化の両面を想定している。

ところで、ライフコースの分け方には、さまざまな方法があるが、ここでは、人生を大きく三つの時期に分ける方法をとりたい。その三期とは、Preparation, EstablishingとCulminationである。Preparationの時期は、人生の準備期として親から学んだり、教師や友人から学んだりする時期である。第二期のEstablishingは、一人の人間として十分一人だちし、家族を養い、社会的な地位を獲得したりする時期である。また第三期のCulminationは、それまでの生き方を、あるまとまったものに集大成していく時期ととらえることもできよう。もちろん、こうした分け方は、あくまでも一応の区分であって、個人によってその移行時期に差があることは言うまでもない。

さて、以降、われわれは、人生における第三の時期つまり、Culminationについて検討しよう。その目的は、老後の発達ということがらにおいて、レジャーがどのような役割を果たし得るかという可能性を検討することにある。

III Culmination

大部分の生活が、過去のものとなり、未来に限りがあると認識された人生の最後の時期をCulmination Periodと呼ぶ。

この時期は、今までずっと望んできたことがらに対して自分を投資することや、社会に対する自分の役割など、さまざまなことがらが、しだいに低下してくる時期である。ある者は、これからの生活に対し、恐れたり、悲しんだりするかもしれない。しかし、また、自分のおかれた状況を受け入れ、正しく認識して、自分の一生を意味あるものにまとめあげるために、過去のことがらをも含め、さまざまなことを、首尾一貫したものに統合しようとする者もいる。西暦2,000年になっても高齢者にとっては、収入の低下、仕事における役割の低下、親としての役割の低下など、多くのことがらが低下していくと考えられようが、それらの内容は、今日のそれとは異なるものと予想できる。平均余命も、教育程度も収入も、今よりは高くなるであろうし、総人口に占める高齢者の割合も多くなるであろう。

しかし、その時代でも、やはり老人達は死と相対していかなくてはなるまい。そして、やはり一個人として、いかに自分を統合するか、あるいは、どのように社会的に適應するかということのための方法を追求める努力が続けられるであろう。こうした状況の中で老人達にとっては、いかに独立を維持していくかということと、どのように自分自身の方向づけをするかということが、中心テーマとなろう。もちろん、そのためには、適当な健康と、経済的裏付けとが、大前提となることは言うまでもない。

人生の、どの段階でもそうであるが、特にこのCulminationの時期で重要なことがらは、自分自身で、自分は役に立つ、価値ある人間であると感じとり続けることである。このことは、その人が果してきた仕事の役割、その人のもつ経歴、経済的なことがら、社会的達成や適應の程度や満足度の他、高齢者が抱えている文化的評価や、レジャーにおける満足度などと大きくかかわってくるからであろう。

これらのことがらを考える際には、当然、Work IdentitiesやFamily Identitiesにも触れる必要があるので、時間の都合上、Leisure Identitiesのみについて、ここでは考えることとしたい。

レジャーが、残された人生に対して意味をもっていたり、やりがいのあることを与えたりするような、Identitiesの中心となっている人はどのくらいいるだろう。

もちろん、レジャー産業が提供している機会を利用して、活動それ自体に満足したり、また、目的をもって継続的に発展していくような活動を実際に行っている人はいる。しかしながら、多くの人にとっては、レジャーは単に生活の一断面であったり、家族のきずなを固くするための一手段であったりしている。

現実はそのようであるが、しかし、高齢者にとってレジャーは、それ自身意味をもつ活動であるという以上に、その活動を通して、Identitiesが表現されていく活動ととらえることができよう。高齢期において、レジャーは、徐々に何かをやりとげているという自己概念や、学び、成長、個人の投資、自己表現などに対する満足感を生みだす、Role Identitiesを発達させるための機会を与えてくれる。

高齢者のレジャーは、その行為者が、すでに、十分その活動を満足できるだけの基礎を持っていたり、その活動が、集団で行われる時に、長く継続されるようである。またレジャーは、今まで経験したことのない

新しいこと、あるいは、それまでやってみようかと感じてはいたが実際には行われていなかった活動をはじめのためのチャンスを提供してくれる。老後の生活において、経済的ことがら等で、レジャー活動が制限されることは否定できないが、レジャー以外の多くの役割が、行き場を失っているような状況の中で、レジャーは、生活のスタイルやパターンを再び組織できるような特別な空間であることができる。少なくとも、レジャーと高齢者の社会的適応は非常に密接なそして重要な関係にあると言えよう。またレジャーは、交友関係がはじまり、発展し、拡大していく社会的空間でもある。とくに家族的で、インフォーマルで、そして活動を基本とした組織は、最も一般的なそうした空間であろう。

ところで、高齢者のレジャーについて、さまざまな異った活動をすることが、レジャーにおける満足に貢献するだろうとする以前の仮説は、役に立たないことが、わかってきた。それよりはむしろ、数は多くなくとも、より深く、より熱心に、その活動に打ち込めるかどうか、大きな満足を得ることができるかどうかに関係してくると考えられる。このことは、レジャーを考える際、重要な問題である。活動の種類よりは、その活動に対する取り組み方の程度を測定することの方が、重要ではあるまいか。

IV Themes of the Culmination Period

この時期において問題となるテーマは、過去の人生を振りかえっての再評価と、今後の新しい生活を整理し、発展させ集大成していくことにある。

死というさけることのできない枠組みや、人のもつ可能性に対する制限のような、さまざまな制限が前提として存在する中で、これらの制限を認識して、それが何を意味するか、そして、どのように生きたら生涯は威厳をもって完全なものにすることができるのかということ問い続けなければならない。たとえ、過去への評価が強烈な、そして精神的いたでとなるようであっ

ても、さらに自分自身を成長させ、発展させていくためには、さまざまな生活の糸を選び分けたり、それらの糸を再び織ったりすることが要求される。

ある者は、家や、家族としての役割に、老後の生活の中心を置こうとするかもしれない。また、ある者にとっては、レジャーに、人生の意味や、達成することの喜びを求めるための最適空間としての価値を見出すかもしれない。いずれのケースでも、彼らの残りの可能性や投資についての再評価が、そこにはあるだろうし、また、さまざまな形での再方向づけがなされよう。

もちろん、今日の社会では、これらの評価や、再方向づけ以前に解決されねばならない健康問題や、経済的問題が存在していることは認識しておかねばならない。

Culminationの目的は、誠実と、信頼性をもった生活にある。そして、それを達成するための機会は、以前のRole Identitiesや、欲求を評価し、さらに新しいIdentitiesや、それらの中身を再構成するに至るまでの十分な自由の中にあると考えられよう。そして、レジャーは、この再構成していくプロセスに重要な貢献をするにちがいないと思うのである。

しかし、現実には、こうした積極的な姿勢で老後を生きる人ばかりではない。老後の貯えや、資源に不足している人にとっては、老後は自分の生活が分解してしまう時期にもなりかねない。老後は、可能性を追求できる機会であると同時に、大きなリスクを伴う機会でもある。

レジャーを研究しようとするわれわれにとって、これらのことがらを、いかに深く検討できるか、さらに歴史の中に生きる人間として、どのように変化していくのか、愛をもって、みきわめる必要があるだろう。

高齢者のレジャーを、どのような方向に導く必要があるかを真剣に討議する時期に、遭遇しているといえよう。

REFERENCES

1. Gordon, Chad, C. Gaitz and J. Socott. *Leisure and Lives: Personal Expressivity across the Life Span*. In *Hand Book of Aging and the Social Sciences*, R. Binstock and E. Shanas, eds. NY: Van Nostrand-Reinhard, 1976.
2. Roberts, Kenneth. *Contemporary Society and the Growth of Leisure*. London: Long man, 1978.
3. Kelly, J. R. *Leisure*. Engliwood Cliffs, NJ: Prentice-Hall 1982.
4. McCall, George and J. Simmons. *Identities and Interactions*, 2nd ed. NY: Free Press, 1978.

シニア・エイジのレクリエーション行政とその展開

金 崎 良 三^{*} 浅 田 隆 夫^{**}
秋 吉 嘉 節^{***} 諫 山 秋 利^{****}
吉 田 隆 幸^{*****}

1. 序

わが国が高齢化社会へと進行するなかで、経済や医療、福祉、住宅などの分野にわたって対応のせまられる問題は多い。こうしたなかで、高齢者をめぐる生きがいや健康の問題もますますその重みを増してくるであろう。高齢者のレクリエーションは、生きがいや健康の問題と深くかかわるものであり、高齢化社会に向けて考えなければならない今日的課題の1つといえよう。すなわち、シニア・エイジのレクリエーションをどのように考え、どのように対応していけばよいのかについて今回は、レクリエーション行政に焦点を当ててこの問題にアプローチすることにした。

最初に、テーマに関する言葉の概念を整理しておく。

一般的には、25才までを自立するまでの準備期(第1期)、55才ないし60才までを所得を稼ぐ時期(第2期)、そして、引退後の余生を送る時期(第3期)としているが、最近では45才で第一の人生を終え、46才～65才までを第二の人生として、より一層自分に適した職業を選び、さらに第三の人生として65才以上のGolden Ageを送るといったLife Cycleが画かれるようになった。

特に、平均寿命が80才近くまで延長し、発達概念が死に至るまで使用される。うになった今日、高年層とか熟年とかいう用語も使用されているが、私(浅田)は、Middle Ageを40才代とすれば、それ以後65才まではSenior Ageと称し、全く職業から解放された70才代80才代はGolden Ageとして区別した方がよいと何年前から(シニアエイジの保養所動の解析、年金保養協会、1976年2月—編者)考え、今回もこの

ような意味でシニアエイジという用語を用いた。

次に、レクリエーション行政ということであるが、これは、レクリエーション対策を具体的に実現する過程であるから、その対策が国民のレクリエーション要求にふさわしいものであるかどうかということが重要になる。いうまでもなく、レクリエーション政策は、種々の政策主体によって支持されたレクリエーション理念のうち、それらの主体の必要性から選択され支持されたものであり、具体性のあるレクリエーションの目的・内容・方法を含んだ理念の総体でもある。

現在、レクリエーション行政は、ナショナルレベルでは、文部省・厚生省・農林水産省・労働省(表6参照)などをはじめ多くの行政府や日本レクリエーション協会をはじめこれに準ずる諸機関・団体でも行われている。思うに、レクリエーション行政は、立法・行政・財政(立法・行政意志の質量の反映としての)・指導までの措置について明らかにしていく必要があるが、ここでは時間の関係上、それぞれのスピーカーは、上述の諸点を考慮しながら、以下の順序・内容にしたがって話題を提供することにした。

まず、浅田は、このテーマをとりあげた理由、シニアエイジのレクリエーション行政の捕え方(図1参照)などについて述べ、次に、秋吉は、シニアエイジのレクリエーション要求とこれを取りまく諸条件を歴史的経緯を踏まえながら明らかにし、諫山は、現時点における地域の実態を、最後の吉田は、これからのシニアエイジのレクリエーション行政を正当性のあるものにするために比較考察する。なお、司会の金崎は、今後のナショナルレベルでのシニアエイジのレクリエーション政策・行政課題について、フロアとの討論を可能な限り具体化の方向に導き、あわせて全体のまとめを

* 九州大学健康科学センター
** 筑波大学
*** 福岡教育大学

**** 大分県立総合体育館振興課
***** 福祉開発研究所

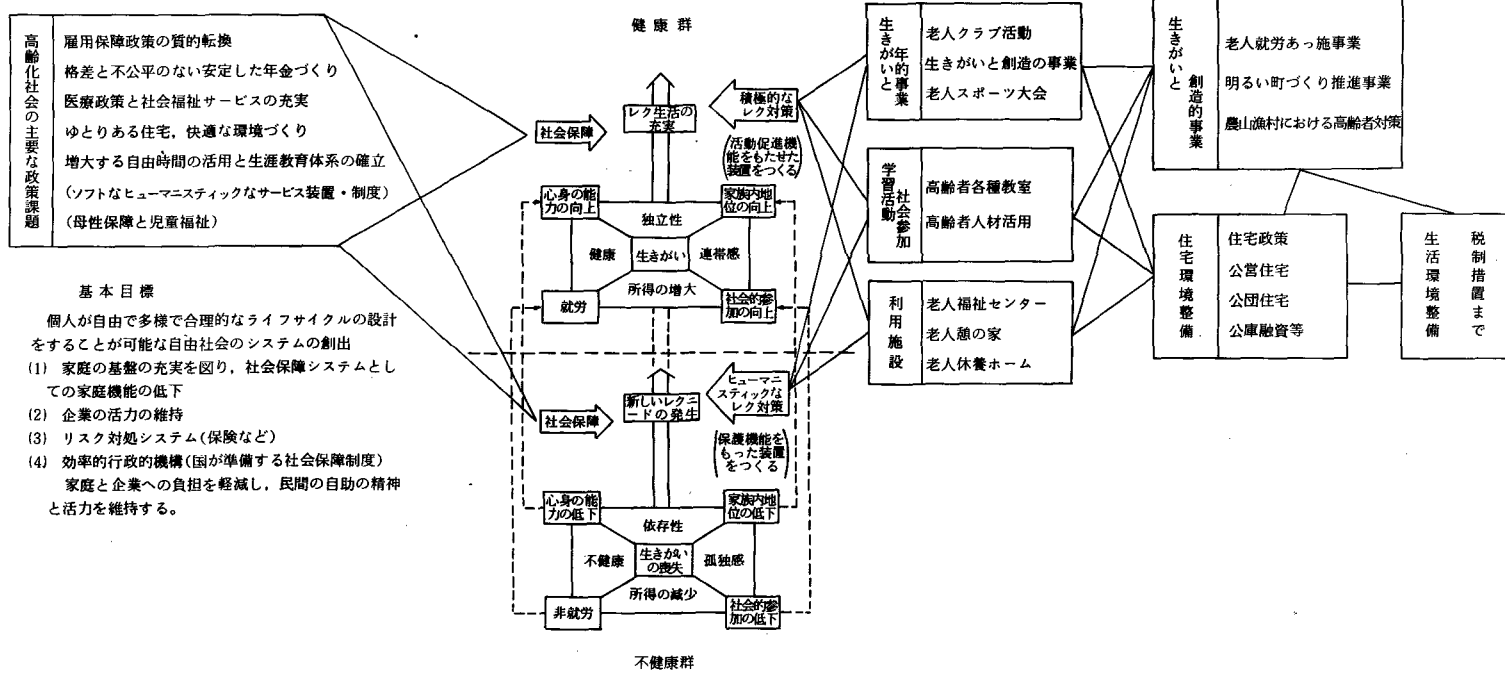


図1. レクリエーション行動を規定する基礎的要件間の関係モデル (浅田試案)

行う。

以下の内容は、スピーカーの提案内容とそれを巡る、フロアからの質疑・応答の内容を一括集約したものである。

2. アプローチのための枠組

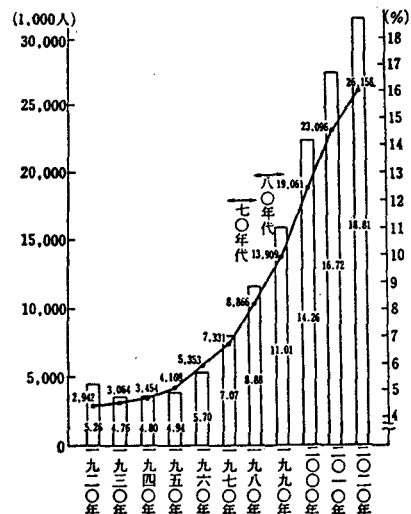
図1は、シニア・エイジのレクリエーション行政を考察するために提示したモデルである。レクリエーション生活充実のための背景として、生きがいの問題が中心になる。生きがいとは、自己実現の欲求を満たすところに生ずる複合的感情、主体的能動的感情と云ってよい。それは、やり抜いたという満足感が社会の期待と一致した時に感じられるようなものである。図1の上半分は健康群、下半分は不健康群である。生きがいに関与する要因としては、①心身の能力の向上、②就労、③社会的参加の向上、④家族内地位の向上がある。①と②は健康、②と③は所得の増大、③と④は連帯感、①と④は独立性ということにかかわる。これら4つの側面が生きがいを支えることになる。逆に、生きがいは不健康であったり家族への依存度が高かったりすると生じがたい。不健康群は健康群とは逆の場合であり不健康や所得の減少、社会的参加の低下、依存性が生まれ、生きがい喪失の状態となる。従って、これらの側面を健康群にみられるような方向に転換させていくことが重要である。健康群は、レクリエーション生活の充実へ向けて、これら基本的条件をより整備していくことである。そこにはまた、国家レベルでの社会保障や国または地方公共団体による積極的なレクリエーション対策が必要となる。これから迎える高齢化社会における社会保障の主要な政策課題は、例えば雇用保障政策の質的転換、安定した年金づくり、医療政策と社会福祉サービスの充実、ゆとりある住宅、快適な環境づくり、増大する自由時間の活用と生涯教育体系の確立などが考えられる。また、レクリエーション対策としては生きがいとレクリエーション事業、学習活動や社会的参加の促進、レクリエーション関連施設の整備、生きがいと創造的事業の実施、住宅環境の整備、生活環境の整備と税制措置などがあげられる。なお、これらのレクリエーションに関する施策は後ほど詳しくふれることにする。

3. 高齢化社会の到来

高齢者の人口構造とその変動率を眺めてみると、大正9年(1920年)のわが国の総人口5596万人に対して、65歳以上の高齢者人口は294万人であり、その比率は

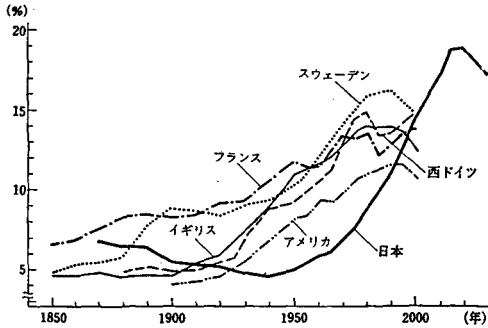
5.3%であった(図2)。その後、総人口の増加に伴い高齢者人口も増加したがその比率は昭和30年までは5%台を保っていた。ところが、昭和40年代になると総人口も1億近くになり高齢者人口も600万人を突破し、総人口に占める割合も6%を越えた。昭和50年代になって、高齢者人口が急激に増加しその比率も7%を越え、いわゆる高齢化社会へ突入したわけである。そして、昭和55年(1980年)には9%に達した。この傾向はその後も続くとみられ、厚生省人口問題研究所の推計では昭和75年(2000年)14.3%、昭和95年(2020年)には18.8%に達するとされている。人工学では、高齢者が相対的に増加することを人口高齢化と呼んでいるが、人口高齢化の過程にある社会を高齢化社会、そしてそれが行きついた社会を高齢社会と呼んでよからう。わが国の場合、昭和95年(2020年)ころをピークに人口高齢化は止まり、高齢者の増加はほぼ横ばいになると予想されるのでそれ以降は高齢社会となる。

人口高齢化の過程を欧米諸国と比較してみると、日本はその進行速度が著しく速いことがわかる(図3)。つまり、欧米諸国が高齢化社会に向けて比較的ゆっくりと対策を講じてきたのに対して、わが国の場合はそれを急いでなしとげなければならないということである。人口高齢化の原因としては、人間の平均寿命の延びと出生率の低下をあげることができる。ここで平均寿命の推移をみると、明治から昭和10年代までは男女とも40歳台であった。しかし、昭和30年代になると



(資料) 1975年までは総理府統計局「国勢調査」1980年以降は厚生省人口問題研究所推計。

図2. 老年人口(65歳以上)数およびその比率の推移



(資料)年金制度基本構想懇談会「報告」1979年4月参考資料より。

図3. 主要国の老年人口の総人口に占める割合の推移

男子63.6歳、女子67.7歳と大幅に延びた。

その後も平均寿命は延び続け、昭和56年には男子73.8歳、女子79.1歳となった。男子は現在世界第1位、女子は第2位を占めるに至った。まさに、人生50年から人生80年の時代へ移行したわけである。老後の生活が長くなり、ライフサイクルは明らかに変わったといえる。ところが、高齢者は新しいライフサイクルに適應できず、むしろとまどいを感じているように思われる。個人的には、高齢化に伴う心身の何らかの変化が労働能力や生活能力に影響を与え、種々の私的・公的援助を求めざるを得なくなる。高齢化社会の抱える問題は高齢化した人口構造を背景に生ずるものであり、それは単に高齢者あるいはシニア・エイジだけの問題でなく、他の世代も含めた国民的課題といえる。

4. 高齢者の生活の意識

ここでは、高齢者の生活と意識をいくつかの観点から明らかにする。特に、歴史的立場からその動向について言及する。

(1) 就労状況

就労問題は、高齢者にとって生活上の重要課題である。その対策は、老後の生きがい対策の一環として必要な事業である。さて、65歳以上の高齢者について、就業者数をみると昭和35年で男子144万人、女子80万人であった。40年は男子152万人、女子76万人、全体の就業率は36.6%である。男子150万人台、女子70万人台は、40年後半まで続いた。昭和50年には、男子166万人、女子76万人、55年は男子180万人、女子94万人と男女とも増加した。しかしながら就業率では50年27.3%、55年25.9%とむしろ低下している。これは、就業者数の伸びに比べて高齢者総数の増加が大きいためである。次に、就業状況を産業別にみてみよう。昭

表1. 高齢者無料職業紹介所の紹介状況

	昭和45年	48年	50年	52年	54年
求人数	19422人	44811	34587	34722	44954
新規求職	19342	34615	54832	55198	51395
求職率	99.6%	77.3	158.5	159.0	114.8
紹介	15045人	27378	31579	31284	32401
就職	6811	13950	16622	16312	17739
就職率	35.2%	40.3	30.3	29.6	34.5

厚生省社会局調査

和35年で第一次産業従事者は127万人、第二次産業20万人、第三次産業45万人であったが、55年には第一次産業は99万人、第二次産業53万人、第三次産業134万人となった。第一次産業従事者の明らかな減少と第二次、第三次産業従事者の大幅な増加傾向がみられる。特に第三次産業従事者は、この20年間に6.7倍も多くなっている。すなわち、高齢者の場合も産業別でみていくと、わが国の産業構造の変化をそのまま反映していることがわかる。

さて、次に高齢者の就労対策の1つである無料職業紹介所による紹介状況をみると(表1)、昭和40年代までは求職数より求人数が上回っているが、50年代に入るとこれが逆転している。紹介があっても、実際に就職できるのはだいたい3分の1である。つまり、高齢者の就労は希望があってもその要求の半分も満たされていない状況である。ところで、高齢者が就労を希望する理由は、「働くことが健康によいため」が男女とも断然多い。ついで「生活費のたしにする」、「子供に負担をかけないため」の順である。すなわち、自分の健康と経済的理由が中心となっている。

(2) 経済生活

国民生活実態調査(昭和52年)によると、高齢者の収入源は、「夫婦の就労によるもの」が55~64歳の年齢層は85.5%、65~74歳26.0%、75歳以上5.2%、「公的年金」が55~64歳8.3%、65~74歳52.1%、75歳以上65%、「貯蓄」が55~64歳2.1%、65~74歳8.4%、75歳以上8.4%、「子供の援助」が55~64歳1.3%、65~74歳7.8%、75歳14.6%であった。比較的若いシニア層では「夫婦の就労によるもの」が圧倒的に多いが、65歳以上の高齢者になると「公的年金」が半数以上と多くを占めるようになる。そして、「子供の援助」は75歳以上は少しみられるが、それ以下の年齢層は極めて少ない。

一方、現在の生活の困窮度をみると、「困っていない」

表2. 老人クラブ数の推移(60才以上)

	昭和35年	40年	45年	50年	55年
60才以上人口	853万	952	1,114	1,313	1,484
クラブ数	9,755	55,998	83,112	105,741	119,196
会員数	790,826人	3,502,274	4,895,339	6,314,618	7,456,475
クラブ加入率	9.3%	36.8	43.9	48.1	50.2

厚生省社会局調査

表3. 地域社会・団体への参加状況(複数回答)

		自治会・町内会など	婦人会	老人クラブ	スポーツクラブ、趣味の会など	社会奉仕団体	あまり参加しない
男	65～69才	39.7	0	34.3	8.1	9.1	37.6
	70～74才	30.4	0	51.4	7.8	8.8	31.8
女	65～69才	18.5	9.9	41.3	6.9	8.3	39.5
	70～74才	13.4	5.4	54.2	5.6	3.1	36.3

内閣総理大臣官房老人対策室「中高年者の地位と役割に関する調査」昭和51年

という者が最も多く全体で59.1%、次に「あまり困っていない」26.0%、「少し困っている」10.2%、「困っている」3.5%となっている。生活は、困っていないという者が85.1%と大部分を占めている。つまり、自分たちの就労による稼ぎや年金によって生活費を得ており、一応の経済生活の基盤はできているものとみられる。この点は、アメリカ、イギリス、フランスなどの国と比べても日本はめぐまれている²⁾

(3) 社会的参加

高齢化社会の進行に伴い、一人暮らし老人や高齢者夫婦のみの世帯が増えてきた。そのため、高齢者の社会的参加の向上は高齢者相互の連帯感を深める一方、生きがいづくりとしても重要である。まず社会的参加の場として最大の組織といわれる老人クラブについてその推移を表2によってみてみよう。昭和35年ではクラブ数9,755、会員数約79万人、クラブ加入率9.3%であったが、40年以降は大幅な増加を示している。これは、老人クラブへの国庫補助が昭和38年に開始され、その組織化が全国的に進んだ結果とみてよい。そして、55年にはクラブ数119,196、会員数746万人、クラブ加入率は50.2%に達した。すなわち、全国高齢者の半数が老人クラブに加入していることになり、これは1つの世代としては町内会や自治会に次ぐ加入率といえよう。

次に、地域社会・団体への参加状況を見ると、男女とも老人クラブの活動が多い(表3)。ついで自治会・

町内会などへの参加が、男子30%強、女子20%弱と続いている。スポーツクラブや趣味の会などへの参加は、男女とも10%以下と少ない。一方、このような社会的参加への態度をみると、「すすんで参加」は65～69歳男子48.9%、女子40.9%、70～74歳男子44.8%、女子32.0%、「時と場合によって参加」は65～69歳男子33.4%、女子36.0%、70～74歳男子17.5%、女子22.7%、70～74歳男子27.0%、女子37.6%であった。全体として、参加態度はかなり積極的である。なお、「参加しない」という者は、高齢者の70歳以上にかかなりみられる。別の資料³⁾でアメリカ、イギリス、フランスと比較してみると、わが国の高齢者の場合は老人クラブなどの活動が目立つ程度で、社交的つどいや趣味のつどい、スポーツ活動への参加率は低い。従って、先にみた参加態度と実際の参加との間にはかなりのへだたりがあるものと推察される。

(4) 健康状態

高齢者にとって身の健康を保持していくことは、最大の問題である。高齢者65～74歳の受療率(対人口10万人)は、昭和30年で3,250人、40年8,310人、50年32,365人、54年33,155人となっている。この20数年間に、実に10倍以上に達した。高齢者人口の増加率と比較すると、この受療率の上昇は異常と思えるくらいである。高齢者の受療率の上昇は、国民医療費の負担増となっている。表4は、高齢者医療と国民医療費の推移をみたものである。国民医療費

表 4. 高齢者医療費と国民医療費の推移

	昭和48年	50年	52年	54年
高 齢 者	4,289 ^億	8,666	12,872	18,503
国 民	3,496	64,779	85,686	109,282
国民医療費に対する 高齢者医療費の割合	10.8 [%]	13.4	15.0	16.9

厚生省社会局調査

に対する高齢者医療費の割合をみると、昭和48年では10.8%であったが徐々に増大していき54年には16.9%となっている。高齢者医療費の増大は、社会福祉対策を推進する上で重要な問題となっている。

さて、高齢者の病気の有無と治療状況を厚生省社会局が昭和52年に行なった老人健康調査の結果からみると、本人の意識として「病気あり」回答している者は65～69歳54.7%、70～79歳69.8%、80歳以上66.2%であった。また、「現在治療中」というのは、65～69歳51.4%、70～79歳64.0%、80歳以上61.5%となっている。病気ありという意識と実際に治療を受けているという間には若干のずれはあるものの、高齢者の健康状態はあまりよくないことが理解される。

(5) 余暇活動の状況

高齢者の一日の生活時間をみると(表5)、「睡眠」は60代で男女とも約8時間30分、70代は9時間30分となっている。高年齢層ほど長い。「仕事」は、60代男子で4時間36分、60代女子と70代男子は約2時間30分である。食事や身のまわりの用事は、年代差と男女差はみられない。一方、「テレビ・新聞」や「休養・くつろぎ」などの休養的余暇活動は、60代の男女で4時

間30分、70代で5時間30分であり、やはり高年齢層ほど長くなっている。また、「趣味・娯楽」、「スポーツ」、「勉強・研究」などの余暇活動は、60代、70代も合計しても1時間少々といったところであり、極めて少ない。レジャーを十分楽しむという傾向ではない。

次に、趣味・娯楽をだれと行なうかについて調べると、「1人で」が60代58.2%、70代63.3%と断然多い。以下、「家族」が60代、70代とも23.5%、「友人・知人」が60代10.6%、70代7.5%、「地域の人」は60代、70代とも3%台である。また、趣味・娯楽の場所は、「自宅」が60代74.6%、70代82.8%と最も多い。その他はいずれも少なく、公営と民営の施設を合わせても10%に満たない。この結果から、高齢者は1人で自宅中心に余暇を過ごしていることがわかる。レクリエーションとしては消極的といえる。

(6) 幸福感・生活欲求

高齢者は生活する上でどのような欲求をもっているのだろうか。老後の生活と意識に関する調査(昭和49年)によれば、「病気や心配事のないように」と「家族がなごやか」の2項目が上位を占めている。その他「旅行や趣味」、「生活を便利で豊かに」、「何でも話し合える友人・知人が欲しい」などもかなりあげられているが、先の2項目には及ばない。つまり、健康となごやかな家族を最も求めている。また、60歳以上を対象にした老人の国際比較調査⁴⁾(昭和57年)の結果から幸福感についてみると、日本は「幸せである」48.9%、「やや幸せである」19.6%、「ほかの人と同じくらいである」22.0%、「あまり幸せでない」5.6%、「幸せでない」1.3%となっている。すなわち、全体の68.5%が幸福感を

表 5. 1日の行動の種類別平均時間

		睡 眠	身のまわりの 用 事	食 事	家事・育児	仕 事	勉強・研究
男	65～69歳	8.47	0.56	1.44	0.15	4.36	0.09
	70以上	9.31	0.57	1.47	0.14	2.37	0.07
女	65～69歳	8.36	1.05	1.45	2.58	2.17	0.02
	70以上	9.33	1.05	1.45	1.54	1.10	0.02
男	趣味・娯楽	0.39	0.09	0.23	0.09	3.12	1.25
	スポーツ	0.09	0.23	0.07	3.34	2.09	0.50
女	交 際	0.25	0.03	0.29	0.04	3.08	1.29
	奉仕的活動	0.23	0.03	0.26	0.03	3.17	2.27
	テレビ・新聞						
	休 養 くつろぎ						
	受診・療養						

(社会生活基本調査 昭和51年)

表 6. 国の老後生活充実に関する施策

No	施 策 名	年 度	所 管	設 置 主 体	備 考
1	老人福祉センター	昭37年	厚生省	地方公共団体 社会福祉法人	1314ヶ所 (昭56年)
2	老人クラブ	38年	"	老人クラブ連合会	クラブ数12万(昭56) 会員数750万(年)
3	老人憩の家	40年	"	地方公共団体	3008ヶ所 (昭56年)
4	老人休養ホーム	40年	"	"	74ヶ所 (昭56年)
5	高齢者無料職業紹介所	43年	"	"	148ヶ所 (昭55年)
6	高齢者スポーツ教室	47年	文 部 省	"	
7	農家高齢者生活開発パイロット事業	47 ~50年	農林水産省	"	全国188ヶ所
8	高齢者教室	48年	文 部 省	"	4071教室, 1915ヶ 所 (昭55年)
9	農家高齢者創作活動施設設置事業	49 ~50年	農林水産省	"	86ヶ所 (昭54年)
10	厚生年金総合老人ホーム	49年	厚生省	財 団 法 人	
11	老人のための明るいまち推進事業	50年	"	地方公共団体	47市 (昭56年)
12	農山漁村婦人高齢者活動促進事業	50年 ~54年	農林水産省	"	全県
13	高齢者生産活動センター建設モデル事業	51年 ~54年	"	"	27ヶ所
14	高齢者人材活用	53年	文 部 省	"	事業数195 (昭55年)
15	高齢者能力活用推進協議会	53年	厚生省	"	78ヶ所 (昭57年)
16	生きがいと創造の事業	54年	"	"	143ヶ所 (昭56年)
17	大規模年金保養基地	54年	"	地方公共団体 年金福祉事業団	12ヶ所決定 (昭57年)
18	農村高齢者活動促進特別事業	55年	農林水産省	地方公共団体	20県 (昭57年)
19	高齢者等肉用牛飼育事業	55年	"	"	導入頭数500頭 (昭57年)
20	農山漁家高齢者活動推進事業	55年	"	"	426地区 (昭57年)
21	シルバー人材センター	55年	労 働 省	公 益 法 人	157団体 (昭57年)
22	高齢者スポーツ活動推進指定市町村設置事業	57年	文 部 省	地方公共団体	
23	高齢者生産活動推進事業	57年	農林水産省	"	

* 年度は国庫補助が開始された年。

もっており、アメリカ、イギリス、フランスなどの国に比べると非常に高い割合である。幸福感は個人差があり変動しやすいものではあるが、これらの資料からわが国の高齢者は病気や経済生活などへの不安はあっても、それなりの幸福感をもっているといえよう。

一方、現在の壮年層(45~54歳)が老後に求める生きがいについてみると、第1位は「趣味・余暇を楽しむ」、第2位は「家族とのだんらん」、第3位は「友人・隣人とのつきあい」となっている。将来におけるレクリエーション施策の重要性がうかがえる。

5. レクリエーション行政

現在、わが国の老人問題に対する施策は15省庁にわたって進められている。高齢者のレクリエーションに関しては、老人福祉対策との関連が深い。そのなかでも、生きがい対策あるいは生活充実に関する施策が重要視される。表6は老後生活充実のための国の施策を国庫補助が開始された年度ごとにまとめたものである⁵⁾。厚生省を中心に、文部省、農林水産省によって、高齢者の社会的参加、生きがい、農山漁村高齢者の活動促

表 7. 老人福祉単独事業の状況(指定都市, 東京 23 区)

大分類	事業名	事業数	構成比	普及率	事業大分類構成比
I 日常生活 支援	01 食事サービス	6	1.1	18.8	33.3 (189)
	02 入浴サービス(ねたきり)	11	1.9	34.4	
	03 " (ねたきり以外)	27	4.8	84.4	
	04 日常生活用具・杖等の給付貸与	34	6.0	106.3	
	05 家庭奉仕員等関係	1	0.2	3.1	
	06 訪問・相談	20	3.5	62.5	
	07 福祉電話	18	3.2	56.3	
	08 緊急連絡器具	24	4.2	75.0	
	09 寝具の乾燥・クリーニング	25	4.4	78.1	
	10 理容サービス	16	2.8	50.0	
	11 その他	7	1.2	21.9	
II 健康管理	12 医療費の公費負担	7	1.2	21.9	7.1 (40)
	13 訪問看護サービス	4	0.7	12.5	
	14 機能回復訓練	9	1.6	28.1	
	15 健康診査・健康相談	7	1.2	21.9	
	16 ハリ・マッサージ	9	1.6	28.1	
	17 その他	4	0.7	12.5	
	III 老後の 生活の 充実	18 就 労	20	3.5	
19 農 園		11	1.9	34.4	
20 社会奉仕活動		3	0.5	9.4	
21 スポーツ		11	1.9	34.4	
22 教養・趣味		35	6.2	109.4	
23 作品展・文化祭・芸能大会等		14	2.5	43.8	
24 老人クラブ助成		16	2.8	50.0	
25 保 養		2	0.4	6.3	
26 ひとり暮らし老人激励会等		7	1.2	21.9	
27 老人福祉大会		5	0.9	15.6	
28 敬老会		18	3.2	56.3	
29 その他	6	1.1	18.8		
IV 福祉施設	30 老人ホーム設備・運営	12	2.1	37.5	7.8 (40)
	31 老人福祉センター整備・運営	7	1.2	21.9	
	32 老人憩の家等の整備・運営	24	4.2	75.0	
	33 その他	1	0.2	3.1	
V その他	34 住 宅	11	1.9	34.4	25.8 (146)
	35 敬老金品支給	54	9.5	168.8	
	36 要援護老人慰問(見舞品)	33	5.8	103.1	
	37 老人ホーム入所者慰問(見舞品)	8	1.4	25.0	
	38 乗車券・バス運行	15	2.7	46.9	
	39 交通安全対策	3	0.5	9.4	
	40 手帳・読本等支給	12	2.1	37.5	
	41 その他	10	1.8	31.3	
			567	100.0	

進, 高齢者の学習活動, 利用施設などにわたって種々の施策が推進されている。老人クラブの育成や高齢者スポーツ教室, 高齢者教室, 高齢者スポーツ活動推進指定市町村設置事業, 利用施設としての老人福祉センター, 老人憩の家, 老人休養ホームなどは高齢者のレクリエーション行政の中心的施策といえよう。高齢者の場合, 生きがいとの関係でいえば就労, 生産活動なども関連があるので, レクリエーションのみならずそれらを含めた総合的な施策が必要となろう。また,

表 7 は, 老人福祉単独事業の状況を全国指定都市及び東京 23 区についてみたものである。レクリエーション行政としては, 健康管理, 老後生活の充実, 福祉施設に関する施策が重要となるが, 各事業ごとの普及率をみるとまだまだ不十分といえる。行政施策としては総合的に実施されており, 総合性, 統合性に欠ける面が多い。今後のレクリエーション行政としては, 各省庁にまたがる高齢者行政を統合して高齢者対策省・庁をつくる必要がある。例えば, 生涯教育省高齢者局や高

齢者対策センターなどを考える時代に来ている。

6. 将来の施策

将来における高齢者のレクリエーション施策を考える場合、将来を次の3つの時期に分けることにする。第1期は、昭和50年～75年(1975～2000年)にかけての高齢化社会へ移行する時期である。この時期には、先述したように65歳以上の高齢者の総人口に占める割合が7%から現在の西欧諸国なみの14～15%に達すると予想されている。第2期は、昭和75年～95年(2000年～2020年)にかけての西欧諸国が経験したことのない高水準の高齢化社会であり、ピーク時には20%程度に達すると予想される時期である。第3期は、昭和95年(2020年)をピーク時としたその後の高齢社会である。第1期については、西欧諸国が経験済みであるので、わが国の場合は現在の制度を工夫していけば対応できるだろう。しかし、西欧諸国と比べて高齢化社会に達する時期が非常に短かいためその対策を急ぐ必要がある。問題は第2期と第3期の西欧諸国が経験したことのない超高齢社会であり、現在急がれている対策の内容がうまく対応できるのか、またより抜本的なアイデアを盛り込んだ施策がとられるのかということにある。既述のように、図1の生きがいの構造図に沿って考えるならば①健康、②経済、③家庭、④社会的参加の4つの側面が重要であり、これらがバランスをとることによってはじめて高齢者の生きがいは充実すると考えられる。これら4つの側面が充実することによって、レクリエーション活動も活発になっていく。従って、施策としてはまずこれらの側面をどのように整備していくかということが問題となる。以下、それぞれについて将来の施策内容を検討してみたい。

(1) 健康面

高齢者の健康問題については、医療保障の問題が一番大きい。現在、財政に占める医療費の増加は急カーブを描いて上昇しており、これは世界的問題となっている。この面では、予防、リハビリに力を入れてなるべく病気に罹らないように、また病気になっても早く回復できるよう努めることが重要である。そのため、老後のレクリエーション活動を活発化させることは、逆に医療費軽減へとつながるので重要となる。この点、超高齢社会になると75歳以上の後期高齢者が増えるので、今後、前期高齢者、後期高齢者というそれぞれの層に対応したきめ細かなレクリエーション・プログ

ラムが必要となろう。これは、福祉面でも重要な寝たきり老人防止対策の一環にもなるであろう。

(2) 経済面

高齢者にとって、経済面で最も基本的役割を果たしている社会保障、そのなかでも年金制度の問題が重要である。これを維持していくためには、①年金給付の上がり方をおさえる、②保険料負担を高める、③年金受給年齢の繰り下げ、などの施策を展開していく必要がある。反面、国の施策ばかりをあてにはできないので私的年金を充実させ、老後の生活は自分で確立していく対策も必要である。次に就労問題を考えると、わが国の高齢者は年をとっても働きたいというニーズが非常に高いので、生きがいとしての就労を促進させる施策、例えば労働省の人材シルバーセンターなどをおおいに伸ばしていく必要がある。また、高齢者のニーズに合致した就労内容を得るためにも老人大学を中心とした新しい就労へつなげる学習活動及び老後に備えた準備プログラムの育成も重要な施策となる。

(3) 家族面

この点では、核家族化の傾向が伸びるため老人世帯に対する積極的レクリエーション施策の展開が必要となる。問題は、家族が要介護老人をかかえた時どうするかである。基本的には、家族の介護ができれば老人自身も幸せであるし、国も財政上助かることになる。しかし、これは家族の負担は大きいものがあるので、ホームヘルパー制度なり家族への経済的援助、施設面ではデイケアセンター、デイホームサービスセンターなどの整備が必要である。また、老人世帯の増加に伴って、高齢者同志の横のつながりによる助け合いやレクリエーション活動の組織化が重要となる。アメリカでは、このような組織が非常に発達していて、老人同志の活動を通して連帯感が盛り上がっている。

(4) 社会的参加

この点では、わが国の高齢者は非常に不活発なのが現状である。老人クラブへの参加がかなりみられるものの、日常的にはテレビ視聴を中心とした静的な生活をしている。この面では、健康や生きがいにつながる積極的なレクリエーション施策が求められる。現在実施されている老人大学のようなものを中心に、老後生活への対応と具体的実践活動を教えてくれる場の確立はおおいに推進する必要がある。

以上、大雑把ではあるがいくつかの施策を提示した。これらの施策が今後昭和95年(2020年)の社会に向けてどのように展開され、どれくらい充実されるのかと

いうことは、この施策を支えるための現在中成長といわれる経済が今後どのように推移するかということと関連する。また、生きがいとは最終的には個人の問題に帰するわけであり、個人がいかに老後を生きるかという意識面も重要な側面といえよう。

7. おわりに

確実に近づいてくる高齢社会を前に、シニア・エイジのレクリエーションについてどのような対策を立てればよいのかという問題意識のもとに稿を進めてきた。現在の高齢者のレクリエーションは、全体として消極的であり社会的参加も低調である。しかも現在の壮年層は、老後の生きがいをレクリエーションに求める傾向が強い。こうした結果から、将来のレクリエーション施策の重要性が確認されたと思う。そして、老後のレクリエーション生活が充実していくためには、先に将来の施策として述べたように経済や健康の問題なども同時に対処していかななくてはならない。

最後に、この他シンポジウムの討論のなかで確認された点を付け加えてまとめにかえたい。

(1) 高齢化社会が抱える諸問題は、単にシニア・エイジだけの問題ではなく全国的課題であり、若い頃からそのような社会に対応できるよう教育すること。そのため、学校教育、社会教育の内容を再検討すること。

(2) 個人が自由で合理的なライフサイクルの設計をすることが可能な自由社会のシステムを創出すること。

(3) シニア・エイジのレクリエーションのベースは家庭にある。従って家庭の基盤の充実を図り社会保障システムとしての家庭機能を強化すること。

(4) 教育、レクリエーション、生活充実のための効率的な行政機構を確立すること。

(5) 高齢者の生活状況はさまざまである。従ってレクリエーション施策も平均的、画一的なものではなく十分に多様性をもたせる必要がある。

付記. 本稿をまとめるにあたって、当日のシンポジウムの記録をお願いした梅田靖次郎氏(西日本工業大学)には資料の提出やテープおこしなど多大な協力を頂いた。

引用文献

- 1) 前川峰雄他編, レクリエーション事典, 不味堂出版, p. 87, 1972.
- 2) 内閣総理大臣官房老人対策室編, 老人の生活と意識, 大蔵省印刷局, p. 37
- 3) 前掲, p. 21.
- 4) 前掲, p. 200.
- 5) 総理府編, 高齢者問題の現状—迫りくる高齢化社会—, 大蔵省印刷局, pp. 211~223, 1980.

参考文献

- 1) 自由民主党研修叢書8, 日本型福祉社会, 自由民主党広報委員会出版局, 1979年
- 2) 内閣総理大臣官房老人対策室, 高齢者問題関連資料, 1981年9月
- 3) 総理府編, 高齢者問題の現状—迫りくる高齢者社会— 1981年
- 4) 日本厚生協会, 厚生サロン8月号, 1982年8月
- 5) シニアエイジの保養行動の解析, 第1部第2部, 年金保養協会, 1976年2月
- 6) 日本社会党高齢化対策プロジェクトチーム, 「見えざる革命」高齢化社会に入る80年代の政策案, 1981年

レジャー・カウンセリングについて

ピーター・A・ウィット*

(田中祥子訳)

今日、私がお話したいと思っていますことは、人々が自由時間の中で何をしたら良いのか、本当に何をしたら幸せを感じるのか、ということなのです。

アメリカには、とても混乱した物の考え方が存在しています。人々は、お金も充分あるし、余暇も充分あるし、したい事は何でもできる環境に置かれています。でも現実に、その人達が5年前、10年前、いや20年前よりも幸せであるという事実はないのです。どちらかというと以前よりも不仕合わせな人が多くなってきているのです。グラス、ロサンゼルス、ニューヨーク、東京のような大都市に住んでいる人の多くは、ストレスを感じながら生きています。その人達のプレッシャーには様々な形があるのですが、その中で一番大きなものは、より良い地位に就きたい、より良い仕事をしたいというような、満たされない欲望によるあせりがあるのです。

まあ身近な例で言うと、周りの人が新しい自動車を買ったからうちも買わなくちゃいけない、隣りの人が素晴らしい宝石を買ったから私も買わなくちゃいけない、隣りのピーターさんが中国に行ったから僕も中国に行かなければいけない。そういう欲望が渦巻いています。大部分の人達は、自分の持っているもの、自分の今ある状態に満足しないんです。そして、自分の周りを見て、周りの人たちと較べて基準を決めるということが、不仕合わせに感ずる一つの要因ではないかと思えます。

だから、不安な状態に居る結果として、アルコールの消費量が増えており、覚せい剤の問題もでできます。その他、様々な健康の問題が起こっていますけれど、その大部分が胃かいようや心臓マヒのようなストレスによる病気です。

自分達の大都市における生活を考えると、小さな籠に沢山のマウスが無理に入れられている場合を思いおこします。何処に行くという目的もなく、なんとなく皆な跳ね回っているという状態です。日本に来て

から色々な人と話をするチャンスもありましたが、その中で、アメリカだけでなく、日本もこのマウスの要素の存在する社会であるように思えるのです。私達は、今のような生活が人間を幸せにしないということも知っているのです。でも、その様な生き方を現実にはしている訳ですね。大都市に住む人は、地方に、少なくとも郊外に住むということを夢みます。でも実際に経済的な面から考えても、人々がどうしても大都市に住まなければならないような状況があるのです。

私としては、都市というと、なんとなく全てが哀しいような絵を描きたくなります。色々な事が、今よりも昔の方が良かったという事が、あまりにも多過ぎるのではないのでしょうか。私達の1人1人が、年令に関係なく社会に出たばかりの人から年寄りまで、皆もう一度立ち止まって、本当に私達が望む生き方とはどういうものであるのか、特に皆様のようにレクリエーションに関心のある方は、是非考える必要があります。レクリエーションの起源、アメリカにおける起源について、ちょっとお話ししたいと思います。

レクリエーションというのがアメリカで問題になってきたのは1950年代60年代、工業化(一種の産業革命なんですが)がなされていた時代なのです。一番最初は、仕事の後に、その人をre-create、つまり再創造、その人間をもう一度使えるような人間につくり直すというrecreateの為にレクリエーションがあるという考え方でした。例えば、仕事の中ですごくプレッシャーがあってテンションを感じる、緊張を受けるような職場だったら、仕事以外の所でその緊張をとりのぞく、これがレクリエーションだと考えています。例えば、全然動かない職に就いている人は、レクリエーションの時には身体を大いに動かしたら良いのではないかとよくいわれます。この考え方によると、仕事以外の事は全て仕事をより良くする為の準備の様な感じで存在してくる訳です。でもアメリカでは最近、仕

* Dean & Associate Professor, Dept. of Recreation & Leisure Studies and North Texas State University

事中心主義でよいのかという疑問を持ち始めています。仕事をするために人生があるという考え方ではなく、仕事も大切、自由時間も大切、それ以外のことも大切、それら全てを含めて生きるということを、トータルな人生の質という点から考えていく姿勢になってきました。それに少しでも近づける一つの試みとして、今度は、レクリエーション、自由時間、余暇に対する人間の態度、余暇能力を身につける方法を考えていくことです。そしてよく考えてみると、仕事の内容というのが、案外人間性を否定するようなものが近代多いようです。そこで、自由時間に本当に人間らしさを発揮できるようなレクリエーション活動をする。私たちレク指導者がしていることは何かというと、人々が本当にしたいことができる様にするということです。

日本でもこの頃少しずつ仕事の質を変えていく、仕事場の質を変えていく、仕事の中でもその人の生き甲斐を入れていく様な場面をもち、ただお仕事をするというのではなくて、仕事を楽しめる様に変えていく努力がなされているような気がします。私達レクリエーションリーダーとしては、仕事以外の時間の使い方、自由時間の中で人々が本当にしたいことをするのを援助するのが、一番大きな役目の様に思います。ここで、私達は人々に、自由時間とはどういうものか、レジャーすなわち余暇とはどういうものか、レクリエーションとは、ということの人々に教えていく必要があります。少し例を挙げてお話ししてみましょう。例えば大勢の人達は、それがしたいというのではなしに、他に何をすることも知らないから、その活動を自由時間にしている、という様な例がよくあります。ある人達は、例えば詩を書くというような文化的な活動をするチャンスが今までなかった。だからある人が、「あ、文化活動、そんなの私、嫌い」と言った場合に、本当に嫌いということではなくて、それに関する情報がない、あまりその事を今迄知らなかった。難かし過ぎるから止めて置こう、つまり「食わず嫌い」ということが多いのではないのでしょうか。

アメリカの東部で、レクリエーションセンター(公民館の様な所)の職員が、ショッピングセンターへ行って、色々な余暇活動をやってみせたことがあります。例えばご婦人の間で大変流行っているものにジャギーズがあります。ジャギーズを「テレビの広告とか新聞・雑誌で見たり読んだりしたけれども、私にはちょっと無理」という様に、なんとなく近づき難いもののように思っている人が多いのです。その理由は、あんまりスタ

イルがよくないからとか、年だからということです。また、テレビのジャギーズのコマーシャルを見ていると、大体、すごい美人がものすごく上手に踊りを踊っている訳ですね。それを見たら、やりたいという気持ちよりも、「ああ、あんなのは私には不可能です。」という気持ちの方が、普通のご婦人には強くなってしまっている訳ですね。だから、レクリエーションセンターの職員が、実演した時には、全然違うアプローチをしました。正に普通の人で、踊りも特に上手くない職員が実演をした訳です。すると、見た人も、「あ、あの程度なら自分もできる。」と言ってやる気を起こします。

もう一つ問題になるのは、競争を目的とした活動が多過ぎることです。そういう競争のあるものには参加したくない人が多いのです。というのは、大部分の人が敗者になるからです。一番になる人は一人しかいない訳です。特にご婦人方はそういう競争の激しいものは、あまりお好みじゃない様です。たぶん過去においての生活の中で、男性は常に競争心を持って生きていく様に育てられてゆくけれども、女性の方は、それ程相手をやっつけて進んでいく生き方をしていないからでしょう。でも最近では、やはり女性も変わってきて、小・中・高等学校においても、女性の素晴らしい運動選手も増えてきました。でも、問題はまだここに残っているのです。アメリカでは、たぶん日本もそういう社会じゃないかと思うのですけれど、野球一つとっても上手な人は皆に誉められてもっとやる気を出しますが、下手なら皆から止めておけという雰囲気です。その上に問題なのは、両親、教師、指導者の中には、上手な子とだけ関ってゆきたいという人が多い。だから、一番最初のところでドロップアウトしちゃう子がでてしまうのです。そして大きくなるに従って野球をやっている子の数が減少してゆくわけです。そして実際には、その中でまた選り分けられて上手な人だけ、もっとがんばればもっとがんばれと皆の声援を受けて上手になっていきます。今はスポーツに例をとりましたが、スポーツに限らず、ダンスにしる、美術にしる、全ての所でこういう状況があるのではないのでしょうか。これは上手な人にとっては大変いいシステムです。でも落ちこぼれていった多くの人々にとってはこれは大変いいシステムでしょうか?、そうではありません。現実にアメリカで調べたところ、こうやって落ちこぼれになった人は、野球をしなくなったからといって違うことを始めたという例はあまりないのです。野球を止めちゃったから全て

止めちゃったという例が多いのです。その落ちこぼれた人達は、人生の全てにおいて、「ああ、俺はもう何をやっても駄目なんだ。」という考え方をもつ様になってしまいます。だから、私たちは今アメリカの社会で一生懸命やっていることは、re-education 自分は落ちこぼれだと思っている人を再教育することです。つまり、野球はだめでも他のことで得意なものがあるはずだという考え方を植えつけるよう指導することです。この再教育を通して、自分に対して否定的な考え方を持っている人たちが、積極的に生きるようになってきた傾向があります。だから、他の活動の中で、楽しさを感じとり、成功することも可能だという経験を学んでいく訳です。だから今、指導者がしなくてはいけないのは、活動の指導法を変えることです。それは今までの様に初心者である底辺は幅広いが、ベテランになると一人・二人になってしまうというピラミッド型ではなく、はじめた人が皆ベテランになっていく長方形にすることです。その長方形の教育を、アメリカではライフ・タイム・エジュケーション、つまり生涯教育とよんでいます。この長方形ではいわゆる途中でいやになってその活動をやめる人はいます。でもそれは、「お前はやめろ」というプレッシャーがかかるからではなく、ただその人は自分の自由意志でやめたいからやめていったということなのです。

ここで、ニュー・ゲームの説明をしましょう。その中では競争心をあおるより、協力の心をもって楽しくやる面を強調します。ニューゲームのバレー・ボールをとってみましょう。Aチームでサーブを終えたM君はBチームに入ります。ある試合がAチーム21、Bチーム10で終了したとします。M君は両チームにいたことがあるので、勝った側とも言えるし、負けた側とも言えます。現実では、参加者の中に、又その両親のコーチで、「こんな馬鹿らしいゲームがあるものか。」と思った人達が居ます。こういうやり方だったら、シーズンが終わった時に、誰も、おじいちゃんやお友達にほこらしげに見せるトロフィーもないのです。でも、そのリーダーは、シーズンの終りに、「その意味するところはどこかという、あなた達全員が勝ち、あなた達全員が負けましたということなのです。」と言って、全員にトロフィーをあげました。ちょっと冗談っぽく言いましたが、それはすごく大切なことなんです。競争心を失くす様な形でバレーボールをやったことによって、その参加者のお互いの関係が大変良くなったという現実があるのです。特に、今の競争社会にまだ

参加していない小さな子供達に、このバレーボールは大変好まれて、いろいろな所でやられています。ある人達は、「人間は皆、競争心がある。」と公言します。実際に私がやっているアメリカでの調査の結果、人間は、競争心を持つというよりも、自分がより良くありたいという欲望の方が強い、ということがわかりました。レクリエーションの指導者として私達がチャレンジしなくてはいけないことは、一人一人の人がより優れた者になっていくのを援助していくことだと思います。勝った負けたということを強調するのではなく、楽しんだというところに焦点を置く様にゲーム自身を変えていった一つの例です。

だから、私達がリーダーとして考えるのは、人間が協力して生きてゆく、支え合っているという、その方を競争よりも強調することが大切だと思います。

例えば、東京の朝の混んだ地下鉄の場合、競争心を持って乗ろうとすれば、人を押しのけてでも自分の場所を作らなければいけない。でも、一緒に詰め込むという考え方をすれば、一人一人がお互いに支え合うという状況で、決して人を押しのけても自分だけが入りたいというのと、相当違ってくるのじゃないでしょうか。協力的に生きてゆくということを私達が学ぶことは、この様に大勢の人達が一緒に住んでいる大都会では、大切なことではないでしょうか。

ここでもう一つ、競争心よりも、協力の心を強調しているニューゲームを御紹介します。椅子とりゲームを御存知ですか。それは誰か一人をゲームからはみ出させるということが目的なんです。それは正に競争心ですよ。一番最初に椅子がとれなかった人は、身体運動が不得意な人、運動神経のない人です。けれども、そういう人こそ運動が必要な人ではないでしょうか。ドッチボールは、アメリカでも子供達が好んでやりますけれども、大体一番最初に当てられるのは、肥満の子で、本当は一番運動が必要な子が、球に当てられて最初に外に出なければならぬケースが多いのです。

今迄存在するゲームを見ていると、上手な人がより上手になり、下手な人は、上手になるチャンスが全然与えられないという現実があるようです。

では、協力的に椅子とりゲームをやる方法をお教えます。最初に15人居たら15、椅子を置く訳です。最初に音楽が止まった時に、全員何処かに座れる訳です。それから一つ椅子を取ります。その目的は、15人の人が14の椅子に座るということです。更に、もう一

つ椅子を減らすのです。15人の人が13の椅子に座らなければならぬ。そうやってゆくと、最後には、椅子が一つで15人座らなければならぬという訳です。そのゲームをする過程の中でその人達が学ぶことは、どうやって支え合って協力し合って、数少ない椅子に皆が座るかということを考える。そうすると同じ遊びでも、人を押しのけてでも座るといふのと、遊び自体は同じでも全然違うものになっていきます。

例えばバスケットボールの試合をやる時でもチームに5人居たら、5人全員に一度パスしてからでなければシュートしていけない、という様なルールを作る訳です。

聞くと不思議に思いますが、子供達はこういう遊びをすごく好みます。そして、こういう様な遊びをした子供達は、大きくなって色々なゲームに参加する時に競争心をあおり立てる様なゲームよりも、協力を根拠とした様なゲームを好む様になります。

一般に競争に対して大変否定的な感じを持っている人が多いように見うけられます。しかし、全ての活動がただ協力だけを強調した方がいいということをお私言っているのではないのです。例えば、アメリカではジョギングが大変流行っています。なぜそんなに流行るのかと言うと、競争心をあおり立てる部分もあるし、協力的な部分もあるのです。私はジョギングが大好きです。3千人と一緒に走って、自分は200番目だった、その時、自分の前に199人居ると思うよりも、自分の後に2,800人居ると思うとすごくいい気持ちになります。ジョギングの場合には、一人一人によって、その基準が違う訳です。だから、自分に勝つ、前の記録より自分がより良ければ、自分に勝ったという満足感がある

訳です。私はずい分いろいろなジョギングのレースに出てますけど、その度に、誰が1番なのかなんていうことは大体知らないことが多いんです。それよりも、自分のタイムが、前のタイムとどれだけ違うか、それによって、自分がすごく楽しくなる、幸せになる、いい気持ちになる、そこが一番大切なところです。自分の友達の1人に、協力ということを強調している人がいます。その人が、ジョギングの時、自分がゴールインしたら戻って行って、後から来る人達に、「がんばれがんばれ」と声を掛け応援する様にしたらどうかと、提案したのです。だから私も、こういうレースに参加しては、自分がゴールに着いたら、ずっと後から戻って、すごく遅い人と一緒に走ってあげた経験があります。そしたらその人のタイムが、前よりもずっと速くなりました。

最後にまとめをちょっとしてみましょう。

余暇教育とかあるいは余暇カウンセリング、色々なプロセス、方法があります。その中のほんの幾つかをちょっと御紹介しただけです。でもその大きな目標は、それに参加する人達の、態度を変えていくということにあるのです。一つには、今迄、全然触れたことのない様な活動を、一般の人達に紹介して、よりバラエティに富んだ、色々な活動に入ってゆける様に奨励すること。特に、指導者が目をかけなければならない対象は、落ちこぼれ、長い間、自分が成功したという経験を持たないで生きてきた人達、だと思えます。それからもうひとつ。ゲームのやり方を変えていく、ということ。その主な目的は、できるだけ競争心をあおり立てる様な部分を取り去って、協力を強調していくことです。

わが国におけるレクリエーション学の体系化に関する研究

「レクリエーション学」の体系化の方法と戦略

話題提供者 鈴木 忠 義(東京農業大学)
 コーディネーター 進 士 五十八(東京農業大学)
 報告者 麻 生 恵(東京農業大学)

1. はじめに

司会(進士)先ず、本学会が昭和57-58年度を通じての連続研究集会をもつことについて、今回が第1回でもあるので、その目的と内容の概要についてお話する。「レクリエーション(以下レクと省略)学」といっても、初めて耳にされる方もおられるぐらい体系化も十分でない。だが、現実の社会的対応の必要性は高まっている。そうした中で、それぞれ個人的には「レク観」をお持ちだと思うが、学会として体系だった「レク学」を確立すべく第一歩をふみ出すべきだということで、企画委員会が検討した結果、表-1のスケジュールと内容で研究集会を開催することになった。

本日の鈴木先生のお話は、このテーマの総論に相当する部分であり、「レク学」にのみこだわらないで、むしろ現代社会でひとつの「学」というものが成立つとすれば、どのような意味あいがあり、あるいはそれを展開するのにどのような視点を持つべきか、といったことについて話題の提供を願い、参加者で討議したい。ところで「レク学」はきわめて学際的な性格を有しているが、先生は昨年まで東京工業大学社会工学科において、土木工学、観光レクリエーション、造園学

等の分野で、自然科学的・技術的側面からもっとソフトな部分まで幅広く研究されており、また国や自治体の関係で政策的なものから建設・計画にいたるまで、実に幅広い視点と活動の持ち主でもあられる。本日のテーマに最もふさわしい方である。

次回の研究集会では、本日の議論を踏まえておよその体系化(案)への概念を描いてみたい。またそれを基本に、その後の各論的な展開ができれば、「レク学の概論」ふうのフレームは出来上るのではないか。多少高望みをしているかもしれないが、この研究会の最終目標をそのあたりに設定している。そういう意味で本日は裾の広い議論が展開できればありがたい。

2. 話題提供

鈴木

(1) 研究の戦略・戦術・機材

本日のテーマは「レク学体系化をめざしての方法と戦略」という言葉の意味からお話したい。

「戦略」と「戦術」という言葉はよく間違えて使われるが、「戦略」とはどうやって攻め落とすかという「すじみち論」のことで、学問にあてはめれば「方法論」といった方がよいかも。この「すじみち」が決まると、次に「戦術」が出てくる。これは剣道のうまい人、弓の打ち方のうまい人といった「技術」のことで、昔は武将がそれを訓練したわけである。したがって、この戦略と戦術の関係は参謀と将軍の关系到相当する。また「機材」というのは武器・弾薬といったもので、学問的にいえば、ハンドブックやポケットブックなどその学問分野の蓄積ということになる。学問が完成するということは、理論、概念、分析、評価が追求され、方法論とデータブックが体系的に完備され、常に修正が進むことである。

ところで、図-1に示したように、戦略・戦術・機材というひとつの構造に対して、それを求める戦略論がある。また更にその戦略論に伴う戦術・機材を求め

表-1 研究会のスケジュールと内容

回	日程・場所	テ - マ
1	82.10. 5 (東京農業大学)	レクリエーション学の体系化をめざして(その方法と対象をめぐってのフリーディスカッション)
2	82.11.27 (日本体育大学)	レクリエーション学の対象と方法を中心として(レクリエーション学の体系化試案)
3	83. 1.29 (上智大学)	レクリエーション原論を中心として
4	83. 6.25 (東京農業大学)	レク資源・レク空間論を中心として
5	83. 9.20 (立教大学)	レク行動・レク指導論を中心として
6	83.11.26 (上智大学)	レク政策・レク学教育論を中心として

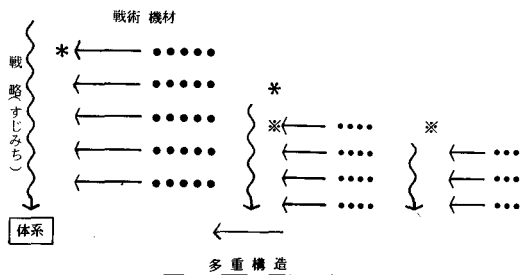


図-1 研究の戦略・戦術・機材

表-2 レクリエーション学体系案

(1) 概念と諸学の位置づけ	(8) 時間
(2) 意義・目的・(役割り)	(9) 経済・産業
(3) 構成(と要素)	(10) 社会
(4) 分類	(11) 行政
(5) 歴史	(12) 情報・啓蒙・宣伝
(6) 行動	(13) 空間
(7) 活動(実技と実習)・教育	

る戦略論が存在する。要は「多重構造」になって学問というのは構成されている。したがって、あるひとつのデータを得るために、そのデータを導く方法論・仮説があり、それを調査・実験・検証してはじめてそのデータが有効になってくる。このように学問というのは多重な積み重ねによって出来ているといえる。

(2) レクリエーション学体系案

レク学についての私なりの体系化案をまとめたので参照していただきたい(表-2)。

(a) 概念と諸学の位置づけを明らかにしておくことが、まず学問においては重要である。この概念というのは最初から明確に規定する必要はなく、また時代と共に徐々に変化するものでもあり、いろいろな意見を聞きながらすすめればよいと思う。私なりのレク概念については、のちほど申し上げたい。

(b) 意義・目的・(役割り)とは、レク学が人間にとってどのような意義を持っているのか、どのような目的をもってやっていけばよいのか、ということである。

(c) 構成・(要素)とは、全体がどのような要素によって、どのような組立てになっているか、を明確にすることで、体系化には重要なことである。

(d) 分類 植物学の分野には分類学があるが、レクリエーションについても、いろんな角度からの分類があるかと思う。レク学においてもそれらの研究者がいてほしいと思う。

(e) 歴史はレクというものがどのような歴史をもっ

ているのかというものであり、大変重要な項目である。

私共が地域計画・地域振興計画等を行う場合、農山村や地方都市住民のレクをどうしたらよいかという問題が生じる。そういう時の説得材料としてレクの歴史は大変重要である。例えば、サッカーの起源というのは、スコットランドの広々とした地形の中で、タウンゲートの中に球を蹴り込んだ方が勝ちという遊びをルール化して生まれたものである。ゴルフも同じようにスコットランドの風土の中で、牧童たちが羊や牛の糞の固まり棒でたたいて遊んでいたのをルール化していったものであり、この競技化することによって人間は大変エキサイトするわけである。このように、レクというのは自分たちの足元からどのように考えていこうかが非常に大事なことである。既成のレクをどう移入するか、或いは同時に新しいレクをいかに開発していくかという場合に、この歴史学は発想法として重要な分野ではないかと思う。

このように歴史的研究は応用分野において大変重要であって、またそれ自体、レク史というのは社会学、経済学等様々な分野から求められるのではない。

(f) 行動の学は行動科学の一部に入るかもしれないが、どうしたらそうしたレク行動が起ってくるのかといったことは、心理学や社会学など様々な周辺の学問的方法を援用しつつ研究されてしかるべきではない。

(g) 活動という言葉は、ここではレクの種目という意味で使っている。種目の開発問題、新しい考え方、実技・実習、あるいはその教育法なども重要な分野ではないか。

(h) 時間の問題は、むしろ余暇論の問題かと思うが、人間の一生という時間の中で、青少年の時期、社会的に活躍している時期、あるいは老後といわれる時期のレクがどうあるべきかといった問題も大きい。NHKなどでは番組編成のため、かなりのデータを蓄積しているし、労働省、通産省などでも今後の課題になっている。

(i) 経済・産業 経済というのは、レクをする人たちのふところ具合のことで、つまり、消費者、お金を使う側の問題からも考えなければならない。経済企画庁あたりではこの問題を研究しているが、産業という側面から考えると、これはいわゆる余暇産業、観光産業といわれていて、またそれに伴う道具や施設の開発などがこれに含まれる。特に最近のスキー用具などは大変高価なものや新しいものが現われてきて、日本の場合はそれが産業になりやすい。また、それに人々が

引きずられ、ひとつのファッションにまでなっている。いわゆるレクのファッション化が進むことになる。このような用具使用の問題は、レクがどれだけ文明化すべきかというところに問題があり、またそれは産業化との関係も考えなければならない。

(j) 社会については、レクの意義・役割りなどと大きな係わりがあって、今日の少年非行の問題なども含まれる。また、レクを我々人間社会の中に入れてゆかかという研究などもある。

(k) 行政といえば、行財政の問題がからんでくるが、レク行政推進の方策、レク行政不在の場合の問題点などの課題がある。我国では高度経済成長の結果、多くの省庁が何らかのかたちで観光やレク問題に施策を、つまり予算を使っている。しかし、その基本であるべきレク学の体系化が不十分なため、バラバラ行政になってきている。そういう意味からも体系化への期待は大きい。

(l) 情報・啓蒙・宣伝であるが、情報は単に資料としてあるだけでなく、それを即座に検索でき利用できるようにしておくこと、つまり検索システムとデータベースシステムの整備が重要である。また、レクを国民の中に浸透させていくために、啓蒙、宣伝といった研究も必要と思う。

(m) 空間については、レク空間・資源の量、質、配置、大きさ、形、アクセスなど様々な問題があって、私共はこうしたものについての計画学的研究を行っているが、これについては最後にやや詳しく申し上げる。

(3) レクリエーションの概念

(a) 余暇とレク、観光、スポーツの関係

労働時間は短くなってきていて、今後余暇は益々増える可能性がある。それをどう使うかということが社

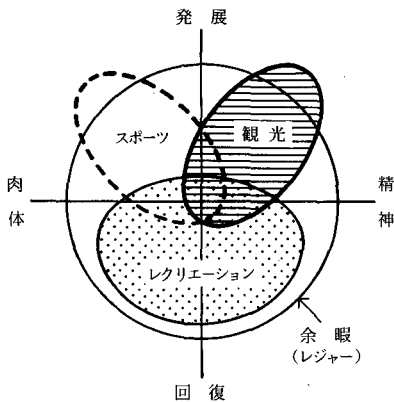


図-2 余暇・観光・レクリエーションの関係

会的にも個人的にも重要で、「余暇観」、「レク観」を明らかにする意義は大変大きい。

まず、レクや観光の多くは余暇に含まれる。これは仕事(生業)ではないという意味である。図-2において外側の円内を余暇活動全般とする。

次にマイナスをゼロにもっていく活動(回復)とプラスをよりプラスにする活動(発展)とがある。例えば、気ばらし、休養などはマイナスに下った精神や肉体的状態をもとのゼロにもっていくものである。それから、技術が向上するとか知識が増えてくるとかいう活動はプラスをより増進させる。つまり図-1において縦軸がこれに相当する。一方、横軸は肉体的なものや精神的なものの軸である。

観光をこの座標に位置づけると、横線を施した部分に相当する。余暇活動の円からはずれた外側の部分は、例えば学校でまとまって出かける修学旅行などである。次に、スポーツは破線で囲まれた部分に相当し、確かにマイナスをゼロにする効果も認められる。余暇活動の円からはずれた部分には、体育の先生やプロのスポーツマンなどが含まれる。

観光やスポーツに比べると狭い意味でのレクは多分に気ばらし的なもので、疲労した精神を回復するなど、マイナスをゼロにもっていく効果が大変大きく、また人との交流などプラスの部分も含まれる。したがってこの図では点を施した部分に相当することになる。勿論、スポーツや観光の中にもレク効果が出てくるわけだが、これは狭い意味でこのように分けた場合の概念規定である。今後、様々な側面から討論しながら学会でオーソライズしていくことが必要であると思う。

(b) 日常—非日常による分類

次に、広義のレクと狭義のレクの問題についてであ

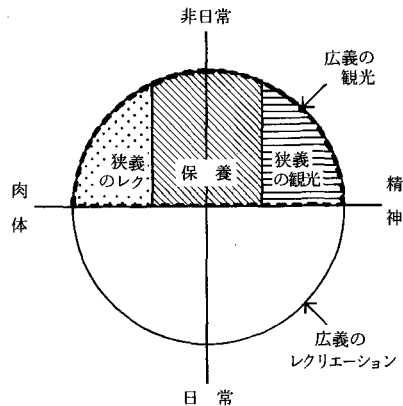


図-3 レクリエーション・観光・保養の関係

るが、空間的な側面から考えてみるとこれも二つの軸で捉えることができ、縦軸に日常—非日常空間、横軸に同じく精神的なものとの肉体的なものをとると、観光とは日常空間を離れて、非日常空間を回遊し、再び日常空間に帰ってくる、つまりラケット構造がその定義であるから、観光というのは非日常空間の図-3における上半分の領域(破線で囲まれた部分)に位置づけされる。その中で狭い意味のsightseeing的な観光は精神性の強い部分(横線を施した部分)、また海水浴やゴルフに行ったり観光地で行うスキーなどの活動は狭い意味でのレクとして肉体的な部分(点を施した部分)に相当する。次に、観光の中でもリゾートで読書したり、直接仕事と関係のない教養を広めるといったもの、つまり休養や修養といったものは「保養」と呼ばれていて、狭義の観光の狭義のレクの間(斜線を施した部分)に位置づけられる。

そこで広い意味での観光と広い意味でのレクはどうなるのかといえば、観光ははっきり日常空間から離れているので、上半分の円内をもって広義の観光としたらどうか、レクというのは日常非日常関係なく行われるので、円内全体を広義のレクリエーションとしたらどうかということである。

(4) 総合の学・問題解決の学

先程、社会工学科と紹介されたが、私はここに13年半ほど務めたわけだが、これは文部大臣をやられた永井道雄さんや川喜田二郎先生、鶴見俊輔先生などによって、世の中が“学”という名のもとに大変細分化されていていってしまう。もっとトータルな横の連絡をもった学をつくる必要がある、ということが議論され、それらの結果生まれたということである。考えてみると、生態学というのは大変古くからあったわけだが、なかなか陽の目をみなかった。また柳田国男先生がやられた民俗学も大変な総合の学であったが、学問としてなかなか認められなかった。しかし、何事も掘り下げてゆけば、また論理を積み重ねてゆけば必ず深くなっていく。ところが、このような諸学をくくって人間の幸福を追求していくような学が果して成立つかどうかという議論があって、それに近いことを今まで扱ってきたのは社会学であった。しかし、問題提起だけでなく、それを解決の学問とするにはどうすればよいか、要するに社会工学は社会学から一步踏み出して、どうやったら問題が解決できるかという解決法まで出そうというものであった。

レク学も周辺の学問がたくさんあり、同様の性格を

有すると考えるが、私共はそれぞれの立場からレク学会という土俵を借りることで様々な分野の人と議論をしつつ、問題解決に向えばよいと考えている。

(5) レクリエーション空間計画の方法

(a) 計画の構造

次に私が手がけているレク空間計画の内容についてお話ししたい。表-3の縦軸に書いてあるが、この5段階の重なりをもって「計画の構造」と呼んでいる。Ⅰは後で詳しく申し上げるが、計画を行う場合、五つのことを考えるということ、Ⅱは経済学の言葉でplando seeといい、①見直しをやって、②新しく企画を立て、③実行に移して、また④それを見直していく、ということを目指す。Ⅲは、レク空間というのは人間が主体であって、この人間に対してどういう環境を造っていくかというところにレク空間計画の課題がある。つまり人間の問題を追求する必要がある。あるいは、それをとりまく環境と人間の関係が出てくるだろう。ところが、自然とか我々の造ったものはそんなに都合よくはできていないし、人間というのは過去と現在とでは価値意識が違ってくる。しかしそれに対応してこうしたモノを造っていかねばならないので、どうしても開発行為、あるいは空間や国土の管理ということが出てくる。そのとき、どういうことを基本的にもっていかなければならないのか、というのがこのⅢである。

次に、それを考えていくつめ方としては、Ⅳの価値と考え方を明確にしていくことが大事ではないかということである。例えば河川に対する価値観をとり上げてみても、最近では花火が復活したり河川敷がレク空間として様々に整備されてきている。つまり、単なる治水や水資源という河川の位置づけから脱皮して、人間の環境として扱っていかう、生態系を保ちながらレク空間として利用していかうと変化してきたからである。このように人間というものは、それ自体が価値意識を変えてくるというところに多くの課題がある。つまり、そこで計画をする場合の目標設定に、価値ともの考え方が大きく影響してくるということである。それに対して計画の対象、すなわち何を対象として空間開発するのか、川を対象に、山、森林、あるいは古い文化財のようなものをうまく使いながらやるのか、またレクの面からいえばもっとソフトな人間の心をとらえてレク空間を計画できないか、このような様々な発想がある。それは計画者の価値と考え方、あるいはその人が蓄積した専門的知識によって対象は違ってくる。

表-3 計画の構造

I 計画の5要素	5 計画の構成と構成作業員 (①意思決定者+②主体の代表者+③開発主体+④計画家)								
	1 計画の主体	2 計画の目的			3 計画の対象	4 計画の手段			
II 計画作業	1 見直し作業			2 計画作業			4 実施計画作業		
III 理念の形成	1 人間の哲学		2 環境の哲学		3 開発または管理の哲学				
IV 価値と考え方	1 思想				2 発想		3 構想		
V 計画の順序	1 生存と生きがいの探究	2 環境の基本	3 現状と課題	4 計画目標	5 計画の対象	6 基本方針	7 全体計画	8 部分計画	9 運用計画
	1 個人レベル	2 公共レベル	3 制約条件前提条件	4 目標年次水準	5 もの、かね、ひと、しくみ、ところ	6 諸原則	7 手段の選択	8 詳細と手順	9 活用手段と効果
計画の分野	VI 計画の段階								
①	③ 構想計画								
計画の規模	基本計画								
	実施計画								
②	運用計画								

表-4 計画の5要素と団体

(加納治郎：計画の科学 P228(1963)を参照して作成)

団体	公共計画					企業の計画				
計画の5要素	公共計画					企業の計画				
計画の主体	地域住民 + 来問者 (人間)					顧客 株主, 従業員, 役員				
計画の目的	目的 — 問題 — 課題 — 目標 個人 健康, いきがい 社会 最大多数の最大幸福 (福祉国家の原理として再認識)					利潤 企業の安定成長 企業の社会的貢献				
計画の対象	もの	かね	ひと	しくみ	ところ	もの	かね	ひと	しくみ	ところ
	地 域 租 税 技 術 法 律 や り 気 施 設	資 源 寄 付 計 画 家 規 則 組 織 協 議 会 同 等	空 間 会 助 金 地 域 ー ダ ー	補 償 金 子 補 給 金 奨 励 金	や り 組 織 協 議 会 同 等	設 備 材 等	資 本 金 貯 蓄 等	経 営 技 術 企 画 家 等	法 規 組 織 契 約	や り 組 織 協 議 会 同 等
計画の手段	創 改 良 維 管	ら 借 入 持 理	は 借 入 持 理	雇 用 奉 仕 する	守 衛 する	創 改 良 維 管	貯 蓄 借 入 持 理	雇 用 奉 仕 する	守 衛 する	P R 話 合 参 加 する
計画の構成	組 立					組 立				
	主体	目的	対象	手段	策 定 者	(1) に 同 じ	社 長	役 員	専 門 家	

そういうことから基本方針が決まり、構想が生まれ
てくる。以下精度を高めるために基本計画, 実施計画,
運用計画という手順で進めていくわけである。

(b) 計画の5要素
それをやや応用的に書いたのが表-4で、公共計画
企業の計画に分かれている。この両者のどこが違うか

という、公共計画の場合は主体が地域住民+来訪者であり、企業の場合は顧客、株主、従業員といった人々になる。したがって企業の場合、目的は利潤が中心になり、公共計画の場合の目的は個人の生きがいや幸福、社会的には最大多数の最大幸福ということになる。

次に計画の対象であるが、実際に何か動かすかという「もの」、「かね」、「ひと」、「しくみ」、「こころ」である。つまり、この五つの対象をいかに操作していくかということになる。更にそれを実際にやっていく計画の手段としては「こころ」の例をとあげると、PR、話す、集合、参加ということがあげられ、それによって意志が通じあい、計画がうまく行えるということになる。

最後に計画の構成を書いているが、主体と目的から本来のニーズが出てくる。対象と手段から供給が出てくる。この需給関係を長期ビジョンのもとでうまく整合させていくのが計画である。

以上が私共が行っている空間計画の概要であるが、私はこのすじみち論はレク学の研究計画にも適用できるのではないかと考えている。

3. 討 論

司会(進士) 引続いてディスカッションに移りたいと思う。本日のテーマは最初に申し上げたように、ひとつの結論を得るというものではないが、只今の鈴木先生の講演の中で、①すじみち論、つまり戦略と戦術は参謀と将軍の違いだというお話があり、そのあたりをひとつの軸にしたい。それから社会工学の話をされて②総合学たり得るか、ちょうどレク学も生態学や民俗学に近い問題を抱えているわけで、果して学たり得るのかという議論と、学というものの現代的意義、つまり先ほど社会工学の「工学」というのは手段とか解決法とか、そういう意味でお使いになったと思うが、つまりレク学というものが人間の幸せのために考えなければならない問題を解決できるのか、あるいはそのためにはどうすればよいのかという視点。もうひとつは③先生が提案された体系案に対して、更に付け加えた方がよいという事柄がおありかどうか。それから④先生は模式図をお出しになってレクの概念化のお話をされたが、これはレク一般の話にもどすとやや観光に偏重気味かも知れず、観光レク以外の方々からもご意見があればいただきたい。最後の⑤戦略論は、そのままそっくり「レク学」つまり「レクリエーション」、「レク計画」に置き換えても使える筈だと言われたが、

そのあたりについてもご意見があればいただきたい。

参加者からの意見(要点要約)

(1) 体系化の方法論・すじみち論に関するもの

- ・レクリエーション現象というものは場所や時間等によって多様に変化し、きわめて把握しにくいため、その研究には多くの困難を伴う。したがって、対象の限定つまりそれを捉えるためのパラメーターを決めていく必要があり、そうした現象学的アプローチの積み重ねによってレク学というものが体系化されていくのではないか。(浅田)
- ・人間の「行動」と「心」の二つの軸の中に様々な時代環境の中から生まれるレク現象というものを位置づけ、その動きのパターンをマクロな視点で眺めることによって、体系化の手掛りが見つかるのではないか。(涌井)
- ・鈴木先生が示された13項目の体系案の中で「行動」と「空間」の2つを中心として、まず最初に行動の科学および空間論的視点から内容を深め、段階的に細分化、拡大していけばよい。
- ・レク学の体系化は、その「化」の部分、プロセスの部分に意味がある。様々な人達とレク空間づくりの共同作業をやる中で、ひとつの体系化、プロセスをつめていく学が必要であると思う。(毛塚)
- ・レク学体系化の戦略・戦術等を考える際、いったい我々の敵はどこにいるのか、味方はどこまでなのかを捉えておく必要がある。(西野)
- ・レク学会という名前自体からは、レク活動そのものに頭がいきやすいが、レク学の体系案を考える際には、もっと時間の概念を前面に出すことが必要である。私は名称をレジャーレク学会とするのがよいと考えている。(師岡)

(2) 総合の学についての意見

- ・総合の学、応用の学は学問でないということをお聞きしたが、私はこれからのレク学研究にはこういう方法が大事であり、それもひとつの学問であると考えられる。(松浦)
- ・学問的であるからこそ、日頃自分の領域で解決できなかった問題を解決できる手段となり得る。

(3) レク概念(模式図)に関するもの

- ・心の問題、例えば音楽を聞いたり読書をするといった活動は、先生は修養というように位置づけられたかと思うが、私はレクの分野に含まれると思う。(西野)
- ・カルチャーセンターや家事から発展したレク、例え

ば清物を習うといった生活の中のレクも余暇時間が多くなった今日、レク現象として捉える必要がある。(福留)

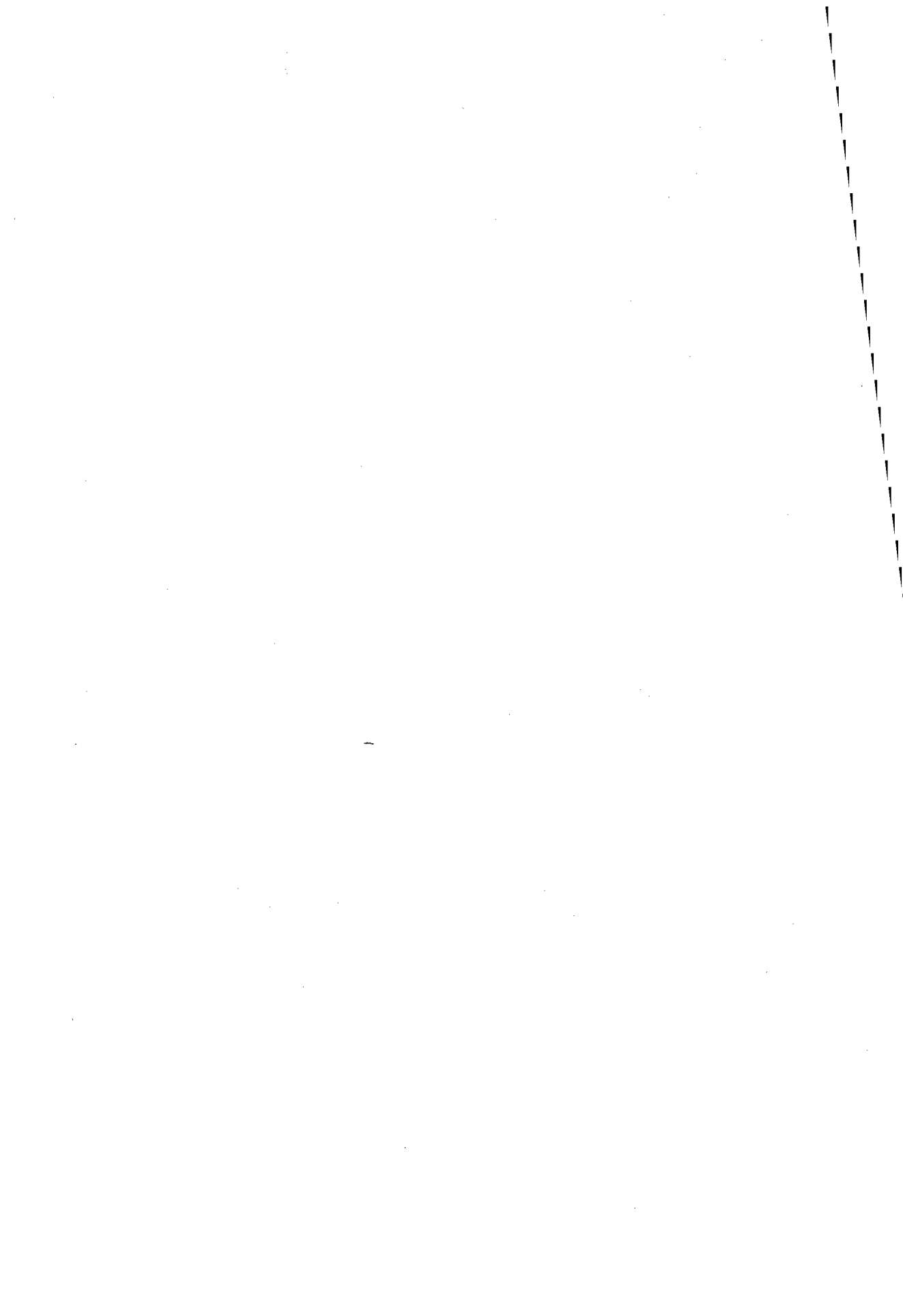
- 日本人は空間把握が苦手な人種で、観光のラケット型構造も対象の連続として理解される傾向がある。レクという言葉も輸入語で概念を理解するのが難しい。(石井)
- プラス面、マイナス面という考え方に興味をもったが、何がプラスで何がマイナスなのかをもう少し明確にする必要がある。(石井)

(4) 価値観が変化することについて

- レク学の分野では他の学問にないような価値観の変

化があり、それは現象として捉えることができるかもしれないが、体系化は大変困難であると思う。(石井)

- 価値観の変化をもたらす人間とは何かということをもまず追求しなければならないと考える。
 - 時代とともに価値観がすべて変るとは限らない。むしろ変らないものに注目する必要があるのではないか。(一場)
 - レク現象やそれらの価値が変わるとは思わない。河川に対する価値観もその時代の権力者の考え方によるものだと思う。(石井)
- その他、多くの意見が出たが、紙面の関係で割愛した。御了承願いたい。



レクリエーション学の対象と方法

話題提供者	西野 仁 (東海大学)
	山崎 進 (相模女子大学)
	前野 淳一郎 (千葉大学)
コーディネーター	今井 毅 (日本体育大学)
報告者	石橋 宏宣 (日本体育大学)

西野 仁

まずはじめに、レクリエーション学の学という言葉について考えてみたい。学が学として成立するための論議があるが、いまだ、体育学という分野が果してあるのかということが話題となっていることを考えあわせ、ここでは、レクリエーション研究とほぼ同義に使うことにしたい。

次に、「レクリエーション」の一応のここでの定義をしたい。「レジャーを自由に選択された Intrinsic Motivation による活動」と大きくとらえ、その中で、「個人的にも、社会的にも利益があると予測され行われる自発的な仕事ではない組織された活動」とレクリエーションとひとまず定義し、話をすすめたい。なお、ここでいう利益とは、気晴らしや、回復や、自己実現の他に、人間関係づくりや、地域づくりなど、基本的に人間の幸福に貢献する様々なことがらを含むことはいうまでもない。

ところで、レクリエーション学の目的は、一口でいえば、「人間の幸福に貢献するためにレクリエーション

がどうあらねばならないかを明らかにすること」にあると考える。そのためには、レクリエーション現象の解明と、その成果の実際場面への適用の両面が研究されねばなるまい。具体的には、大きく次の三点である。

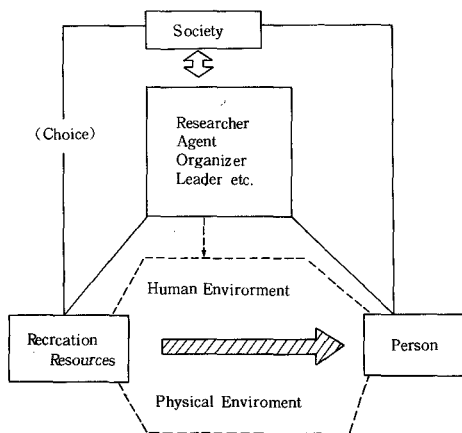
- ① レク現象の把握
- ② そこでの一般法則性の発見と、理論化
- ③ 研究結果の実際場面への適用と応用

これらのことがらを実施する場合、レク現象をそのものと、その研究領域を明らかにしておくことが重要な問題となる。

ここで言うレクリエーション現象とは、人のレクリエーション行動に関連して起る様々な現象をさす。レクリエーションは、個人的なことがらであると同時に、その多くは社会と密接な関係をもつことがらでもある。それだけに現象自体が複雑であり、それをとらえる場合、理念系としてのモデルをつくり、それをもとに理解していくことが適当だろう。どういうモデルが適当かということも、研究の重要なテーマであるが、試案として、図のような「レクリエーション活動の社会的構造」を紹介し、それを使って、考えを述べたい。

まず、人のレクリエーション行動は、基本的には「人」が「レク資源」を享受することであると、とらえたい。ここでいう資源とは活動種目の他に、瞑想にふけることや、グループづくりの過程なども含める。そして、その行動は、その「人」をとりまく「人間的環境」(グループや家族など)と「物理的な環境」(施設や空間・用具など)の、いわゆる、レクリエーションの「場」を介して行われる。「人」がレクの「場」において「レク資源」を享受することが「レク行動」の基本型であるが、その行動が、多くの制度や組織あるいは人々等によって側面からささえられている場合が少くない。「レク行動」が行われやすいように、「場」の整備や、アドバイスを行う。リーダーや、オーガナイザー、さらに研究者等の

レクリエーション活動の社会的構造



他、教育委員会、会社の厚生課等の存在がそれである。

こうした、具体的な、レク行動が行われる状況あらゆる構造を「ミクロの構造」と呼ぶことにする。

また、「ミクロの構造」全体が、それをも含めた社会と関係する。「ミクロの構造」と社会とで形づくられる大きなフレームを「マクロの構造」と名づけたい。

レクリエーション現象は、「ミクロの構造」内で行われる。「レク行動」と、それに起因する直接的・間接的な現象と同時に、「マクロ構造」と「ミクロ構造」の相互に関係する現象をも包含する領域をイメージせねばなるまい。

こうしたモデルから考えられる研究領域は複雑ではなく、大きく次の3つに集約できようし、代表的研究テーマも例示したい。

1) レク現象と人間社会とのかかわりを研究する領域(例 レクの社会的役割、レクと宗教、レク需要の予測など)

2) ミクロ構造における、構造の各構成要素や、レク行動そのものに中心を置いた研究領域(例 「人」に中心をおいた)生活時間調査、(「資源」に中心をおいた)遊びの分類、(「人的環境」としての)レク・グループについて、(「物理的環境」に中心をおく)オープンスペースの利用法などの他、レク行動研究や、リーダーについての研究など)

3) ミクロ構造全体を一つとしてとらえ、そこでのレク現象をとらえようとする研究領域(職場レクの実態調査、子供会のレクリエーション活動など)。

次に考えねばならないことは研究方法である。新しい学としてのレクリエーション学は専門諸学から食いちぎられた雑居状態に陥らぬよう注意すべきであろうし、そのためには、総合科学的であり実践と結びついた学であらねばなるまい。医学が、基礎と臨床の二面の相互作用により成果をあげているようにレクリエーション学もレク現象の基礎的研究と、その実際場面への応用を重視した実践的研究の両面を持たねばなるまい。その意味からすれば、ディマズ・ディエが言うアプローチが有効であろう。

つまり、「現状分析としての記述モデルのアプローチ」にスタートし、「原因—結果を考える説明アプローチ」そして「実際場面への適用を行い、その結果をフィードバックして改良していく、実験モデルのアプローチ」がそれである。

そして、そのための研究手法としては、理論的、歴史的、文献的、実験的(純粋な意味での実験的なもの

と、実際に行われていることがらを実験的にとらえていくとらえ方の二つがあるが)、調査的、実験的、ケース、スタディー等の方法をとることになるだろう。

山 崎 進

私は今、消費者教育の問題にとりくんでいる。消費生活というと、ただものを消費しているというふうにしかり理解されていない。残念ながら、消費生活が何を生んでいるかを理解している人は少ない。消費することによってエネルギーがわき、そこに活性化された人間が生まれてくる。つまり、昨日の私より今日の私の方がすばらしくなっていくところに、消費生活の意味がある。そういった意味で、レジャー、レクリエーションは、消費生活の問題なのである。

さて、レクリエーション学は新しい学問である。対象は何か、目的は何か、方法は何かと何度も問い返していく中で学問として格好がついてくるものである。しかし、レクリエーション現象の法則性を発見することによって、人間に残されている能力や開発されていない能力も判明することが期待される。私は、そこにレク学体系化の意義を見出ししている。そこで、今回は、レク学体系化にあたって、いくつか気にかかるところを指摘しておきたい。

1. 用語の問題

レジャーという言葉は使用する際あまり抵抗を感じない。が、余暇という言葉は、中国から入ってきた言葉であるが、レジャーの訳語としては適当でない。レジャーの日本語訳を余暇とする安易な考えは問題がある。

2. 分類の問題

現在のところ、レクリエーション活動は、形態によって分類されている場合が多い。つまり、拘束時間と自由時間によって分けているわけだが、これでよいとは思えない。むしろ目的によって分類する必要があるのではなからうか。

人間は目的をもった生体システムであるから、何の目的でどういう活動体系のものをやるか、ということを考える必要がある。ただ休養や旅行という形態だけで規定しないで、目的的分析、分類が大切だと思う。

主体が人間であるだけに、男性向き、女性向き、子供向き、成人向き、高令者向きというような分け方も必要だ。

さらに、職業や学歴による分類も必要であろう。

もうひとつ、日本人の特性や背景を考慮した分類も欲しい。中国、欧州、中東、米国とは異った日本人社会のレクリエーション活動がある。これは価値観や精神構造のちがいにあり、それを大切にしたいものである。

3. 高令者の問題

高令化社会に向っているが、高令人口を、福祉という観念だけで取り扱ってはいけない。むしろ、65才以上の高令者の能力を活性化するという視点が必要だ。最近の老年学や大脳生理学の知見からも、高令者の能力水準が高いことを受けとめ、対応すべきであろう。

4. 社会教育との連繋の問題

これからは、社会教育を、レクリエーション活動の場、レクリエーション指導の場としていくことが大切だ。公民館や市民会館や婦人会館や文化会館や体育館などのプログラムを体系化することも必要であろう。

レクリエーションとは、消費生活活動である。それ由に、人間の能力の発達向上に主力をおくべきだと考える。そういう視点から、いくつかの問題提起を試みた次第である。

前野 淳一郎

私は、地域開発であるとか環境開発といった、主としてフィジカルな側面からの調査・計画とかコンサルテーションの業務を仕事としている。レクリエーション学会へは、山崎先生とご一緒に、学会の前身である研究会発足当時から参加させていただいている。

千葉大学・造園学科の学生には、私の事務所で行っている業務(特にレクリエーションだとか観光、つまり人間の生きる喜びに関わる環境の開発・保全)についての話をしている。私は医者でいうと臨床医の立場であって、なしる学問的成果を利用させてもらっている立場である。学生時代の専攻は林学(森林や林業を取り扱う)だったが、その中の造園学というジャンルに首をつっこんだ。レクリエーションに係わる資源、いわゆる物的資源、地域ないし空間といった問題をとり扱う領域である。生活々動、レクリエーション活動を支える舞台づくりといったようなハードなもの、物的な環境をとり扱う分野である。この分野の対象・要素と

しては、環境、景観、あるいは施設、装置、用具、情報等があげられる。またこうした舞台づくりに関わる技術分野としては、土木、建築、造園等をあげることができる。計画分野としては都市計画、農林計画、地域計画あるいは土地利用計画といった学問分野があげられる。それぞれの分野においてレクリエーションに関連をした研究が行われている。その他、空間的な拡がりとして大変広いのは、農林水産資源空間である。このような生産空間におけるレクリエーション活動のオーバーラップについても、各方面から関心をもたれている。

舞台づくりに関わる技術分野の中では、土木、建築、造園が御三家といえるが、いずれにしても国土空間をつくりあげていくために実際に動いている技術である。例えば、この中で建築学会は数万人の学会員で構成されているが、レクリエーション問題一般とか、個々のレク施設についても、その利用のされ方等沢山の研究がなされている。私の所属している造園学会でも同様である。

造園の場合は、このレクリエーション学会のメンバーの皆さんが関心を持っているレクリエーション指導との結びつきが大変深い。例えば、児童公園における指導問題については戦前から色々と模索されており、研究成果も出ている。自然公園についてもレインジャー・自然公園の指導員の制度があるが、このようなことから造園は特にレクリエーション指導問題とは関りの深い分野といえる。

さて、以上のような立場から話を進めてゆきたい。

公園とかレクリエーション施設、あるいは都市とか地域の環境を開発していくに当たっての手続き(プロセス)は調査・計画・設計・施行・管理・再開発という手順をふむ。①まず与えられた場、空間・環境の現状把握をする段階がある。地形、地質、土壌、植物、動物あるいは地理的条件とかについて調査していくわけだが、それぞれの場面についての方法論等に関する研究がなされている。②併行して、人々が現実に行っているレクリエーションの行動様式とか意識志向の実態把握というプロセスが必要になる。それらについての研究成果もあがっているが、現象の研究を深めておられるレク学会の皆さんの研究成果を大いに活用させて載きたいわけだ。以上の二つが調査の段階である。③次に、将来その場で行われるレクリエーションの望ましい姿をイメージするという操作の段階がくる。それを計画といってもよいだろう。それをその場にふさわしい生活

空間の創出という形で④設計、⑤施行に結びつけていく。さらに、いい状態で維持、管理、運営してゆくための管理運営面の調査研究も大きなテーマである。

造園には限らないが、ある施設、環境をつくっていく一連の作業の中では、このような手順をふむことになる。調査、計画そして管理運営といったテーマに関する研究については、行動心理学であるとか、生態学、文化人類学などの知見を利用する機会が多い。

私共が研究をしている造園学の場合は、生活空間技術学であるが、レクリエーション学の場合は、生活技術学であるというような位置づけもされるのではない。造園学の場合、原論、歴史研究、技術研究(調査・計画・設計あるいは施行ないし管理といった面についての)そして政策研究などという形で研究が進められている。

以上、レクリエーションの場の研究という立場から造園の分野における研究の対象と方法について、あらましを述べた。永年、レクリエーション学会に所属させていただいたけれども、私自身の問題意識として2～3の問題を提起しておきたい。ご意見を承ることができれば幸いである。

1. まず最初は、レクリエーション学会のメンバーによって色々なレクリエーション研究がなされているわけだが1～2物足りないと思っていることがある。

(1) レクリエーション活動研究をする場合常に場であるとか空間そして環境といった問題を念頭においてほしいということだ。

例えば、56年秋のレクリエーション学会の時に、カヌー競技の研究発表があった。カヌー競技の組織の問題とか、大変興味のある問題が出たのだが、どういう所でカヌーを練習したり競技をしているのかという点について、ついでに調べていただくと大変ありがたかったと思う。

(2) もうひとつは、他の学問分野(造園・建築・都市計画といった分野)での研究成果に是非目を配っていただきたいということ。地理学とか、観光学のような分野でも関係のある発表が出ている。「レクリエーション研究第8号」に「日本のレクリエーション研究の動向」についての研究発表があった。そこではこのレクリエーション研究会、ないし学会で発表されたものだけをとりあげていろいろと分析を加えていた。この点については大変不満である。他の分野への目くばりが是非ほしいと思う。

(3) もうひとつは、どちらかというとう商業レクリエーションという分野を軽視または無視する傾向があるようだがこれには大変問題があるのではないか。レクリエーション・サービスの事業化は急速に拡大発展しているわけだから、このような面を無視すべきではないと考える。

(4) それから、実践的な研究、前向きの研究がぜひほしい。例えば、いま公園にどんどん予算がついて作っているが、一方で公園をうまく利用するための研究等を進めることが是非必要である。また、自然との関わりあいの中で自然をできるだけ傷めつけないでキャンプをする方法はないか等の実践的な研究も大変必要と考える。

2. つきに、レクリエーション学の体系化の問題についてである。体系化にむかって運動、努力することは大変結構なことなのだが、体系化が固定化・ドグマ化につながる危険性のあることを指摘しておきたい。学説や理論のドグマ化・権威・固定化が害毒を流した例は過去に数多くある。そのような意味で“常に運動させる”というか、体系化の方向をめざして運動していくことが、そしてそのプロセスが大事ではないかと考えている。

3. 3番目の問題提起として、生活空間(技術)学としての造園学、そして生活(技術)学としてのレクリエーション学にとって共通して或る矛盾を内包しているということを示しておきたい。

月刊レクリエーション、1982年6月号の「レク研究—私はこう考える」というアンケート調査の中で、ある方が、「本来、レク指導者や、レク運動などは消滅すべきものである。これらがいらなくなる社会に向けての方向性を示すための研究を重ねること。」と述べているが、これは造園学についてもいえることだ。造園学という事業が盛大に発展する時代というのは、つまりそこに環境の悪化が象徴されているわけで、大変良くない時代である。ほっておいても、造園家が手を加えなくても、世の中の環境・空間が良い状態になることが、本来あるべき姿であると考えられる。

水をかけるつもりは毛頭ないが、“自らを不安なものとする”ために研究するという一種の矛盾した問題を内在している、(つまりは自己肥大、拡大の抑制が必要)ということを常に認識しておくべきではなかろうか。

レクリエーション原論を中心として

話題提供者 川村英男(体育学研究者)
 近藤英男(近畿大学)
 浅田隆夫(筑波大学)
 コーディネーター・ 蕪木 隆(電気通信学園)
 報告者

昭和58年、1月29日、上智大学に於て、日本レクリエーション学会第3回研究会が開催された。本研究会は、レクリエーション学の体系化を目指すため、「わが国におけるレクリエーション学の体系化に関する研究」というタイトルで計6回のシリーズ研究会企画の一貫として行われたものであり、この道の権威である3名の先生……川村英男氏、近藤英男氏、浅田隆夫氏に、レクリエーションを原理的立場から考察していただいた。参考迄に、第1回研究会は東京農業大学に於て、レクリエーション学の体系化を目指してというテーマで自由討議が行われ、第2回は日本体育大学に於て、レクリエーション学の対象と方法を中心としてというテーマで、レクリエーション学の体系化試案が提出されている。

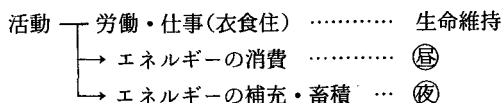
さて、「レクリエーション原論を中心として」というテーマにおいては、まず、「レクリエーション」とは何か、「原論」とは何か、「原理」と「原論」との概念の相異、「レクリエーション原論」とは何か、というように各々の言葉の概念が明確化される必要があるが、本研究会ではその作業に追われるのではなく(時間の都合上)、「レクリエーション原論」を次のような共通理解のもとで各先生に話題を提供していただいた。すなわち、レクリエーション原論はレクリエーションの本質を明らかにすることである。

以下に各先生の話題を要約する。

川村英男氏

レクリエーションは人間の生き方に関係がある。レクリエーションは活動そのものよりも、活動の影響、役割、意味など、いわば機能に重点をおく(Leisure・余暇は時間的概念であり、Play, Sport, 遊び等は活動に関する概念である)。原論とは極て多義的な言葉であるが、その(レクリエーション)の根源を論ずるものである。—人間の生きようとする事、人間の本性

にその根源を求めようとする。さて人間性という言葉の概念に目を向けると、人間の回復ということには、人間性が失われているという発想がある。人間形成というときには、未熟・未発達なものという発想がある。人間性は物体の性質のように固定的なものではない。そこに教育や喪失、崩壊の可能性と危険がある。そこでレクリエーションと人間の構造図式の根源を求めると、そこに生命体としての人間の生命のリズム、生活のリズムが考えられる。自然界のリズムにおいて、生命のリズム、生活のリズムをとらえてみると、人間には次のような生来の生理的・機能的構造をもっていることがわかる。すなわち、活動と休息・睡眠あるいは消費と補充・蓄積(運動と休息・栄養)で、1日のリズムは以下のように考えられる。

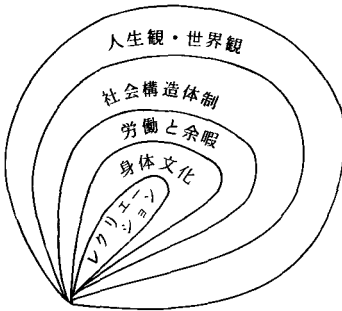


ところが労働・仕事の分化が始まると階層の分化が始まり、それが社会構造の変化となって人間の生活リズムを変化させる。わが国の場合、古代に直接生産に関与しない階層が出現するが、その時代にはまだ余暇という観念は生まれていない。文芸、芸能などは仕事であった。中世には、労働のひまに遊ぶということが出てくるが、そのひまが積極的に明らかに意識されるようになったのは近世以降である。ひまにあそぶことからあそぶためにひまをつくろうと努める。四季に伴う労働と遊び・祭りは生活のリズムをつくり(年中行事)、それにまたエネルギーを費やすことになる。又若い時に苦勞して働き隠居して遊山・芸能を求めるといふ年令的なものははっきりしてくる。幕藩体制はひまとあそびを罪悪視し、勤勞をたつとぶ風習をつくりあげた。このように生活のリズムが変化してくるわけであるが、もう一度生命のリズムという視点から現実をとらえてみると、現実の生活・生存競争(利・理知の世界)を実

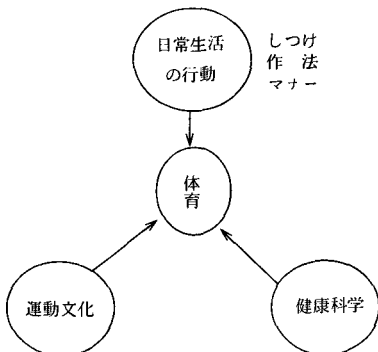
ととらえ、現実からの離脱・自由・解放(夢、情の世界)を虚ととらえる、いわば虚実の戯れとでもいうべき生命のリズムが考えられる。これに合わせてポルトマンの理論的機能と感性的な機能を考えてみると、今日の教育は感性的教育を軽視あるいは無視し、理論的教育に重点を置きすぎていることに問題があるのではないか。感性的教育をもっと大事にし、とりあげていく必要がある。ポルトマンは感性的機能としてのレクリエーション・身体感覚をとりあげていこうとしている。レクリエーションとは何かという根源を求めるには、単に余暇とかLeisureとかいう言葉だけでなく、人間の生命そのものの中に潜んでいるものとしてこれを新たにとらえることが、レクリエーションの根源を求めるときの一つのポイントになるであろう。

近藤英男氏

体育の立場からレクリエーションを考えていくと、レクリエーションを次の五重層でとらえることができる。

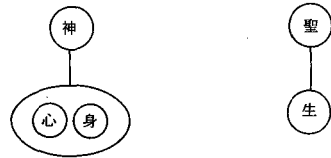


ここでは体育を身体文化論の立場でとらえ、身体文化からレクリエーションを考察していく。身体文化は、人間の生命を守り、育てきたえ、高めるために、身体または身体運動を基盤・媒体として形成された文化の総称であると定義できるが、それを次のような図でおさえることができる。



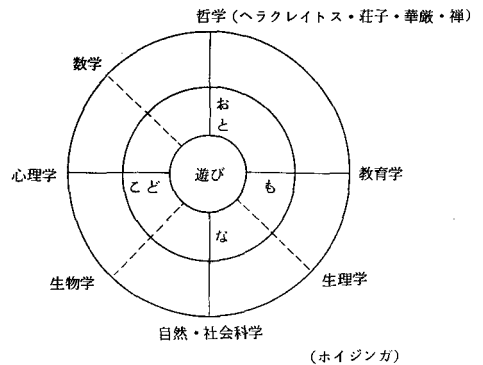
このような考え方は東洋哲学から引き出される。つまり東洋哲学における言葉の中から見出される。東洋で一番大事な言葉は聖という字であり、次に重要な言葉は神という字である。以下生と心と身の関係について図示する。

生と心と身について



このように人間の生命力(生まれてから死ぬまでの体系)を大事にするために、このような言葉が位置づけられているのである。

さて舞踊文化の展開に目を向けると、〈労働(生活)→遊戯→舞踊文化〉というように展開するが、人間は初めから、労働・遊戯のバランスがとれていた。つまり日本でいう、ハレとケ、そして祭りがあげられる。さらにレクリエーションを考えるには、労働観の変遷—余暇観の変遷をしっかりとらえねばならない。またこれからは遊戯論の座標を次のようにとらえてみた。



このように考えていくと、従来のレクリエーション観は、忙中在閑(忙しい中に暇を見つけて遊ぶ)であるが、考えを閑中在忙に転換する必要があろう。労働と遊戯のバランスが必要で、人間性回復には、閑中在忙の考えに則り、労働・遊戯的人間(ホモ・ファルデンス[※])像をこれから打ち出す必要があるだろう。

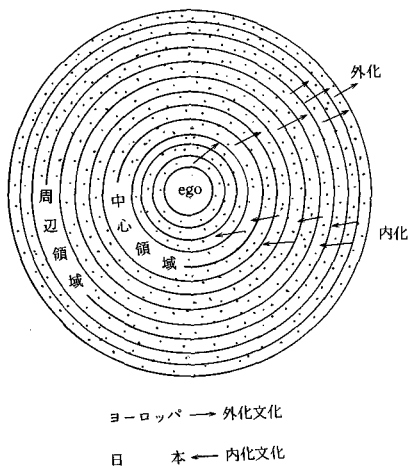
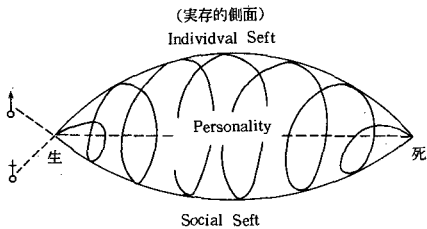
※ ホモ・ルーデンス(ホイジンガ)とホモ・ファーベル(マルクス)をだき合わせた言葉

浅田隆夫氏

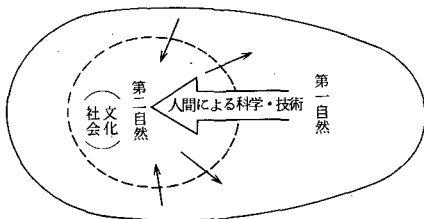
レクリエーションとは何かを念頭に置いて、日本人の心性とレクリエーション様式について考えると、日本人の心性とレクリエーションを、空存(無)を志向する存在平衡運動としてとらえることができるのではないか。

1. 人間とは

1) 人間の一つのとらえ方として、次図のようにとらえることができる。

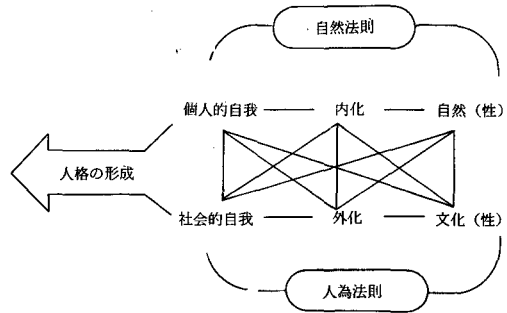


2) 人間・自然・社会の関係は次のようにとらえられる。



3) 人間とは(人格の形成)次のようにとらえられる。

人格の形成モデル

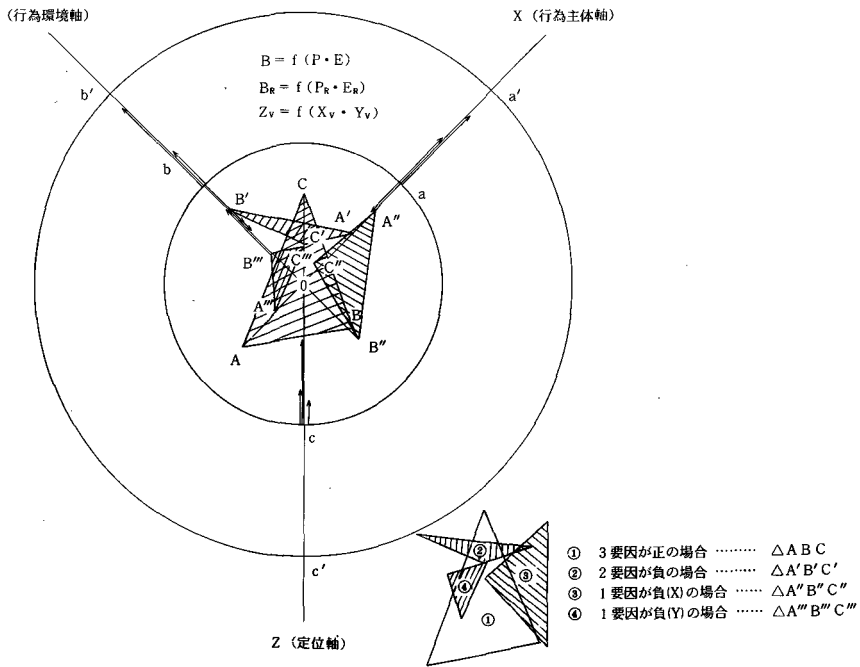


2. 日本人の心性とレクリエーション

- 1) 日本的精神風土
- 2) 日本の文化としてのレクリエーション

(1) 下村寒太郎の考え方から

日本人の心性は一般性をもった傾向型はあるが、歴史とともに変容する。外来文化の受容のし方に見られるように、日本の文化は文化の雑居性に特色がある(和洋折衷)。しかも日本人の思想の座標軸の欠如(丸山真男氏)といわれながら、東洋・ヨーロッパ・日本の思想が同時に雑然と存在している。日本の思想史に対する事実の精察・論理を確立しなければならない。日本では伝統のないことが日本思想の伝統であるが、そこに日本の文化の特色がみられる。下村・丸山両氏の考えをまとめると、次のように思われる。日本人は一般に志向のし方に、二元的に分化する傾向がある。すなわち体制と個人の区分が明確でなくあいまいである。日本人のおかれている今日の大衆社会に目を向けると、われわれは伝統と規範から自由になった反面、安定した秩序が壊れ、それによる青少年への影響が大きく、彼らの攻撃性・依存性が強くなり、自己愛的志向に陥りやすく、今問題になっている落ちこぼれ、暴力という形で現われてきている。又、現代社会のシンボルがマスコミ等の操作によって、自己愛的傾向を持ってきているが、このような時こそ、連帯感のような自己愛的傾向・socializationが必要になってきている。これが現代の日本人の心性における問題である。このような時こそレクリエーションを次のような無を志向する存在平衡運動としてとらえる必要があるのではないか。



(2) 西田幾太郎の考え方から

ここで西田哲学の身体論から考えてみると、世界はもともと身体的なものである。身体はもともと世界的である。身体は世界が形成する場所である(つくる者をつくられる者につくられる)。現象学の中では人間は世界内存在といわれ、個が出发点となる。身体は可能性として存在し、主体的であり作用そのものである。行為的なものであり、つくれるものへ転換する。この西田哲学から、レクリエーション主観化の方向へ考えることが必要である。生命現象は緊張・解緊との相互作用にある。リズムは主体にあるのであって、それが平衡的に運動するのが良い。

まとめ

川村氏は人間の生活リズムをレクリエーションの原点としてとらえ、近藤氏は、いろいろな立場から、す

なわち体育・労働・遊戯からレクリエーション学を考察した。また浅田氏は日本人の心性とレクリエーションを、無を志向する存在平衡運動としてとらえようとした。3名の先生の発表の後、フロアーとの意見交換・先生どうしの意見交換の要旨を本研究会のまとめとした。

レクリエーションという用語にヨーロッパではとくが、日本的な心性に立ったレクリエーション、日本人の心性をもう少し重視しなければならない。偶然3名とも東洋哲学に話題が集ったが、それと関係あるだろう。体育は生きる力をつけるには、すなわち生きることにかかわらねばならない。従来体育は理論的なものに関わり過ぎ、感性的なものを忘れがちでなかったか。スポーツ・レクリエーションは価値に関わるものである。よってレクリエーションは、人間存在そのものを追求し、価値づけの方向へもっていかなければならない。

研究発表

レジャー・レクリエーションに関する短期大学・
大学・大学院等の卒業論文発表会

昭和58年3月12日(土) (上智会館 第5会議室〈東京都千代田区〉)

学士論文の部

1. 「レクリエーションとスポーツに対するイメージの分析的研究」……………
石井 康宏 (筑波大学体育専門学群) 指導教授: 池田 勝
2. 「自由裁量活動の関心とその行動に関する研究」……………
木村 博人 (順天堂大学体育学部) 指導教授: 宮下 桂治
3. 「勤労者の健康・体力に関する調査研究」……………
横山 文人 (筑波大学体育専門学群) 指導教授: 池田 勝
4. 「健康増進センターにおける休養指導の現状 — 定性的現状把握 — 」……………
東浦 一裕 (日本体育大学体育学部) 指導教授: 今井 毅
5. 「身体障害者の身体的レクリエーション活動が日常生活に及ぼす影響の分析」……………
渡辺 剛 (筑波大学体育専門学群) 指導教授: 池田 勝
6. 「実態調査による海水浴場における利用客の行動分析」……………
富田由紀志 (東京農業大学林学科) 指導教授: 鈴木 忠義
7. 「レクリエーションとしての釣りと釣り場の研究」……………
林 進 (東京農業大学造園学科) 指導教授: 鈴木 忠義
8. 「海中公園のこれからの利用について — 特にダイビングについて — 」……………
牛山ゆきか (東京農業大学造園学科) 指導教授: 鈴木 忠義
9. 「ブランコに関する一考察」……………
小倉 善夫 (東京農業大学造園学科) 指導教授: 進士五十八
10. 「幼児期の遊びと社会的行動に関する研究
— 主として遊び場面での攻撃行動について — 」……………
高杉 淳子 (上智大学社会福祉学科) 指導教授: 春見 静子
11. 「組織キャンプにおけるプログラム・ディレクターのリーダーシップ」……………
渡植 理保 (筑波大学体育専門学群) 指導教授: 飯田 稔
12. 「長期キャンプに関する研究」……………
田中みや子 (東京女子体育大学体育学部) 指導教授: 松浦三代子
13. 「キャンプ活動における燃料についての実験的研究
— ストーブ燃料・固型燃料について — 」……………
角田 浩 (東海大学体育学部) 指導教授: 大北 文生

修士論文の部

14. 「野外活動における事故と法的責任に関する研究
— 日米の事故事例を中心として — 」……………
竹谷 和之 (筑波大学大学院体育研究科) 指導教授: 長谷川純三

<昭和57年度支部研究活動報告>

(近畿支部)

◦第1回定例研究集会(6月25日・大阪体育大学)

- ・講演「レジャー・カウンセリングについて」

.....ピーター・A・ウィット(ノース・テキサス州立大学準教授)

◦第2回定例研究集会(11月27日・大阪体育大学)

- ・研究発表

1. 子どもの遊びの「歪」に関する事例的研究

.....永吉 宏英(大阪体育大学)・塚本 真也(職業訓練大学校)

2. キャンプ期間についての基礎的研究 — 中学校教員のキャンプ期間に対しての意識 —

.....福田 芳則(大阪体育大学)

◦第3回定例研究集会(3月19日・大阪体育大学)

- ・卒業論文発表

1. 子どもの遊びの「歪」に関する事例的研究(Ⅱ)

藤谷 信子(大阪体育大学)
指導教授:永吉 宏英・中大路 哲(大阪体育大学)

2. 非行とレクリエーション教育

寺野 寛信(滋賀大学)
指導教授:草川 一枝(滋賀大学)

3. レクリエーションの教育論

中村 幸子(滋賀大学)
指導教授:草川 一枝(滋賀大学)

(九州支部)

◦研究大会兼定例研究会(2月12日・福岡大学)

- ・研究発表

1. トレーニング・ジムに関する一考察

北村 裕子(福岡教育大学)

2. 国民体育大会を契機とする体育施設利用の変化について

甲斐 義教(福岡大学)

3. スポーツゲームの分析 — ラグビーゲームにおける攻撃パターンの研究 —

.....堀内 浩史・渡辺 兼士・行徳 誠治・中村 義幸(福岡教育大学)

4. 都城市におけるミニ・バレーボール活動について

宮ノ下雄司(福岡大学)

5. 登山者の登高心理に関する一考察

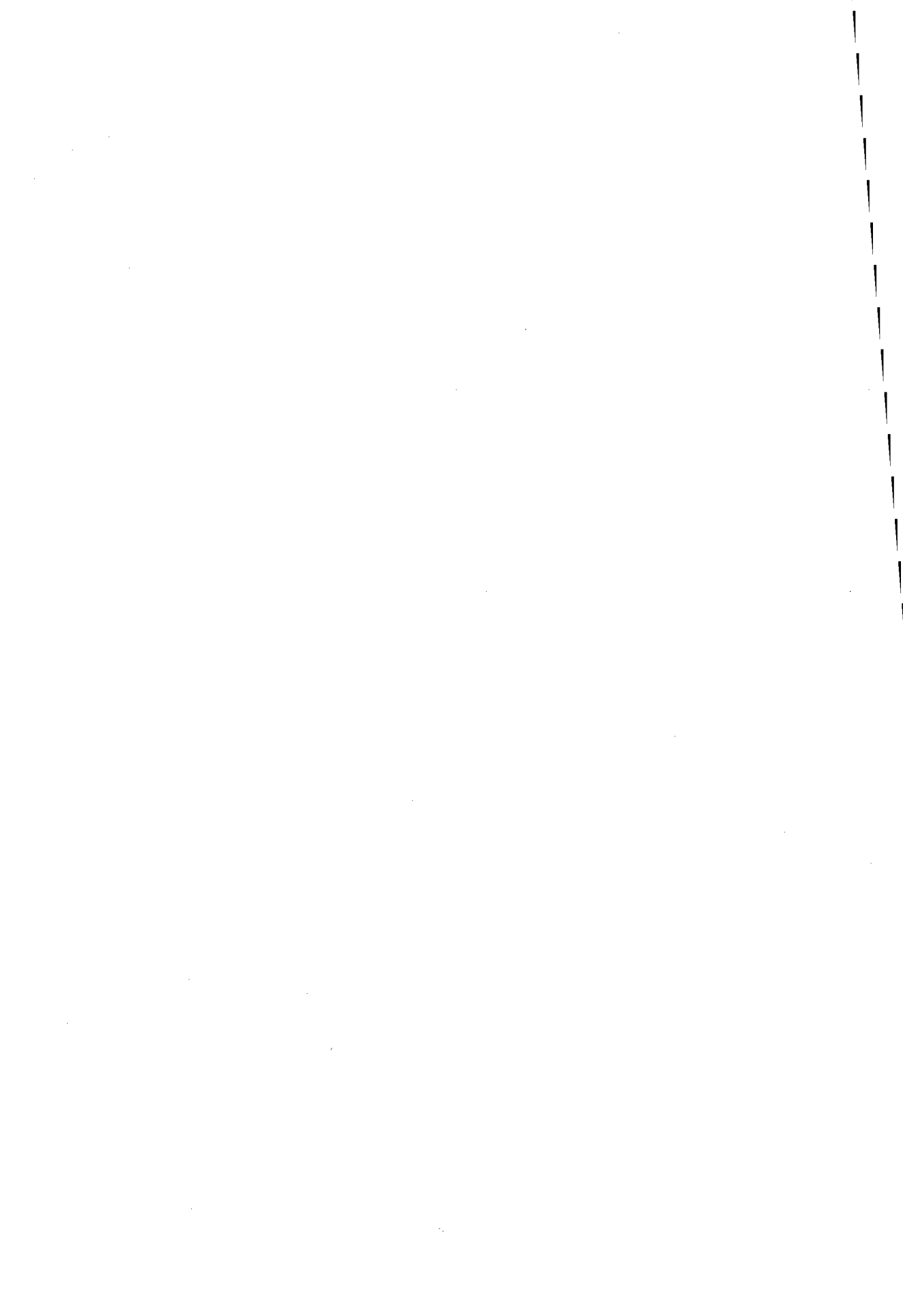
大門 真(福岡教育大学)

6. 某バス会社運転手の体力の実態

小田 真一・柏原 卓幸・出口 幸子(福岡大学)

7. 豊前市民のスポーツ意識に関する実態調査

園田 稔子(福岡大学)



学 会 通 信

1. 第13回日本レクリエーション学会大会案内

- (1) 日 時 : 1983年10月30日(日)
- (2) 場 所 : 大阪府大阪市
北浜労働センター
- (3) 内 容 : 一般研究発表
(予 定) 専門分野別シンポジウム
特別講演
昭和58年度総会
理事会
- (4) 一般研究発表申込
 1. 発表資格: 昭和58年度会費を納入した会員
 2. 発表形式: 口頭発表
 3. 登壇回数: 共同研究をのぞき, 1人1回
 4. 発表時間: 一題15分
 5. 発表申込: 同封の申込書に所定事項を記入し, 返信用封筒(120円切手貼付)を添え, 事務局へ郵送して下さい。
 6. 発表申込締切: 1983年8月27日(厳守)
 7. 発表抄録原稿提出: 申込書を受理後, 1週間以内に, 事務局から規定の原稿用紙を送付しますので, タイプまたは楷書による手書き(墨字)の横書きで原稿を作成しコピー1部を添えて, 9月17日(必着)までに学会本部事務局へお送り下さい。

2. 「レクリエーション研究」第11号投稿募集

- (1) 投稿期限: 1983年11月26日(土) 必着
- (2) 投稿規定: レクリエーション研究 第10号最終頁参照。
 - 必ず, コピー3部を添えて提出して下さい。
 - 校正は編集委員会の責任校正とします。
- (3) 郵 送 先: 〒150 東京都渋谷区神南1-1-1
(財)日本レクリエーション協会
日本レクリエーション学会 編集委員会

3. 昭和58年度研究集会案内

○6月25日(土) 2:00~4:00 P.M.

- テーマ:「わが国におけるレクリエーション学の体系化に関する研究(その4)
~レク資源, レク空間を中心として~」
- 会 場: 東京農業大学(詳しくは, 当日正門に提示します)
- 話題提供者: 未定(募集中)
- コーディネーター: 進士五十八(東京農業大学)

○9月20日(火) 6:00~8:00 P.M.

テーマ:「わが国におけるレクリエーション学の体系化に関する研究(その5)
~レク行動, レク指導を中心として~」
会場:立教大学(詳しくは, 当日正門に提示します)
話題提供者:未定(募集中)
コーディネーター:松原洋三(立教大学)

○11月26日(土) 2:00~4:00 P.M.

テーマ:「わが国におけるレクリエーション学の体系化に関する研究(その6)
~レク政策, レク学教育を中心として~」
会場:上智大学(東京都千代田区紀尾井町7-1 Tel. 03(238)3004・3783)内上智会館
第3会議室
話題提供者:未定(募集中)
コーディネーター:松浦三代子(東京女子体育大学)

○3月10日(土) 2:00~5:00 P.M.

内容:レジャー・レクリエーションに関する短期大学・大学・大学院等の卒業論文発表会
会場:上智大学内上智会館
発表申込:ハガキに住所・氏名・電話番号・学校名・論文テーマ・指導教官名を明記の上,
2月18日(土)迄に事務局へお送り下さい。学会員外の方でも結構です。

4. 「会員名簿」記載事項の変更および追加

(氏名)	(勤務先)	(現住所)
1 深町一夫	松戸市中小企業相談所	
〃 浅田隆夫	筑波大→(抹消)	
2 永吉宏英	大阪体育大	TEL 0726(34)3141
〃 蕪木隆		〒156 世田谷区船橋2-4-13 千歳船橋アパート TEL 03(483)7766 136号
3 国馬善郎		〒963 郡山市咲田2-17-14
5 金子和正		〒343 越谷市宮本町5-174-1-101 TEL 0489(66)4827
〃 古賀登美子	→(退会の為, すべて抹消)	
〃 杉町百合子		〒343 越谷市蒲生東町3030-2-201 TEL 0484(87)7951
	(転居の為, 埼玉県に追加)	
6 梅沢佳子		
8 大森雅之		〒248 鎌倉市腰越909-4 川間荘203号
12 杉田百合子	→(埼玉県に転居の為, すべて抹消)	
〃 鈴木誠	東京農業大	〒120 足立区千住旭町10-29 TEL 03(881)6623
	(新入会員:東京都)TEL 03(420)2131	
〃 鈴木佑一	(財)日本体育協会 TEL 03(401)7976	
〃 藺田碩哉		TEL 0427(35)2647
13 春田八重子	→(退会の為, すべて抹消)	

- 14 美齊津 千 広 〒 190 立川市羽衣町 3-117 みどり荘
 “ 八 尾 勝 〒 181 三鷹市新川 1-5-13 五月荘
- 15 渡 辺 範 久 田原農業改良普及所 〒 441-31 豊橋市大脇町大脇 30-4
 (新入会員:愛知県) TEL 05312 (2) 0381 TEL 0532 (41) 2
- 17 北 牧 忠 靖 松下電子部品(株)
 →(抹消) 〒 571 門真市御堂町 15-12-4
 TEL 06 (901) 4802
- 18 福 田 芳 則 大阪体育大
 TEL 0726 (34) 3141
- 19 松 井 喜 三 →(ご逝去の為, すべて抹消)
- 20 野 口 徹 TEL 06 (345) 5651
- 21 林 壽 彦 TEL 082 (291) 7111 〒 733 広島市西区庚午北 3-3-1
 TEL 082 (271) 5861
- “ 西 村 清 己 広島大福山分校
 (新入会員:広島県) TEL 0849 (24) 6211 〒 721 福山市港町 2-2-13
 TEL 0849 (23) 3272
- 26 三 上 吉 洋 玉川大 〒 236 横浜市金沢区釜利谷町 1917-96
 (新入学生会員) TEL 045 (783) 3901
- “ Serena E. ARNOLD Univ. of California,
 (記載もれ特別会員) Los Angeles 501 Las Casas Pacific Palisades,
 Ca. U. S. A.
- “ David R. CHASE Pennsylvania State
 (新入特別会員) Univ. College of Health, RhyiscalEd. & Recreation
 Pennsylvania State Univ.
 276 Recreation Bldg.
 Univeasity Park, Pa.16802, U. S. A.
- 27 (株)ツクダ(代表取締役 佃 義範)
 (新入賛助会員) 〒 111 台東区橋場 1-36-10
 TEL 03 (871) 3171
- “ 関東学院大学図書館 〒 236 横浜市金沢区六浦町 4834
 TEL 045 (781) 2001
- “ Gerald S. KENYON
The Univ. of Lethbridge
 4401 University Drive
 Lethbridge, Alberta T1K 3M4, Canada
 TEL 403 (329) 2202
- 28 Peter A. Witt
 (機関誌寄贈先追加) Dept. of Recreation & Leisure Studies
Noth Texas State Univ.
P. O Box 13857
Denton, Texas 76203 -3857, U.S.A.
- “ (その他の機関誌寄贈先追加)
- (財)日本レクリエーション協会
 - 日本観光学会
 - 日本セラピー学会
 - 日本セラピューティック・レクリエーション協会
 - 日本生活学会
 - (社)日本造園学会
 - 東京農業大学造園学科(機関誌交換)
 - 家政学会
 - 家庭科学研究所(機関誌交換)

日本レクリエーション学会会則

<第1章 総則>

第1条 本会を日本レクリエーション学会(英語名Japanese Society of Leisure and Recreation Studies)という。

第2条 本会の目的は、レクリエーションに関する調査研究を促進し、レクリエーションの発展に寄与する。

第3条 本会の事務局は、財団法人日本レクリエーション協会内に置く。

<第2章 事業>

第4条 本会は第2条の目的を達成するため、次の事業を行なう。

1. 学会大会の開催
2. 研究会、講演会等の開催
3. 機関誌の発行ならびにその他の情報活動
4. 研究の助成
5. 内外の諸団体との連絡と情報の交換
6. 会員相互の親睦
7. その他本会の目的に資する事業

第5条 学会大会は、毎年1回以上開催し、研究成果を発表する。

<第3章 会員>

第6条 本会は正会員の他、学生会員、特別会員、賛助会員、および名誉会員を置くことができる。

1. 正会員は第2条の目的に賛同し、正会員の推薦および、理事会の承認を得て、規定の入会金および会費を納入した者とする。
2. 学生会員は、大学生(大学院生を除く)およびそれに準ずる者とする。
3. 特別会員は、本会の目的に賛同する外地在住者とする。
4. 賛助会員は、本会の事業に財政的援助をなした者で、理事会の承認を得た者とする。
5. 名誉会員は、本会に特別に貢献のあった者で、理事会の推薦を経て総会で承認された者とする。

第7条 会員は、本会の編集発行する機関誌(紙)等の配布を受け本会の営む事業に参加することができる。

第8条 会員にして会費の納入を怠った者および会の名誉を棄損した者は、理事会の議を経て会員としての資格を停止されることがある。

<第4章 役員>

第9条 本会を運営するために、総会において正会員の中から次の役員を選ぶ。

顧問若干名、会長1名、副会長若干名、理事長1名、理事若干名、監事2名

第10条 顧問は、事務局と理事会の運営に対して必要に応じて助言を行ない、相談に応じる。

会長は、本会を代表し、会務を総括する。

副会長は、会長を補佐し、会長に事故がある時、これを代行する。

理事長は、理事会を総括し、理事は会務を執行する。

監事は、事務局と理事会の運営を監査する。

第11条 役員任期は2年とし、再任を妨げない。

第12条 本会に名誉会長を置くことができる。

<第5章 会議>

第13条 本会の会議は、総会および理事会とする。

第14条 通常総会は、毎年1回開催し役員を選出および本会の運営に関する重要事項を審議決定する。総会は、会長が招集し、当日の出席正会員をもって構成する。

議事の運営に関しては別にこれを定める。

第15条 理事会が必要と認めた場合、もしくは正会員の1/3以上の開催請求があった場合、臨時総会を開くことができる。

第16条 理事会は理事長が招集し、幹事若干名および事務局員を選出し、会務を処理する。

<第6章 支部および専門分科会>

第17条 本会の事業を推進するために、支部ならびに専門分科会を置くことができる。

支部ならびに専門分科会についての規則は別に定める。

<第7章 会計>

第18条 本会の経費は、会費、寄付金およびその他の

収入をもって支弁する。

第19条 会員の会費は次の通りとする。

1. 入会金 1,000円(4米ドル)
2. 正会員 年額 4,000円
3. 学生会員 “ 1,000円(大学院生は除く)
4. 特別会員 “ 20米ドル
5. 賛助会員 “ 20,000円以上

第20条 本会の会計年度は毎年4月に始まり、翌年3月に終る。

付 則

1. 本会の会則は、総会において出席正会員の2/3以上を得た議決により変更することができる。
2. 本会則は、昭和46年3月21日より施行する。
3. 本会則は、昭和51年5月1日より一部改訂する。
4. 本会則は、昭和55年5月11日より一部改訂する。
5. 本会則は、昭和56年11月8日より一部改訂する。
6. 本会則は、昭和57年6月12日より一部改訂する。

理事会の運営に関する規定

昭和57年6月12日制定

1. 会則第16条の規定により、理事会の運営は、会則に定められているほか、この規定に基づいて行うものとする。
2. 理事会は、原則として年に1回以上開催するものとし、理事長がその議長となる。
3. 理事会の招集に当っては、書面によって付議事項を明示しなければならない。
4. 理事会は、理事の過半数の出席により成立し、議決は出席者の2分の1以上の賛成を必要とする。ただし、表決に当っては、予め書面(書名捺印)を以って当該議事に対する意向を表示した者を、出席者とみなす。
5. (1) 常任理事会構成員は若干名とする。
(2) 常任理事会は、理事会決定の方針にもとづき、日常業務の執行にあたる。
(3) 常任理事会の議事録(概要)はできるだけすみやかに各理事に送付するものとする。
6. 理事会には、業務を遂行するために次のような専門委員会をおく。
庶務、企画、編集、広報渉外、財務
7. 理事会には、専門的に研究、調査および審議を必要とするような場合には、特別委員会を設置することができる。特別委員会の委員には、理事以外の適任者を委嘱することができるがその人選は理事会の承認を必要とする。
8. その他理事会の運営に必要な事項は、理事会で決定することができるものとする。

専門分科会設置に関する規定

昭和57年6月12日制定

1. 会則第17条の規定により、本会会員が専門分科会を設置しようとする場合は、この規定に基づいて行うものとする。
2. 専門分科会の設置は、原則として研究分野を同じくする本学会正会員20名以上の要請があった場合とする。
3. 専門分科会の設置を求めようとする正会員は下記により本学会会長に申請するものとする。
 1. 設立経過および主旨
 2. 名 称
 3. 発起人代表者
 4. 発起人名簿
 5. 連絡事務所
 6. そ の 他
4. 専門分科会は次の事項について各年度ごとに本部に報告する。
 1. 活動状況の概要
 2. その他必要と認められる事項

支部に関する規定

昭和56年11月8日制定

1. 本学会会員が、支部を設けようとする場合には、下記により、本学会会長に申請し、理事会の議を経て総会の承認をえるものとする。
 1. 設立の経過概要
 2. 名 称
 3. 支部長および役員
 4. 会 則
 5. 会員名簿
 6. そ の 他
2. 各支部の運営は、本部との関係については本規定に従って行われるが、その他の事項については各支部規則においてこれを定めるものとする。
3. 支部は原則として隣接する地域に在勤または在住する本学会正会員20名以上をもって構成する。
4. 支部運営のための経費は支部会費によって賄うものとする。支部会費の額は各支部毎に決定するものとする。
5. 支部は次の事項について各年度ごとに本部に報告する。
 1. 役員の変更
 2. 活動状況の概要
 3. その他必要と認められる事項

「レクリエーション研究」投稿規定

1. 投稿者は原則として本会会員であること。
2. 論文は他誌に未投稿のものに限る。
3. 論文は新かなづかい、制限漢字使用を原則とし、横書き400字詰原稿用紙を使用する。欧文はタイプライターによるか、または特に明瞭にかく。
4. 論文はカシラに論文・資料・その他（書評・抄録・学校紹介等）を朱書する。
5. 論文・資料の原稿にはかならず欧文の表題・ローマ字書きフルネームの氏名および図版・写真の欧文説明をつける。
6. 邦文論文・欧文論文とも、邦文摘要（800字以内）あるいは欧文摘要（Resume）のどちらかをつけること。ただし、欧文摘要（Resume）については、編集委員会に一任することができる。
7. 図版はかならず白紙に墨書きとし、図版・写真類は上下の別を明記のこと。
8. 論文の原稿には第1頁下端に勤務先（職名）を記すこと。
9. 論文は1篇につき400字詰にて30枚分（図版・写真共、刷り上り8頁）以内の原則とする。その他の原稿は5枚以内とする。若し長篇のもので上記規定を超えるものについては、投稿に先立ち編集委員会宛打合せのこと。なお、刷り上り5頁以上の超過分は実費にて執筆者持ちとする。
10. 投稿する原稿は、手書きのオリジナル原稿とそのコピーの合計3部とする。
11. 掲載論文の別刷を希望する投稿者は、その必要部数をカシラに朱書する。
ただし、この場合の実費は全額投稿者の負担とする。
12. 編集委員会は編集の都合により、執筆者の承諾を得て、原稿の一部を省略訂正することができる。
13. 論文の取捨は編集委員会に一任のこと。
14. 論文は下記に送付すること。

〒150 東京都渋谷区神南1-1-1 岸記念体育会館

（財）日本レクリエーション協会内

日本レクリエーション学会「レクリエーション研究」編集委員会

編 集 委 員 会

高 橋 和 敏 (委員長)	池 田 勝 (副委員長)
秋 吉 嘉 範	進 士 五十八
田 中 祥 子	永 吉 宏 英
浅 野 晃 (幹 事)	川 向 妙 子 (幹 事)

Editorial Committee

K. Takahashi (Co-Chief Editor)	M. Ikeda (Chief Editor)
Y. Akiyoshi	I. Shinji
S. Tanaka	H. Nagayoshi
A. Asano (Secretary)	T. Kawamukai (Secretary)

Subscription Published yearly: one issue in Japanese with abstracts in English, by the Japanese Society of Leisure and Recreation Studies. Subscription is available to libraries, institutions, departments and individual members at the equivalent amount of foreign currency of 5,000 Japanese yen as a member (U. S. \$24 at present inclusive of postage).

Address: Subscription Manager, Japanese Society of Leisure and Recreation Studies, c/o N. R. A. J., Kishi Memorial Hall, 1-1-1 Jinnan, Shibuya-ku, Tokyo 150, Japan.

「レクリエーション研究」第10号

昭和58年3月31日 発行

編集発行人 浅 田 隆 夫

発 行 所 日本レクリエーション学会

〒150 東京都渋谷区神南1-1-1
岸記念体育館

(財)日本レクリエーション協会内

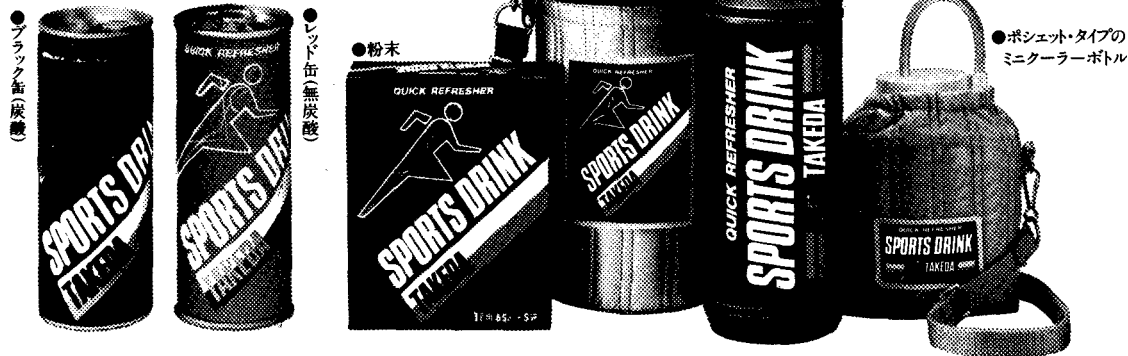
電 話 03-460-5464

郵便振替 東京5-42971

印 刷 株式会社 イセブ印刷

Do! C-up

汗をかいたら、疲れたら、Cアップ。
1缶当たりレモン46個分の
ビタミンC入り。



●ブラック缶(炭酸)

●レモン缶(無炭酸)

●粉末

●クーラーカバー

●スクイズボトル

●ポシェットタイプのミニクーラーボトル

ビタミンCがレモン46個分
ひと汗かいたら
スポーツドリンク タケダ

●1缶(粉末はコップ1杯)当たり、レモン46個分のビタミンC入り。スポーツ時に必要なビタミンB₁、ビタミンB₂、ナイアシンなどの栄養素も補います。●汗で失われた水分やミネラル(ナトリウム、カリウム、リン酸、マグネシウム、クロール)をスムーズに補います。●甘さをおさえたアルカリ性イオン健康飲料。さわやかなレモンの香り、あきのこないおいしさで、どなたのノドにもフィットします。

FRISBEE[®] DISC



〒111 東京都台東区播磨1-96-10 03(871)3181

二十世紀の体育・スポーツ

高宮下 昌充 正

編

A5・218頁
二、五〇〇円

プロローグ

二十一世紀の体育・スポーツ…江橋慎四郎

一章 繰りかえしのきかない育ち盛り

～子どもの発育・発達～

西暦二〇〇〇年のこどもの身長……………

……………高石 昌弘

裏からみた身体発達～寝相のさまざま……………

……………森下はるみ

小学校期の子どものからだ……………宮下 充正

二章 変貌する社会～体育の役割～

身体運動の意義の実現……………石川 旦勝

体育活動の経済的価値……………池田 勝

社会体育活動としてのスイミング

クラブの役割……………林 裕三

三章 心のひずみを生む二十世紀末

～体育とこころ～

ノイローゼ二題……………平田 久雄

観衆スポーツと心のひずみ……………藤田 厚

四章 男女差のなくなる未来～女子の体育～

可能性の広がる女子の体育……………加賀谷淳子

性差をみつめる視点……………跡見 順子

女子体育雑感……………大築 立志

五章 ハンディキャップという

言葉のない未来

分離教育から統合教育へ……………矢部京之助

ハンディキャップを克服

するための体育……………草野 勝彦

六章 地域の特徴を生かす体育

～特色ある体育カリキュラムの作成～

生活時間の中に身体運動を……………石井 喜八

自然体を基礎にした体育教育……………小林 篤

北国のみなの体育・スポーツ……………中川功哉

北陸地方の生活環境特性からみた

これからの学校体育……………山地 啓司

七章 体育を科学する努力

～健康と体力の向上を目指して～

運動サイバネティクス

と調節力……………永田 晟

コンピュータの利用……………青山 昌二

西洋的なもの・東洋的なもの……………小林寛道

バイオメカニクス研究への

興味と期待……………浅見 高明

「身体運動学」の基礎造りに

向けて……………大道 等

八章 見るスポーツの喜び

～エリート・スポーツマンの育成～

鍛え抜かれた身体の動き……………浅見 俊雄

エリート・スポーツ～見るスポーツ

から参加するスポーツへ……………金子 公宥

見るスポーツ……………福永 哲夫

エピソード～二十世紀を飛び越して～

歴史からみた二十一世紀の

体育学……………木下 秀明

過去と未来……………木村 吉次

二十一世紀の体育を展望して……………成田十次郎

「スポーツよいずこへ」……………加藤 元和

杏林書院

〒113 東京都文京区湯島4-2-1

TEL03(811)4887

脳性まひ児の水泳

～スポーツを楽しむながらのリハビリテーション～

矢部京之助・高松潤子・河村光俊著

●A5・168頁・写真多数 ¥2,000 千300

水がからだを支えてくれるので坐位や立位を保つ学習ができる。……………

コミュニティ・スポーツ

斉藤源吾著

●A5・204頁・図表94 ¥1,800 千300

市民が、いつでも、どこでも、好みにあった身体活動を……。その着実な実践の成果をまとめたもの。

日常生活に生かす

運動処方

青木純一郎・前嶋 孝・吉田敬義編

●A5・336頁・図210・表63 ¥2,000 千300

個人の体力の実情に合わせて運動の種類、強さ、時間および回数を適切に指示しなければならない。

動きの教育

Lulu E. Sweigard 著・村井・神崎・江尻・山口 訳

●A5・384頁・図125 ¥3,500 千300

身体のバランスと効果的な動きについて……良い姿勢と効果的な動きの教授法

日本人の体力

船川幡夫・小野三嗣・石河利寛・松井秀治編

●A5・400頁・図149・表139 ¥3,900 千300

日本人の体力がどのようなものであるか……オムニバス形式で叙述……。

頭をねる体育

渡辺俊男著

●新書版・320頁 ¥800 千250

体育が必要かつ重要であるのは、体育をとおして「あたま」をつくり得るからである。



株式会社

ぎょうせい

営業所 東京都新宿区西五軒町52 ☎162
電話(03)268-2141(大代表) 振替東京9-161

みんなのスポーツ 事例集成

社会体育
体力づくりの実践

みんなのスポーツ事例研究会 編集

加除式(バイフファイル)・B5・九〇ページ・九〇〇〇円(千実貫)
社会体育や体力づくり、レクリエーション活動に携わる
方々の悩みにズバリ応えた、みんなのスポーツ情報誌

現代レクリエーション百科

江橋慎四郎・金田智成・松原五一 編集

レクリエーションの最新の知識から伝統的なものまで、
約一、〇〇〇項目を写真、図版を豊富に入れて解説。

B5・四、五〇〇円(千400)

あそび百科

—子供の身体遊戯—

(財)日本体育協会 日本スポーツ少年団 編

子供の知恵と体力で動きまわる「あそび」一五〇種をイラスト入りで解説し、「あそび」を忘れた現代っ子に健やかな夢と希望を贈る決定版。 A5・一、六〇〇円(千300)

野外へ出かけよう ハンドブック

木庭修一・束原昌郎 共著

新書判・八五〇円(千250)

野外へ出かける計画と準備から食事・野営に必要な知識を、
実例を加えてわかりやすく解説。

記憶していると身体にいい言葉がある。[アイソトニック]

大塚製薬



アイソトニック・ドリンク[ポカリスエット]

都市の庭

●つくし野パークロード及び駅前広場／昭和55年12月竣工



株式
会社

都市緑化に貢献する

石勝エクステリア

代表取締役 涌井 史郎

本社／東京都世田谷区玉川1-16-7

TEL 03(709)5591代 千158

静岡営業所／静岡県三島市富田町12-48

TEL 0559(73)1177 千411

九州営業所／福岡市博多区博多駅東1-12-8

TEL 092(471)7981 千812

JOURNAL
OF
Leisure and Recreation Studies

No. 10

A Study on Recreation Activities in Rivers and Riversides

..... Makoto Suzuki

The Study of the Impact of Outdoor Recreation Activities on Its Activity Areas

..... Masaru Ikeda and Toru Takano

The Study of Leisure Behavior of the Users of Federal Recreation Areas Administered by
Three Federal Agencies

..... Munehiko Harada, Geoffrey C. Godbey and
David R. Chase

Leisure in Later Life John R. Kelly Ph. D.

Japanese Society of

Leisure and Recreation Studies

MARCH 1983